2020年 アジアターニングポイント説

～ アジア新800年のために私たちがなすべきこと ～

2012年1月15日（日） 於：広島

文明法則史学研究所　浦崎太郎先生

21世紀のアジアの課題
　　2080年を完全燃焼状態で迎えること

私たちの課題
　　2020年、アジアに新秩序の灯を点すこと、
　　アジア新秩序の確固たる礎を築くことである

記録：酒井伸雄（ヨガナンダ）
http://yogananda.cc

＜ 目 次 ＞

２０２０年 アジアターニングポイント説 概要　　1
文明法則史学の研究を始めたのは、なぜか　　9
５世紀の特異性を、どのように発見したか　　２８
質問コーナー　１　　４５
「５世紀アジア固定説」は、本当に正しいのか　　４６
２１世紀、アジアはどうなるのか　　５７
私たちの使命は何なのか　　６６
まとめ　　７５
質問コーナー　２　　７８

講師　：　浦崎太郎先生

昭和40年3月 岐阜市生まれ
平成元年3月 広島大学大学院教育学研究科修了(理科教育学)
現・岐阜県立高校教諭

平成2年、古今東西の歴史から共通の盛衰パターンを探る文明法則史学に出会い、平成7年より、本業の傍ら、発見者の村山節、後継者の林英臣の指導を受けつつ、若手有志グループの一員として学説の検証、および研究で会った地域や時代の研究に従事。

平成11年の訪韓後に古代史の日韓比較を行い、これがヒントとなって5世紀末の20年間がその後800年間のアジア史を決定づけた特異な時代であることを発見。その1サイクル（＝1600年）後にあたる21世紀末をアジアが望ましい状態で迎えるため、21世紀初頭を生きる私たちが解決・達成すべき課題について、文明論的な見地から提言を行っている。

文明論のほか、教育分野でも全体像の究明や異分野との協働を得意とし、学校・行政・市民活動団体等に対して豊富な研修実績をもつ。

講演者からの謝辞

私が、アジア史における5世紀の特異性に気づき、故・村山節先生がご発見になった「文明サイクル」との関連において「2020年アジア・ターニング・ポイント説」を提唱したのは、21世紀に入って間もない、平成13年（2001年）のことでした。

当時、21世紀の重要性を訴えても、スケールが大きすぎるのか、私の伝え方が拙かったのか、聴衆には私の危機感は伝わらず、ほとんど当事者意識も持っていただけませんでした。それは、さらに研究を重ねて「私たちが生きているであろう2020年が分岐点である」と“身近に”してからも同様でした。そこで不本意ながら、研究成果の普及については機が熟すのを待ち、本業である教育分野の改革に専念することにしました。

それから約10年の歳月が流れ、第二の故郷・広島を訪れた折に酒井伸雄さんと再会。私の研究成果に耳を傾けていただくことができました。そしてこの再会をきっかけとして、平成24年（2012年）1月、広島にて発表の機会を設けていただく運びとなりました。

そればかりか、酒井さんからは「講演録をつくりたい」というお申し出までいただき、以後、3時間にも及ぶ講演ビデオを聞き起こして下さいました。おかげさまで、「いつかはまとめて世に送り出したい」と思いながら、「果たして何年先になるのか」という、半ばあきらめかけて夢が、思いのほか早く実現することとなりました。

その後、原稿を送っていただきながら、じっくりチェックや修正を加える時間をなかなか捻出することができずに来ましたが、今春ようやく時間を割くことができ、研究成果をまとまった形で世に送り出せることとなりました。

これもひとえに、酒井伸雄さんのご尽力の賜。厚く御礼申しあげます。読者の皆さまには、このような経緯をご理解の上、この講演録をお読みいただければと存じます。

平成25年 5月吉日
講演者 ・ 浦崎 太郎

おことわり

1．この講演録には文明法則史学の内容が含まれていますが、図表の多くは、村山節先生や林英臣先生によるオリジナルを参考に講師（浦崎太郎氏）が作成したものです。

2．文明法則史学に関する村山節先生の原典には『文明の研究』『波動進化する世界文明』等がありますが、このうち後者は、容易にお求めになれます。

村山節『波動進化する世界文明』（博進堂）
http://www.hakushindo.jp/store/products/detail.php?product_id=203

3．文明法則史学に関する基本的な情報は、インターネット上でもご覧になれます。

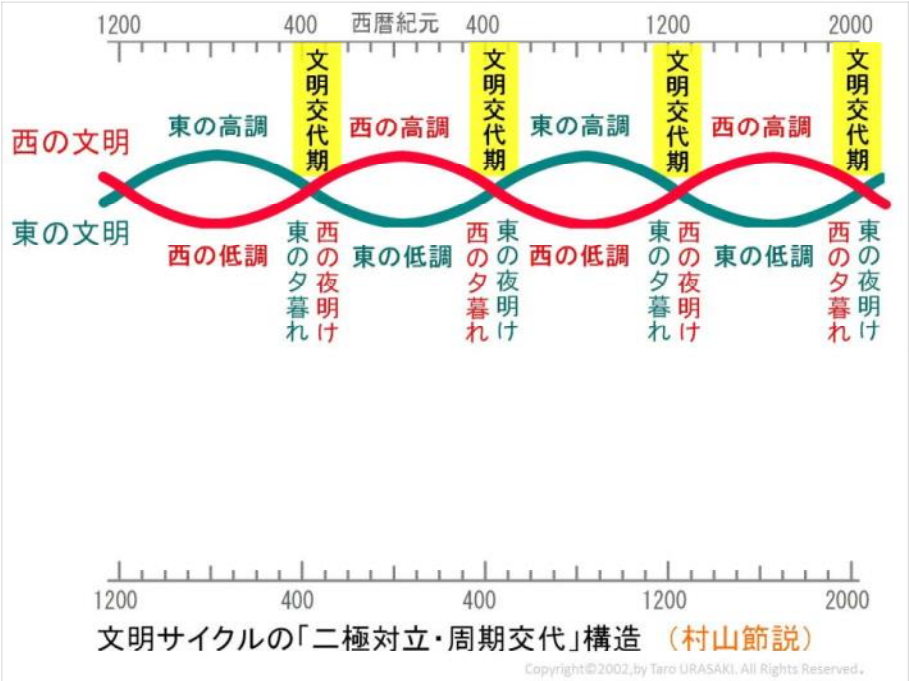
文明法則史学研究所（公式ホームページ）
http://bunmeihousoku.com/

＜２０２０年　アジアターニングポイント説 概要＞

みなさんこんにちは。岐阜県からやってまいりました、浦崎太郎と申します。広島には昭和58年4月から平成元年3月まで、6年間お世話になりました。ですから広島は第二の故郷ということで、こういうことで戻ってくることができ、とても嬉しく思っております。三時間という時間はあっという間に過ぎてしまうと思いますので、早速始めさせていただきます。

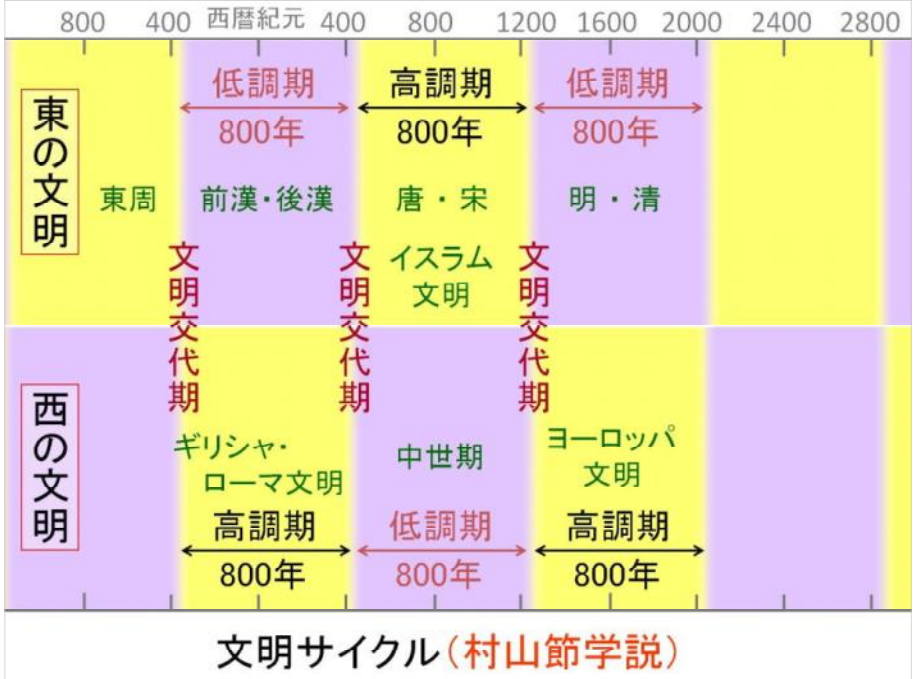
今日は『2020年アジアターニングポイント説、アジア新800年のために、私たちがすべきこと』という演題でお話をさせていただきたいと思います。

まずはじめに、今日三時間の内容をさらっとお話しさせていただきます。
古今東西の歴史には1600年の巡り、周期性があり、それを探っていく学問が、文明法則史学でございます。



このように文明には、西の文明、東の文明という二つのグループがあります。東のグループが好調の時、これは昼だと思ってください。昼の時期、もう一方の西のグループは夜である。片一方が夕暮れを迎えると、もう片一方は夜明けを迎える。
ここで申しますと、東で昼を迎えていたものが、時とともに夕暮れを迎え、それと同時に西が夜明けを迎え、西の昼の時期が始まります。そして800年に一度、主役の昼と夜が入れ替わっていきます。こういう法則性について研究しているのが、文明法則史学です。

それで２１世紀の位置というのは、どんなところに当たるのでしょうかということですが、これがおよそ二千数百年、三千年近くを図式化したものです。



昔、古代中国文明というのがございまして、紀元前4世紀ぐらいに文明交代期がありました。その後中国は、前漢とか後漢とか、三国時代も含めて夜の時代へ入っていきます。ちょうどその頃西の方では、ギリシャ文明、ローマ文明が、非常に栄えていた時代です。

その後、おおむね4世紀から5世紀ぐらいにかけて、再び文明交代期が訪れました。これはゲルマン民族大移動というものによりまして、ヨーロッパの方はローマが完全に滅びてしまい、ちょうどその頃東の方では、隋とか宋とかそういう文明が起こり始めました。そしてヨーロッパの方は、中世期として知られている夜の時代です。

それからまた800年が経過して、だいたい13世紀頃、この時にはモンゴル軍、蒙古の席巻というのがあり、アジア一帯の文明が終焉を迎えます。そしてその代わりにヨーロッパでは、その頃を境にして文明期、ヨーロッパ文明を迎える、という巡りがある訳です。

それをふまえて、21世紀のポジションはどこにあるのかというと、ここになるのです。

もし過去の巡りがそのまま訪れたとするならば、21世紀はヨーロッパが夕暮れを迎えて、代わりにアジア、東の方が夜明けを迎える、そういうような文明交代期に当たるということです。21世紀の位置は、西洋から東洋に高調期が移る文明交代期に当たっているということです。

それで今日は、5世紀に何が起こったのか、ということを元にして、21世紀はどうあるべきかということを考えていきます。

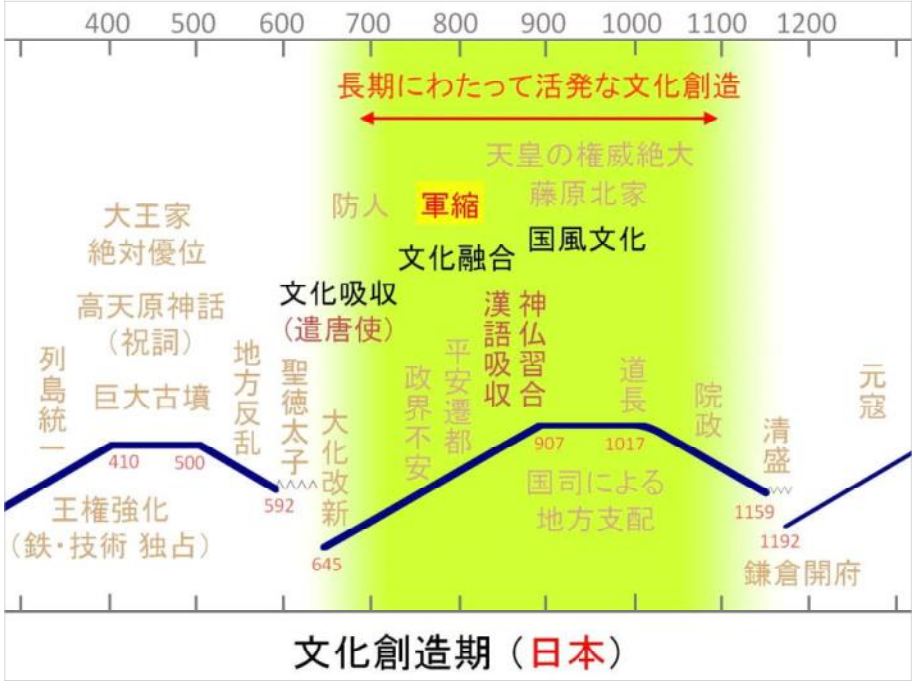
図をご覧いただければ分かるように、前回アジアが文明の夜明けを迎えたのは、今から1600年前ですから、21マイナス16で5世紀です。そこで「5世紀の東アジアの歴史展開に注目し、それを参考にして21世紀のあり方を考えてみよう」というアプローチをしてきました。ですからこの後、5世紀の話がたくさん出てきます。

特に研究としてはあちこち、西アジア、インド、中国、それと韓国、日本、すべてやってきましたが、時間の都合もありますし、また高校で世界史をよほどしっかり勉強して、大学センター試験を受験するような子たちでないと、知識の点ではかなり厳しいものがあると思います。ですので、みなさん比較的イメージしやすい日本列島と韓国の歴史を使いながら説明させていただきたいと思います。

実は私自身、高校生の時は世界史を学んでいませんでした。30歳を過ぎてから初めて

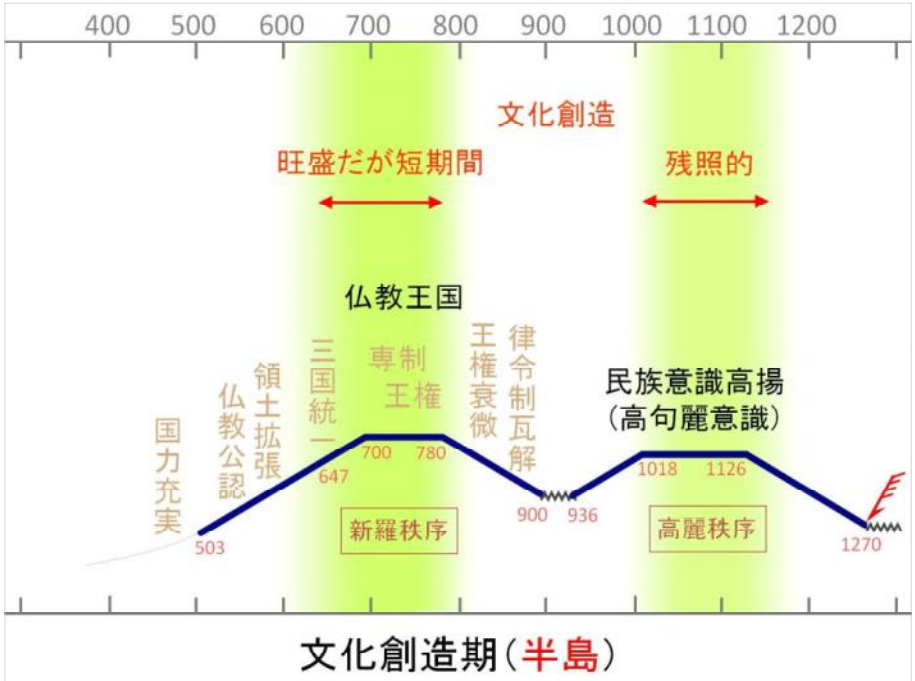
世界史の教科書を開いたのですが、それから随分、理解をするのに時間がかかりました。

5世紀から13世紀に注目すると、例えば日本はどうでしょうか。…次のような感じで、日本は歴史が巡っています。



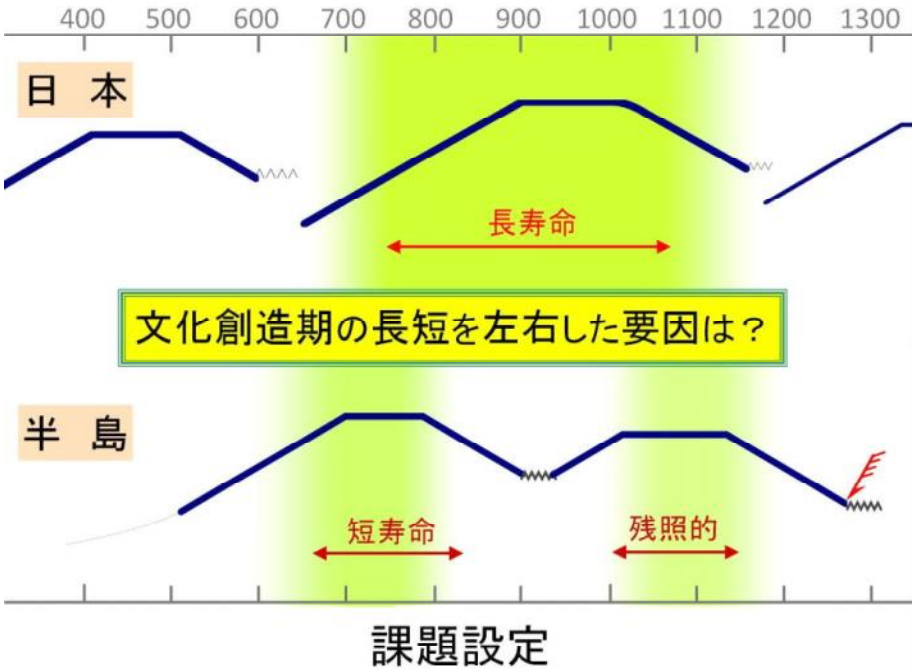
日本史は、皆さんよくご存じの通りですね。奈良時代の少し前、飛鳥時代や白鳳時代の頃から平安時代が終わるまで、ずっと途切れることなくいろんな文化が花開いてきたのがこの国の歴史なんです。日本史しか知らないと、世界中いつでも文化が花開いているものだと思ってしまうのですが、世界を見てみると、意外とそうではないのです。

例えば朝鮮半島、韓国の方には、新羅という国があり、その後に高麗という国がありました。



その中で文化が栄えた時代はどのあたりかといいますと、案外短いのです。新羅のところには「旺盛だが短期間」と書きましたけど、せいぜい百年ちょっとぐらいです。高麗でもやはり百年ぐらいでして、それ以外は国がガタガタであったり、抗争が繰り広げられたりしていて、とても文化発展どころではありませんでした。半島に限らず、世界史の中にはこういった傾向が数多く見られるのです。

「文化が栄えた国と地域、栄えなかった国と地域、こうした差がアジアの中にもあるが、この原因は何なのか？」「日本ではずっと文化が栄え、例えば韓国ではなぜ十分に発展できなかった。その要因は何なのだろうか？」と思い、その要因探ることにした訳です。



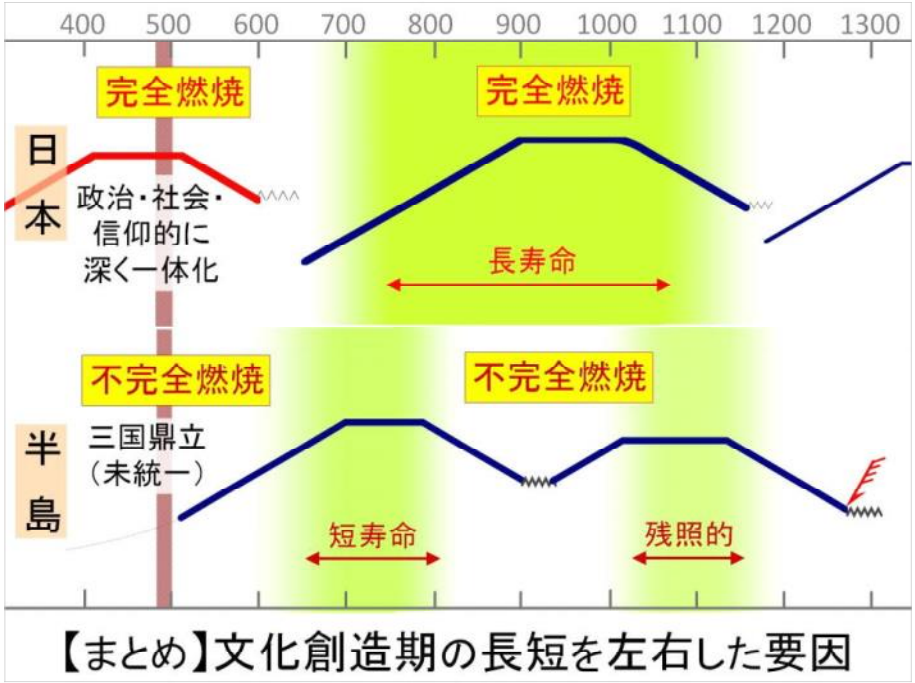
まずは結論から申し上げます。

日本の社会は、奈良・平安時代に完全燃焼していましたが、そこから遡ること数百年、「5世紀の終わり頃の様子に注目していくと、その後の歴史が分かる。」というのが今日のテーマなんです。だいたい西暦480年から500年ぐらいまでの時代に注目していくと、その後の時代が手に取るように分かるのです。

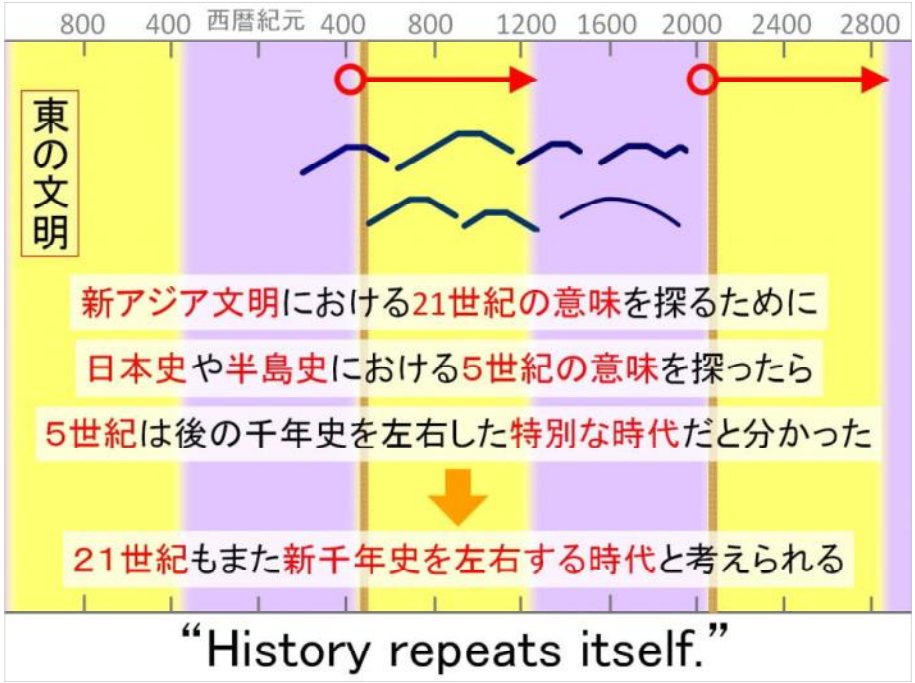
日本の西暦480年から500年といえば、ちょうど大和朝廷時代、古墳時代の全盛期でした。この時代、日本はとても安定していて、完全燃焼していた。ですから後々、奈良・平安時代に完全燃焼する国になった。

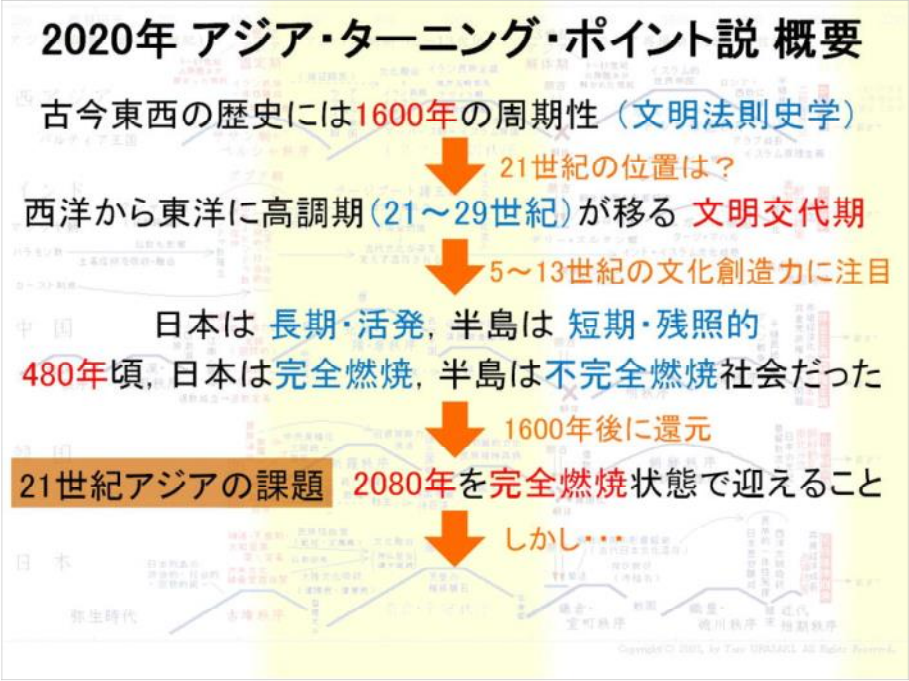
それに対して、朝鮮半島の場合には、三国時代といって、あの狭い朝鮮半島の中で三つの国が相争っていた。そういった体質が残ってしまったが故に、その後もお互いに対立・抗争を繰り返して、文化発展どころではなかったのが韓国の歴史である、という訳です。

5世紀に注目したのは、「我々が21世紀にどう生きるか」を探るためですが、実はその5世紀、1600年前というのは、非常に特別な時代であること。「５世紀の終わりに完全燃焼であったか不完全燃焼であったかが、これが後の歴史を決めていた。」という法則性に気づいた訳です。



ということは、この巡りが今再びやって来たならば、21世紀もまた、1600年というサイクルの中では、とても重要で特別な時代になるということです。

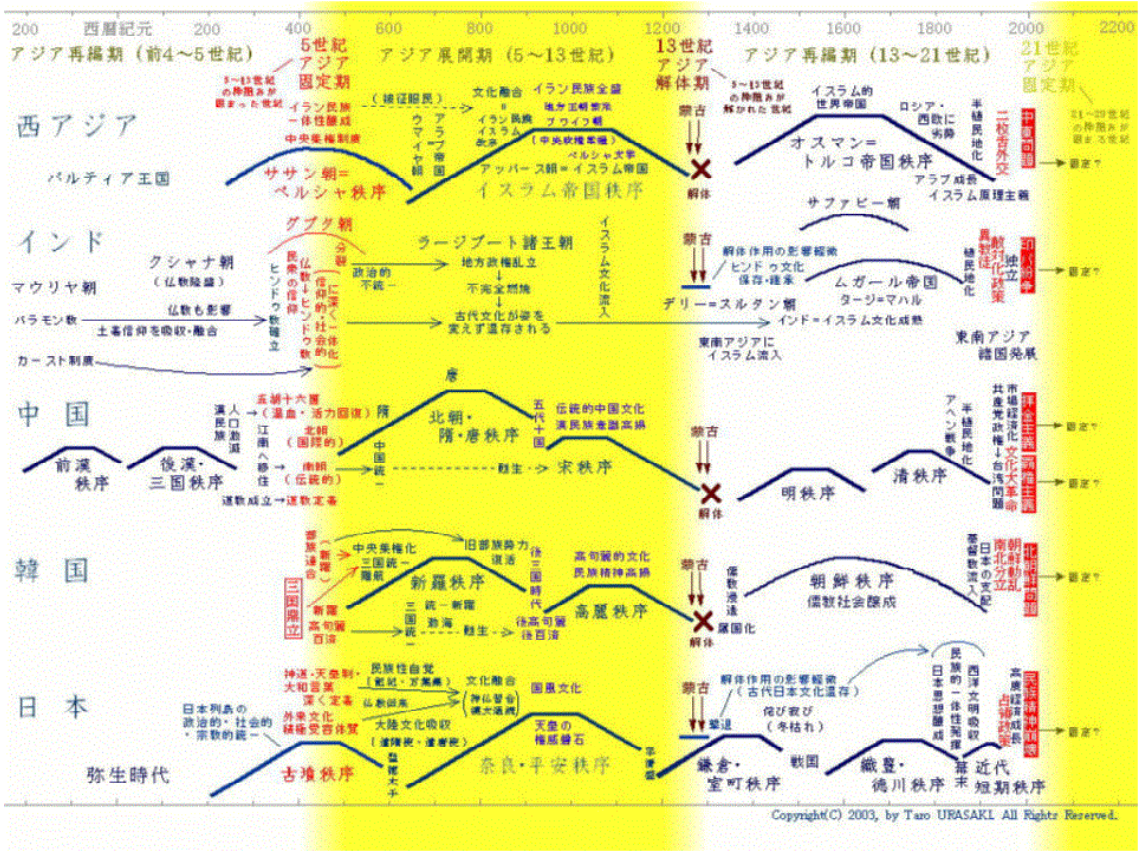




それでは我々の課題は何なのか。

もし歴史が1600年の周期で正確に展開しているならば、今度は2080年から2100年までの20年間に、また新しい枠組みが固まる時代が訪れることが予想されます。ですから「ぜひ、この20年間完全燃焼の形で通過をしたい」というのが、私たちに課せられた大きな課題なのです。

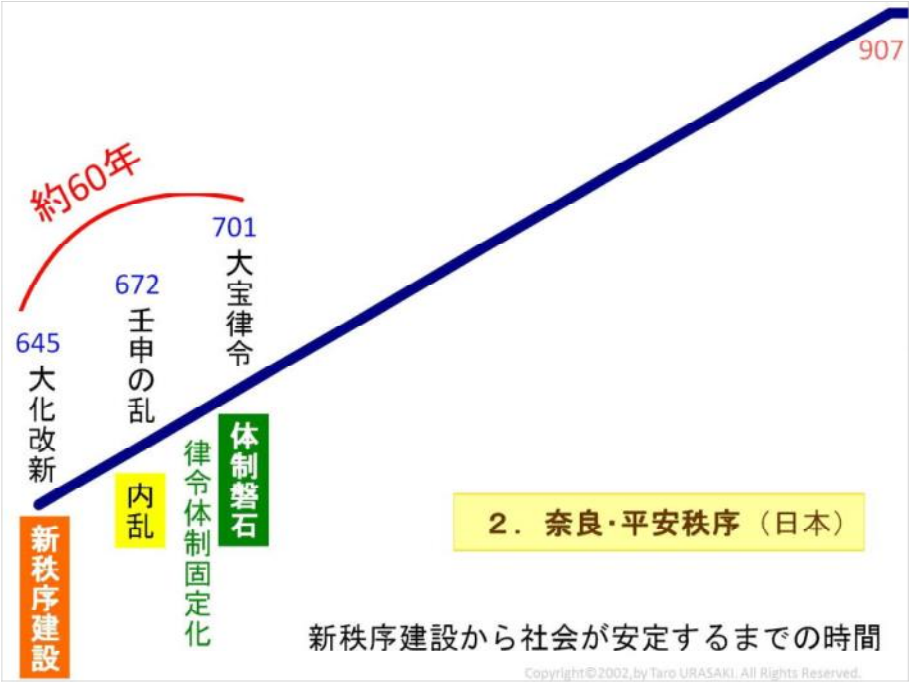
「アジアの課題は、2080年を完全燃焼の形で迎えること。」… では、今のアジアはどうなっているでしょうか？　見てみることにしましょう。



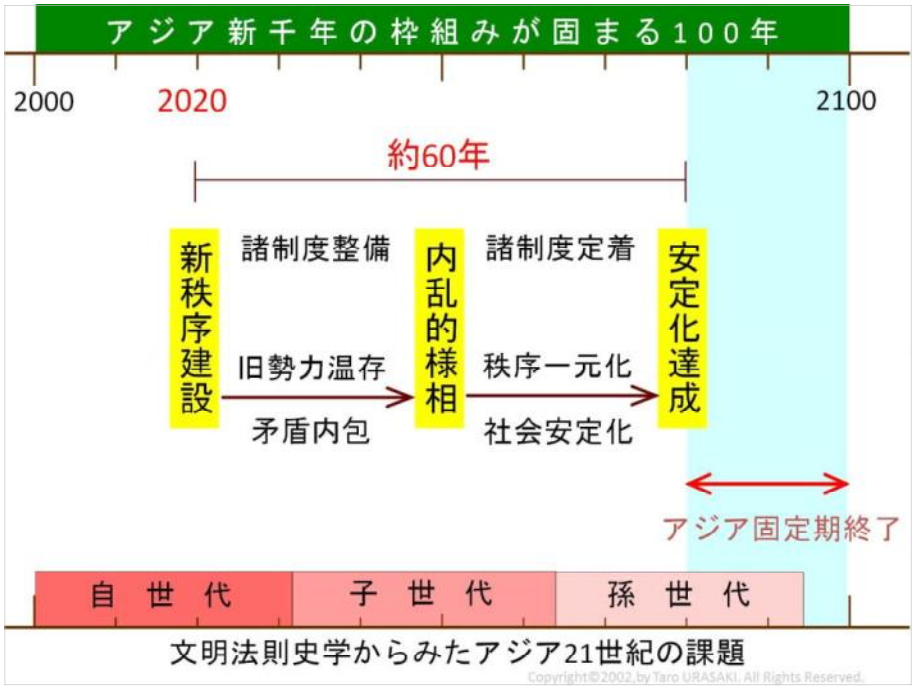
これはアジア一帯の歴史を図式化したものなのですが、一番右の方、白から黄色に変わるあたりが21世紀です。
西アジアには中東問題があり、南アジアにはインド・パキスタンの紛争があり、中国は経済的には伸びているものの、荒んだ面を抱えている、という状態です。朝鮮半島には言うまでもなく北朝鮮問題があります。日本も今は過去の良いものをかなぐり捨ててしまって、とても荒れている、やせている、そういう状態に来てしまっています。
もし今このような状態が数十年続いて、21世紀の終わりを迎えたならばどうなるかというと、これからの800年～1600年の間、アジア全体がガタガタになってしまうことが予測されます。

では、何とかいい手はないのか。2080年を安定した状態、完全燃焼の状態で迎えようとしたならばどうすればいいのか。…そう考えたならば、唯一使える方法があります。

大化改新、明治維新のように、新しい秩序が誕生してから60年後という時代が、実はとても安定しているのです。例えば、律令国家でいうならば、大宝律令が出たころから日本は律令国家としてグーンと伸びていきます。ですから、「誕生から60年という時期を2080年と重ねるにはどうすればよいか？」を考えていけばいいのです。



「2080年を60歳で迎えるようにするにはどうすればいいのか？」という訳ですので、つまり「2080年から60年を引いた2020年に新しい秩序を建設する]ということが課題となってきます。



図の一番下に、自世代、子世代、孫世代と書いておきましたが、これは子どもや孫の世代に先送りしていい課題ではなく、2020年にむけて、今後十年間は生きていくであろう、我々の世代の課題だ、ということです。

つまり私たちは、アジアの新800年、これから何百年の間の子孫の鍵を握っている、非常に責任の重い世代だという訳です。

以上が、今日これから三時間かけてお話しする内容です。

2020年 アジアターニングポイント説

- 文明法則史学の研究を始めたのは、なぜか
- 5世紀の特異性を、どのように発見したか
- 「5世紀アジア固定説」は、本当に正しいのか
- 21世紀、アジアはどうなるのか
- 私たちの使命は何なのか

＜文明法則史学の研究を始めたのは、なぜか＞

今までのところで、皆さんの頭の中にたくさんのクエスチョンマークがあることと思います。例えば、先ほど、なぜかいきなり「5世紀」という話が出てきましたが、「そんなこと、なぜお前が発見したんだ？」という疑問をお持ちのことと思います。また、今、日本や韓国の話をしましたが、「それらは本当に普遍性はあるのか？」…それが疑問としておありかと思います。そして、今日お集まりの皆さまは「アジアはこれからどうなるのか？」「我々の使命とは何なのか？」ということに関心をお持ちと思います。

一部はすでに結論めいたことをお話ししましたが、このような疑問にお答えしていきたいと思います。

まず文明法則史学の研究を始めたのはなぜか？という問いにお答えします。

文明法則史学は、古今東西の歴史に潜む共通の展開パターンを探る学問で、この発見者であり先駆者は、日本人の村山節（みさお）先生です。

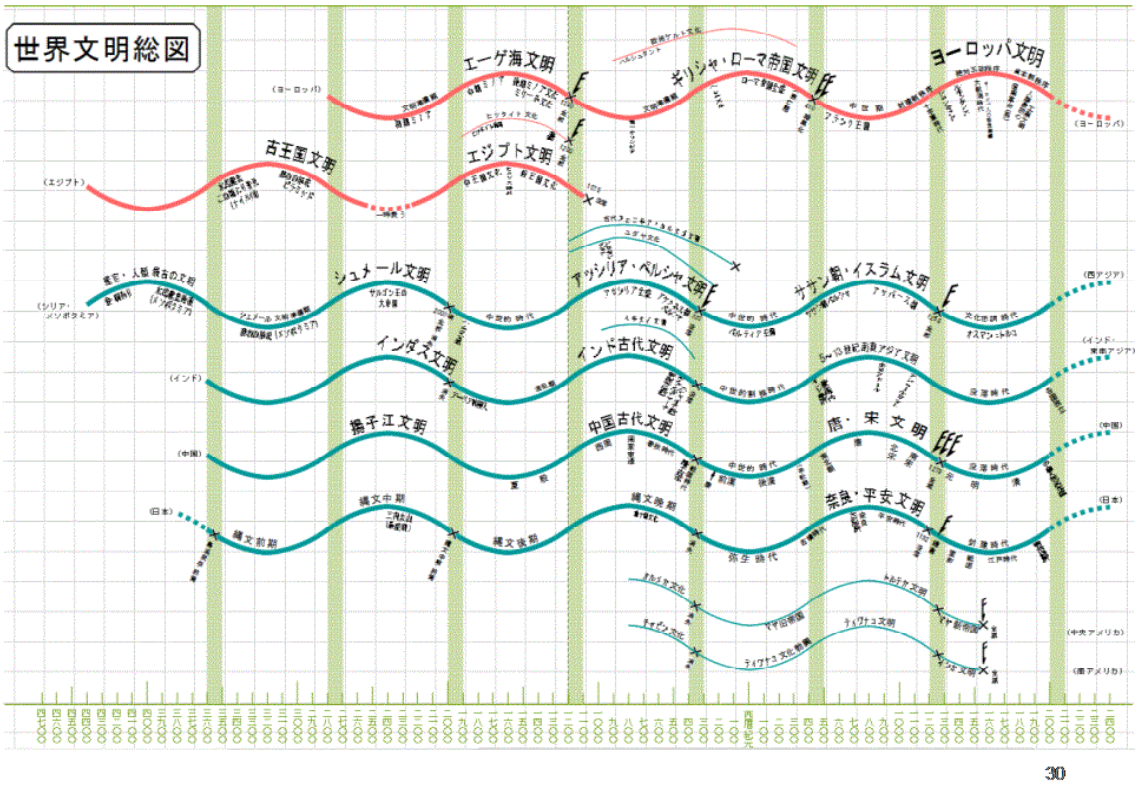
村山先生は1911年（明治44年）にお生まれになって、10年前（平成14年）に亡くなられました。
村山先生はある時に天啓があって、「歴史は直線の分析より始まる」という天の声が聞こえたのだそうです。そして「それは何なんだろう？」と、人類何千年の歴史を一枚の年表にし、時間軸の目盛りを等分、同じ間隔で作られたのです。

普通は年表を作りますと、近年になればなるほどいろんな事件がありますので、太古の縄文時代より現代の昭和や平成の方がスケールが長くなってしまいます。
縄文時代という一万年ぐらいあったものと、たかだか数十年の最近の事象とを比べ、最近のものの方が長くなってしまっては比較になりませんので、長い廊下に紙を貼り合わせて年表を作り、すべて10年１㎝刻みの等間隔で書いていかれたのです。

そしてある日それを遠くから眺めていると、なにか塊（かたまり）が等間隔で並んでい

るということに気がつかれたのだそうです。
　世界史が激変する時期が等間隔で並んでいる。「その間隔を年表に戻って調べてみると800年だった」ということです。
　それをさらによく見てみると、おおざっぱに西のグループと東のグループがあることにも気がつかれた。これが昭和12～13年、まだ戦前のことです。

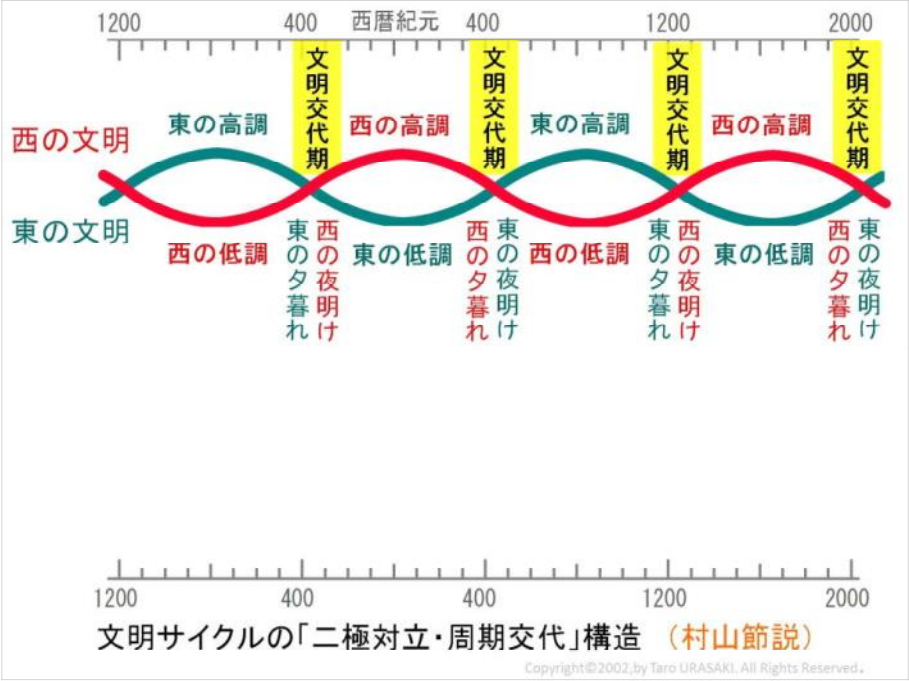
　これで「世界文明総図」という、世界各国の歴史がどのように流れているかということを示す図を、村山節先生がお作りになったのです。ただしこの図は、原図とは少し異なり、私（浦崎）の手がだいぶん加わったものであることをお断りしておきます。



　村山先生は、昭和12～13年の頃、この文明の持つ法則性を発見されているのです。そして驚くことに、その時にすでに予言されているんです。

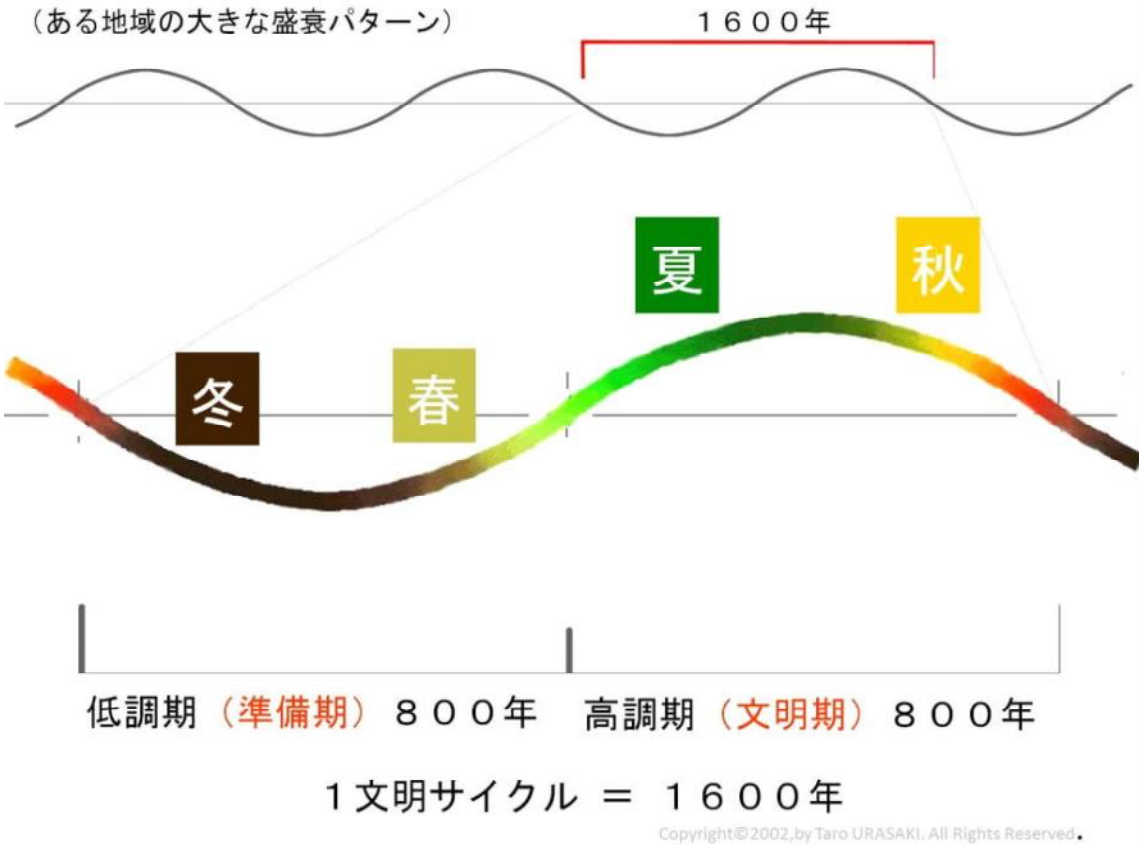
『21世紀はアジアの時代である』

と。その先見性をお分かりいただけますでしょうか、戦前といいますと、まだアジアもアフリカもヨーロッパの植民地の時代です。そんな時代に村山先生は「21世紀はアジアの時代が来る」ということを予言されていたということです。



このような仕組みを、村山先生は当時からご発見になっていたということになります。これを「文明サイクル」といいますが、この巡りについてもう少しお話ししたいと思います。

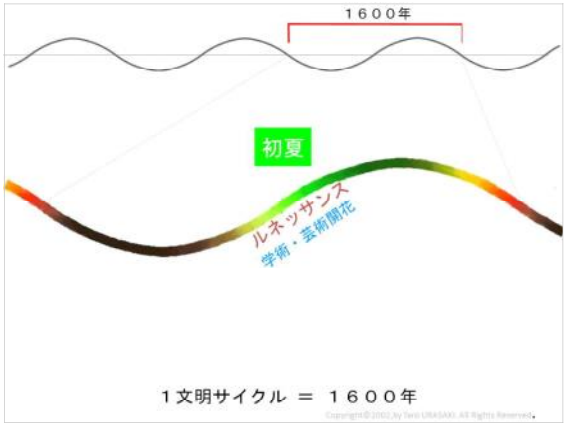
これはまさしく、温帯に属する、日本の四季の巡りと似ています。歴史にも、「冬、春、夏、秋、」という巡りがあるのです。



最初に訪れる冬と春の時代、これが「夜」の時代と申し上げた低調期に当たります。先ほど「昼」と申し上げた時期が、夏～秋、高調期ということになります。ですから低調期800年と高調期800年、これがセットになっています。

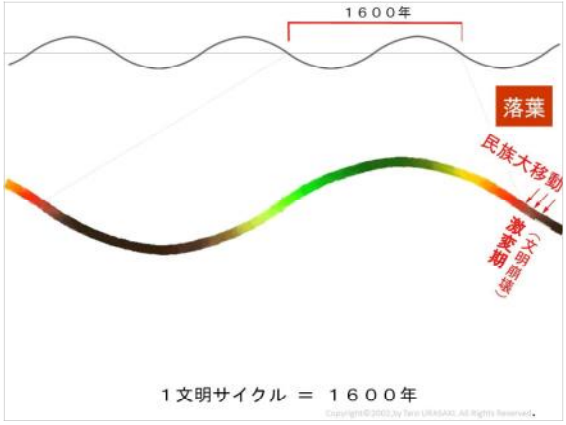
その内訳です。最初に訪れるのが「民族大移動」に象徴されるような激変期です。これは木の落葉、渡り鳥の飛来に相当するような出来事です。落葉の後は完全に冬の時代になり、武力政権、軍事政権が現れたりします。

その後、社会は少しずつ落ち着いてきて、やがて春に向けた準備が進んでいきます。「春先にはこの文明準備現象のようなことが起こる」という解釈を、村山先生は述べておられます。私もこの「文明準備現象」という言葉がとても印象に残っていて、長年「文明準備現象とは何なのか？」という問いが頭の中に残っていました。



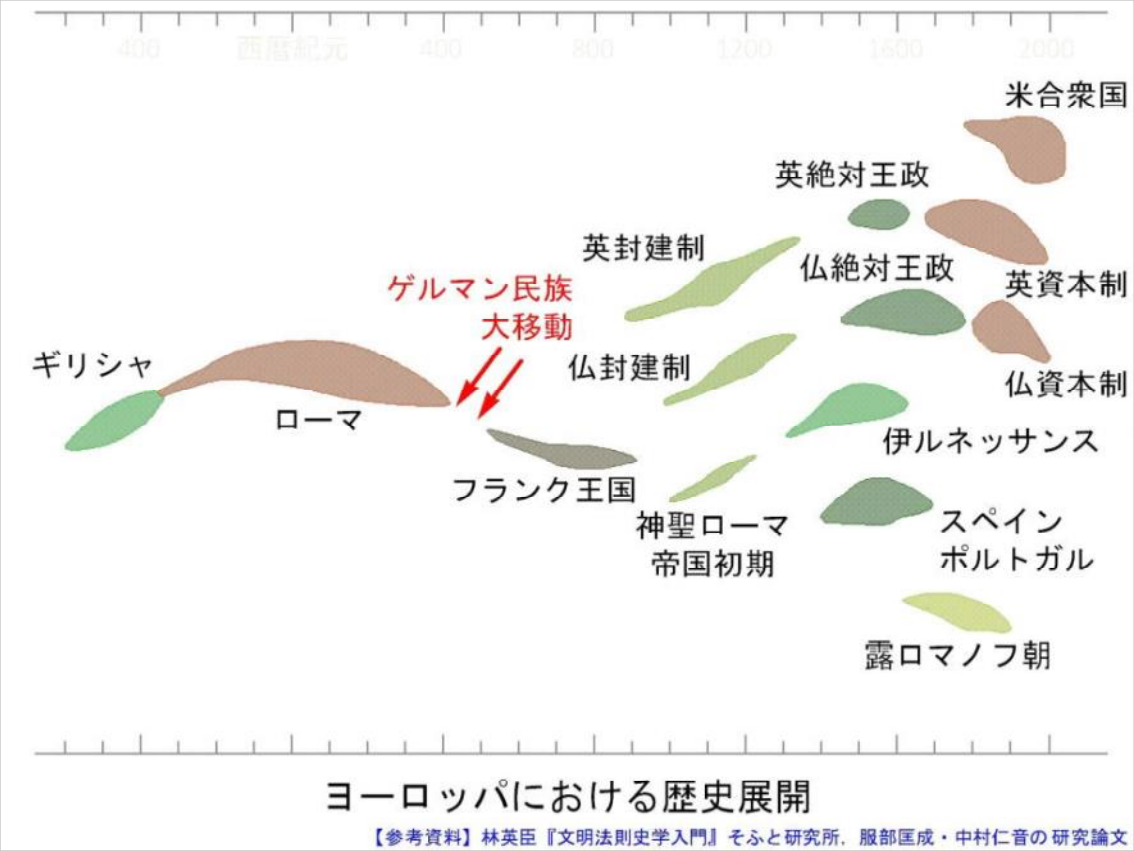
次は新緑の時期、ちょうどゴールデンウイークの頃でしょうか。新しい木の芽が出てきて若葉が茂ってくる季節、これがルネッサンスの時期に当たります。つづいて迎える夏は、とても勢いが盛んな時代です。例えば、ヨーロッパには大航海時代があり、スペイン、ポルトガルが世界を席巻しました。その800年前には何があるかというと、「剣かコーラン

か」と、アラブが一気に膨張する時代がありました。イスラムのマホメットの時代です。さらにその800年前になりますと、ローマ帝国が、イタリア半島だけだったのが、地中海一帯を領土にしてしまう爆発的膨張をしたのが、ちょうどこの時期に当たります。



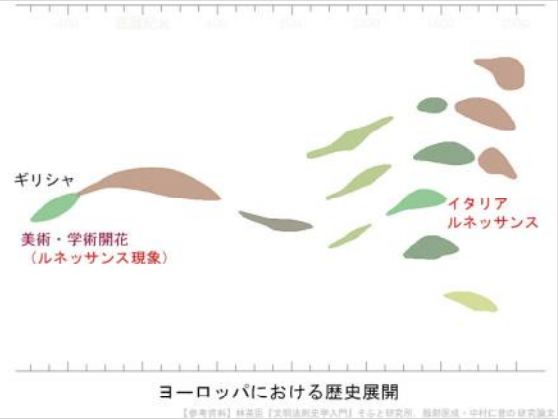
それから夏から秋へと向かっていって、実りの時期を迎え、文明が爛熟し、最後にまた落葉の季節を迎え、この1600年の周期で繰り返しているということなのです。そしてこの1600年周期のことを村山先生が「文明サイクル」（C.C. Civilization Cycle）と名付けられたということです。

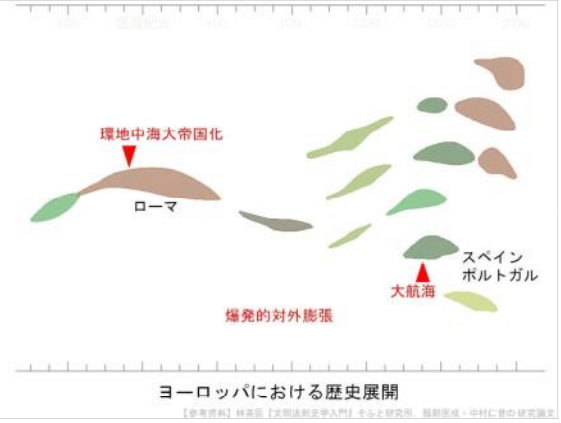
もう少し具体的に見ていきます。西の文明は古くはエジプト文明などもありましたが、少し古すぎてイメージしにくいので、比較的イメージしやすいところでお話しさせていただきます。ギリシャから始めていきます。



ギリシャ、ローマの時代、ゲルマン民族の大移動、ここまでがヨーロッパ文明の高調期かと思われます。そしてその後、フランク王国や封建制と言われる時代がありました。このあたりが中世期でしょうか。そしてイタリアルネッサンスがあり、大航海の時代があり、絶対王制の時代があり、そして今日に続く資本制の時代があり、そのヨーロッパからアメ

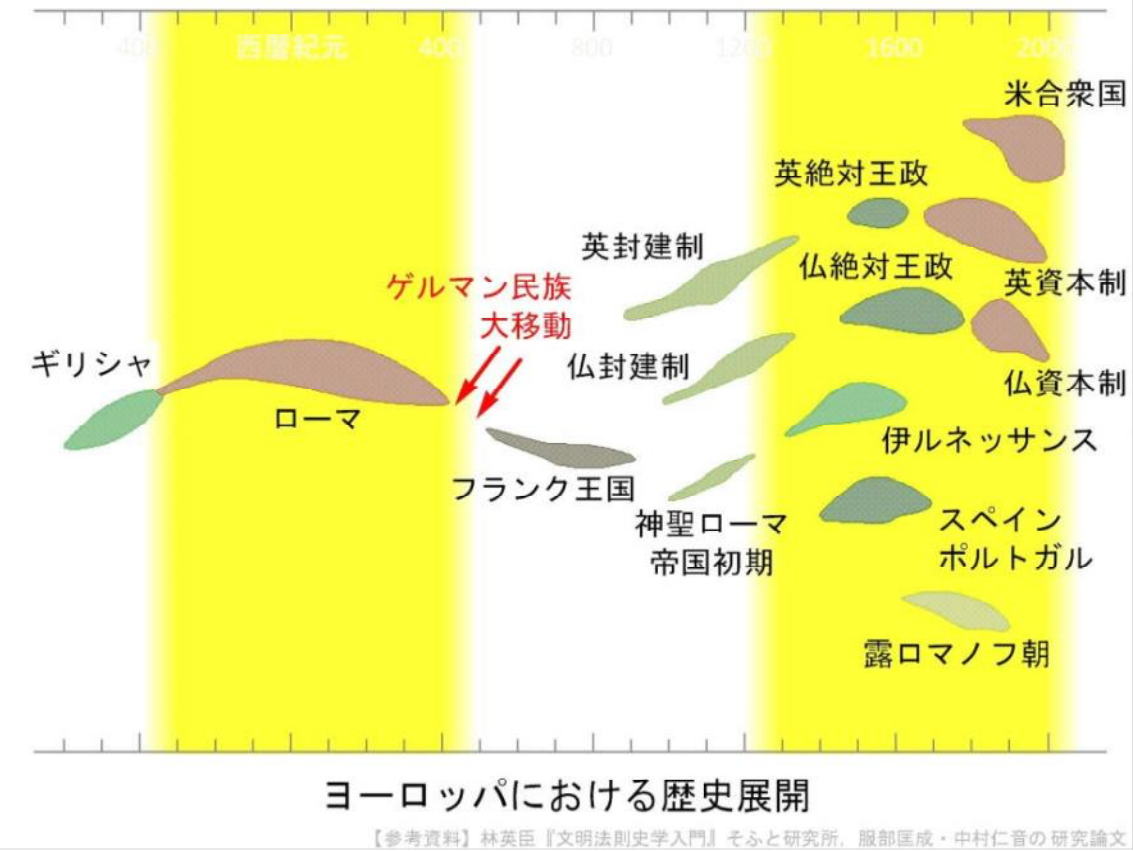
リカも出てきました。これがおおよそこの二千数百年間のヨーロッパの歴史展開です。
　まずはギリシャ、ローマの時代、これがヨーロッパに於ける前回の高調期です。ゲルマン民族大移動が文明交代期に当たり、その次の時代が中世期、文化創造が低調な時期に当たります。その後のヨーロッパ文明、ルネッサンスがあり大航海があり、絶対王制や資本制があり、この辺りの時代がヨーロッパ文明創造期、高調期ということになります。



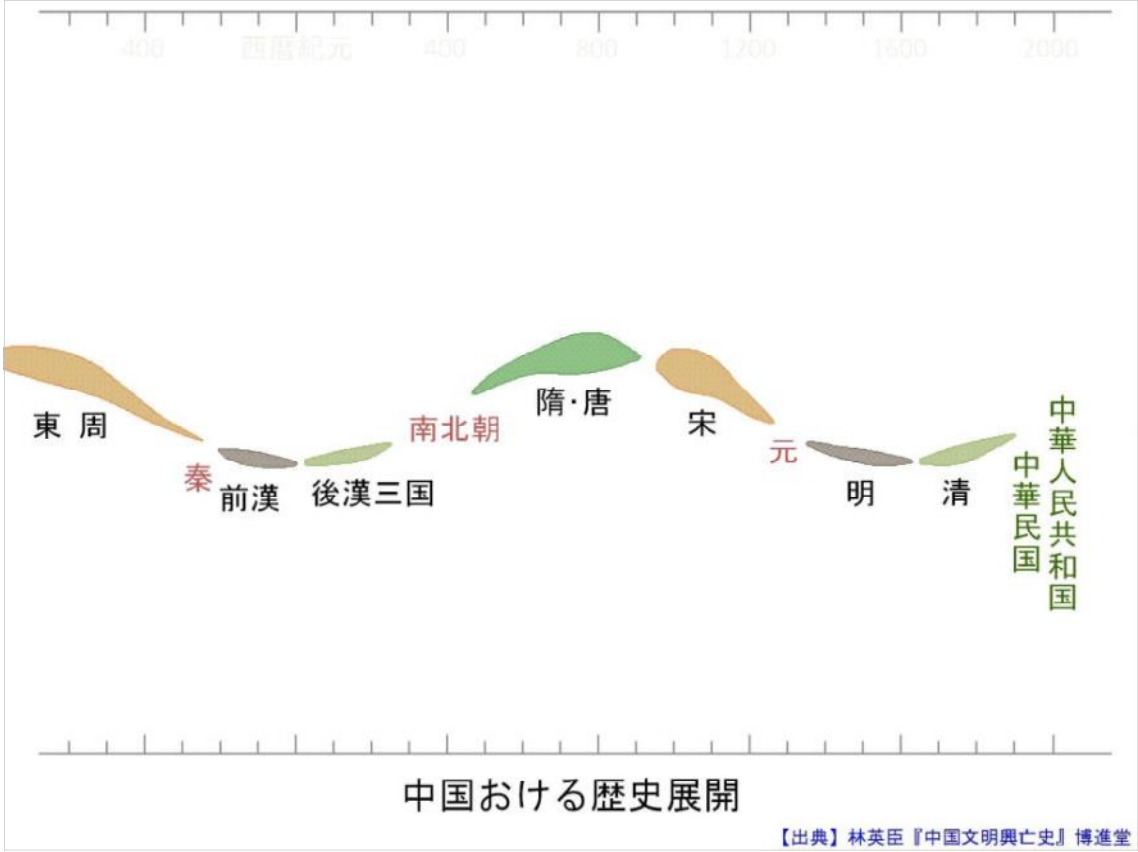


　ギリシャの時代には、美術、学術が花開きましたが、これは一種のルネッサンス現象です。そしてその1600年後に訪れたのがイタリアルネッサンスです。ローマの時代、環地中海大帝国化が起こりましたが、その1600年後に訪れたのが、いわゆる大航海です。このように、1600年ごとに同じような現象が起こっているということです。

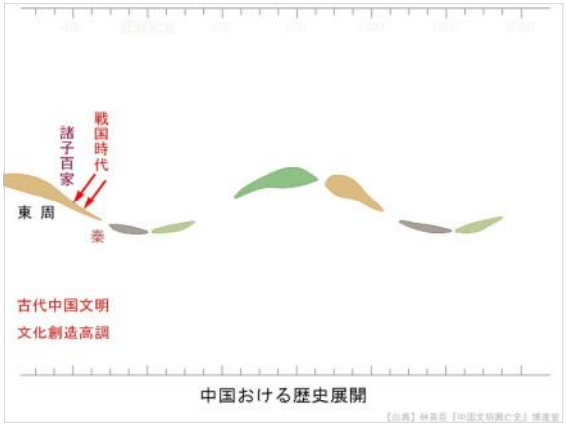
　その様子を色づけをしてみました。黄色で色づけをしたところが高調期、白いところが低調期ということになります。

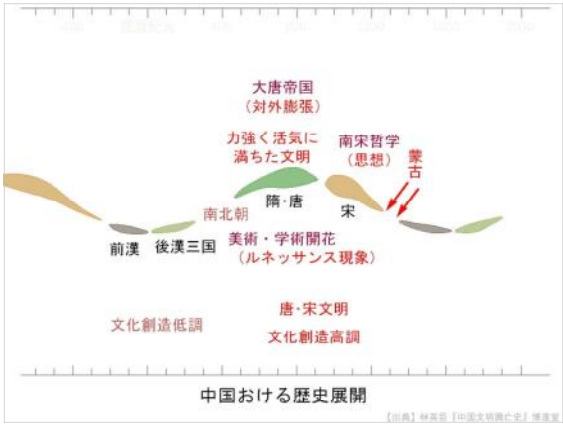


　つづいて、西の文明と東の文明を比較するために、中国の歴史展開を概観してみたいと思います。



周の時代から見てみると、次に秦の始皇帝の時代があり、前漢、後漢、三国時代という時代があり、南北朝時代、隋や唐の時代があり、宋の時代があり、元、明、清と続き、今日に至っています。

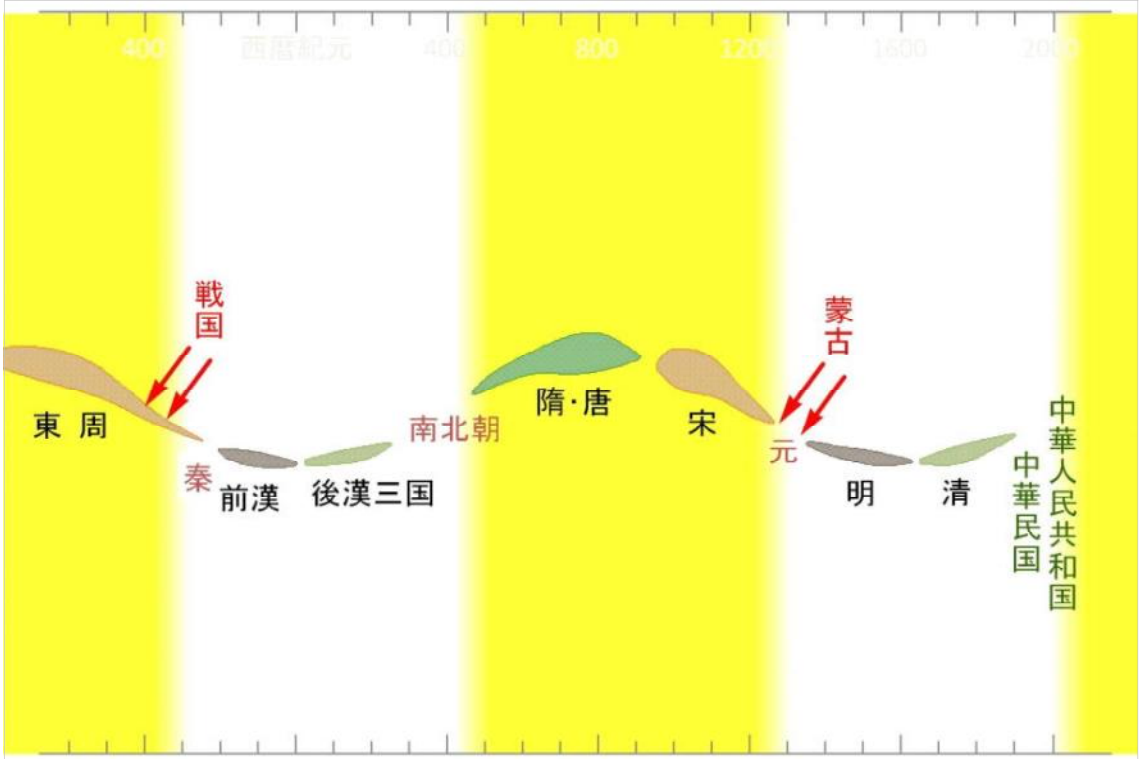




ヨーロッパの場合と同じように、文明サイクルの典型パターンと比較していきますと、高調期はいわゆる古代中国文明ということになります。その後、中国の場合は戦国時代という形で文明交代期が訪れました。それ以降はなかなか文化の発展が見られない暗い時代が続きましたが、南北朝時代、王羲之の書道を典型例としてルネッサンス現象が起きたと考えることができます。その後の隋や唐が力強く、夏とよぶにふさわしい文明であることは、皆さんよくご存じのことだと思います。次の宋の時代、これは爛熟した時代であると言えます。

南北朝から宋までの時代が、中国にとってとても高調な時代でした。ところが、蒙古がやって来て、一気に滅んでしまいました。その後、明や清には文化がなかったわけではありませんが、かっての隋や唐と比べると、低調であると言わざるえません。

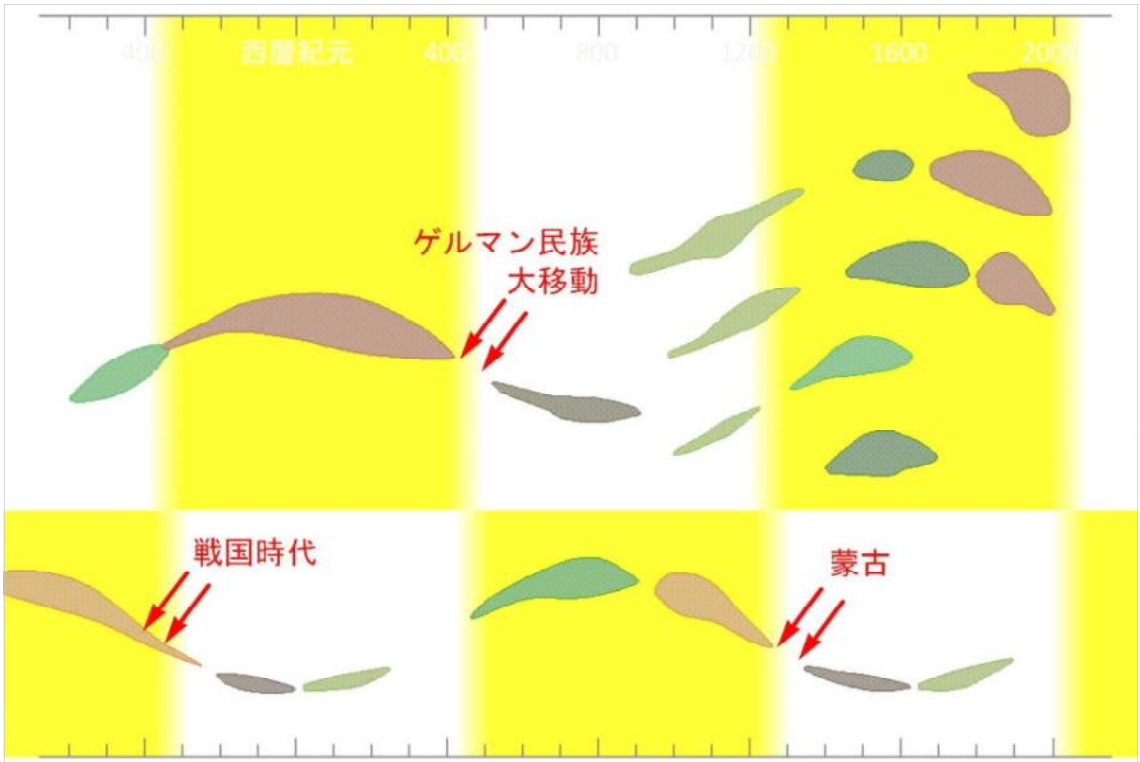
中国の場合もヨーロッパと同様に、低調期は白、高調期は黄色で色づけしました。



中国おける歴史展開

【出典】林英臣『中国文明興亡史』博進堂

これを先ほどのヨーロッパ文明の図と比較していただきますと、違いがよく分かります。そして、文明の低調期と高調期が色分けされた二つの図を重ね合わせ、一枚の図に表してみるとこのようになります。

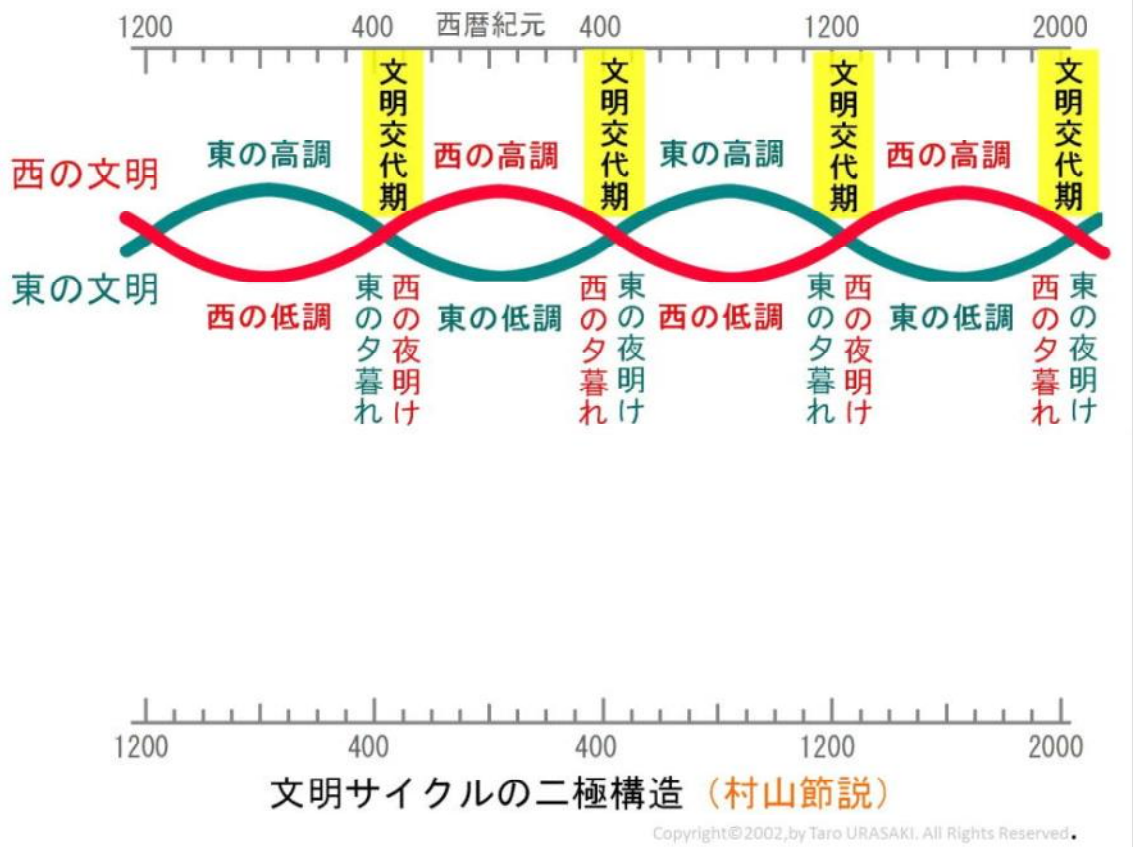


中国史とヨーロッパ史の関係

【参考資料】林英臣『文明法則史学入門』『中国文明興亡史』，服部匡成・中村仁音の研究論文

ご覧のように、ヨーロッパ、つまり「西の文明」と、中国を例とした「東の文明」は、文明の昼と夜の時代が逆転しています。ゲルマン民族大移動、戦国時代、蒙古と、赤字で記した出来事が「文明交代期」の内容になります。

以上のような、文明サイクルがもつ「二極対立・周期交代」の構造を、村山節先生は次のような形で表されました。



初めてこの図を見たとき、私は「ビビビビッ」と感じるものがありました。ここで少し、私が文明法則史学に出会った経緯や印象についてお話しすることにします。

私が文明法則史学を初めて学んだのは平成2年（1990年）2月。教員一年目でした。

私の指導教科は何かお分かりでしょうか？　私がこのように講演をしていると、たいてい「歴史の先生ですか」とか、体型を見て「柔道の先生ですか」とか、いろんな声が出てきます。また学校では、数学、英語など、生徒がありとあらゆる教科の質問をしに来てとても困っているんですが、実は私の専門は理科、物理なんです。

物理には天動説と地動説を扱う時間があるのですが、たまたま教員一年目でしたので、地動説の歴史とはどのようなものなのか、科学史の文献を読んでみました。そこで、天動説も地動説も、そんな話はギリシャの時代からあった。けれども、その後のローマ時代はギリシャの時代よりも文化レベルは下なので理解できなかった、ということを知りました。

その後、地動説の知識はずっとヨーロッパに残っていたのではなく、いったんオリエント、今の西アジアや中東に文献が移りました。それからイスラム文明の時代を通して、その知識はずっとアジアにありました。そして今度は、十字軍が知識を逆輸入し、翻訳をし、「かってヨーロッパにはこんなにすごいものがあったのか！」という事実にヨーロッパ人自身が気づき、少しずつ地動説が世界に広まっていったのですが、こんな壮大な歴史があったということを、恥ずかしながら、私は教員になって初めて知りました。ちょうどそれが教員一年目の冬、１月でした。

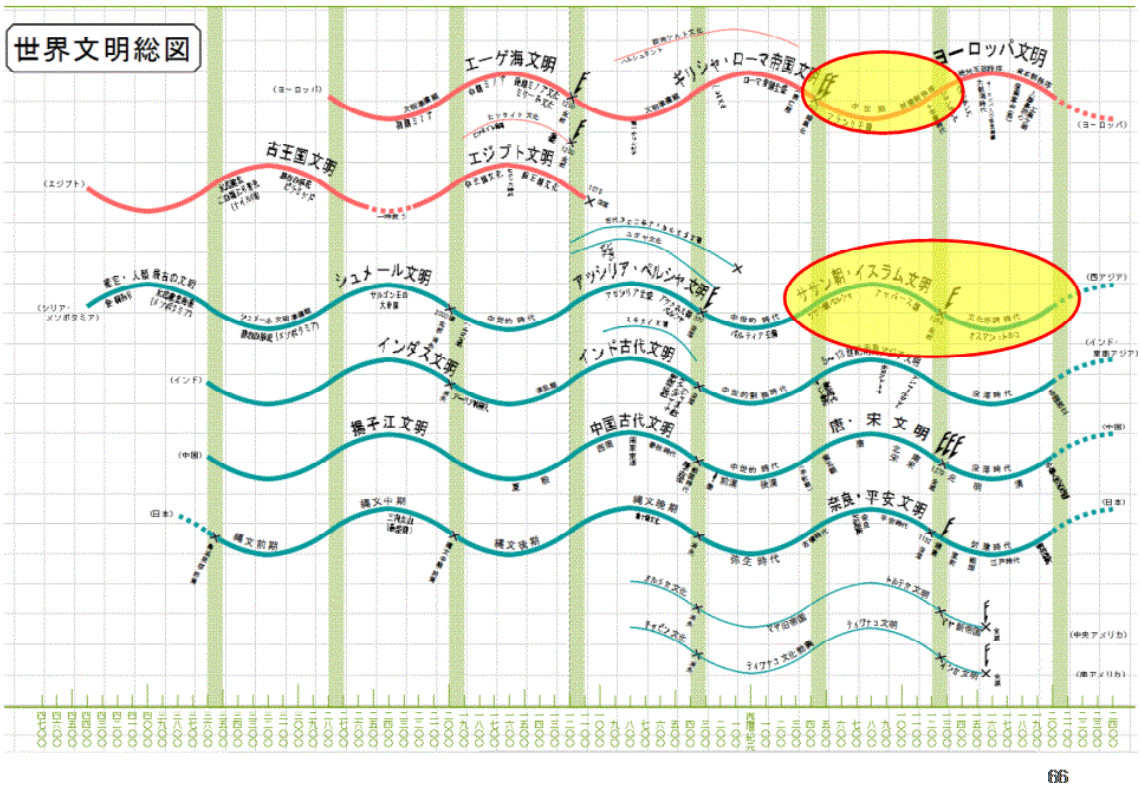
先ほどご紹介いただきましたように、私は広島で「積極人間の集い」にも出させていただいたりして、大学の外、広島の街の方々ともご縁をいただいていたのですが、実は何と、そのご縁が岐阜の地でつながったのです。そして「今度、文明法則史学の研修会が浜松であるからついて来い」となりました。「来ませんか？」ではなく「ついて来いという」勢いでしたし、文明法則史学という名前は広島の頃にも聞いたことがあるし、ということで、とりあえずついて行くことにしました。当時はまだ給料が安く、片道の交通費しかないという、恐ろしい状態で参加したのを覚えています。

研修会では、林英臣先生から文明サイクルの講話を拝聴しましたが、途中で「アレっ」と思いました。「昔、ギリシャ・ローマの時代があって、東アジアの時代があって、それから十字軍で・・・、これって、地動説の本で読んだあの話と一致するよね！」と、ビビビッと感じたのを、昨日のことのように覚えています。

以来、文明法則史学の研修会には頻繁に通って勉強を続けました。出会ったのが平成2年（1990年）で、それからしばらく、3～4年の間は自分自身が勉強する時期でした。

ところが勉強を続けていると、「おやっ」と思うようなことが出てきました。この世界は、発見者の村山節先生にケチを付けることは許されないような雰囲気があったのを覚えていますが、よくよく村山先生のご研究を見てみると、まだ全く研究されていない地域や時代があるのことに気づきました。

図に丸を付けてみましたが、例えばヨーロッパは、ギリシャ・ローマの時代は、しっかりした研究論文や本が出ています。でも、中世期の時代はどこにも載っていないのです。



あるいは西アジア。「イスラム文明がある」といっているにも関わらず、それに関する具体的な文献がなかったのです。文明サイクルは、事実、村山先生がご発見になったとはいえ、まだまだ研究には漏れがあるということを、勉強を続けているうちに気がつくようになったのです。

それと、「21世紀はアジアの時代になる」という発見は重大なことなので、少しずつ勉強を重ねるうちに、「自分もその普及に関わらなければならない」と感じるようになって

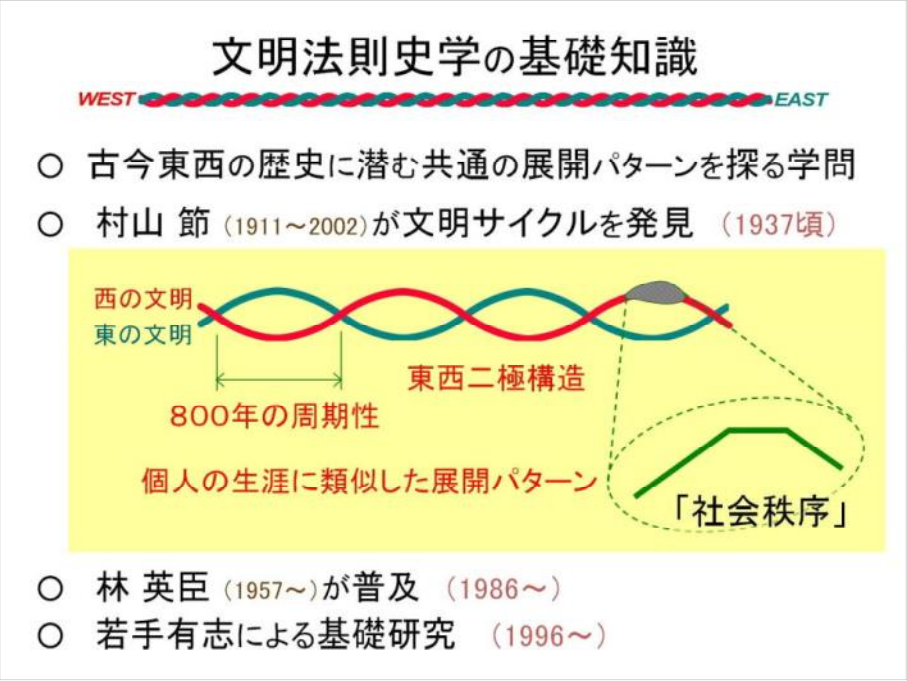
きました。そして「自分が伝えていく立場になった時、きちんと信頼を持って、聞く人に受け止めてもらえるだろうか？」という視点で、この学問を見直してみました。そうしてみると、「確かにそのような解釈も可能だけど、事実はそうではないのでは…？」と問い質された時、きちんと答えることができないことが結構あったのです。

ですから「社会にきちんと責任を持って伝えていくためには、学問としての体系をガッチリと固める必要がある。」と思いました。「学問としての体系を固め、学者の批判にも耐えられるものにしていかないと、とてもじゃないですが、社会には浸透していかない。」と、次第に思うようになっていったのです。

それで未研究の歴史については、自分たちでやっていかなければならないと考え、ちょうど私たちの世代、当時三十歳になるかならないかの若者たちでグループを作り、研究を始めました。それがおおよそ平成8年頃のことです。

それで、「文明法則史学は『村山教』ではなく『学問』なのだ」ということを示すために、今日資料としてお配りしている『文明法則史学概要』という冊子を作りました。これは平成11年、学者の方や、物事を批判的にとらえてしまいがちな方たちに対して文明法則史学の詳細をお伝えするために書いたものです。このような仕事を、私たちが三十代前半の頃にやってきました。

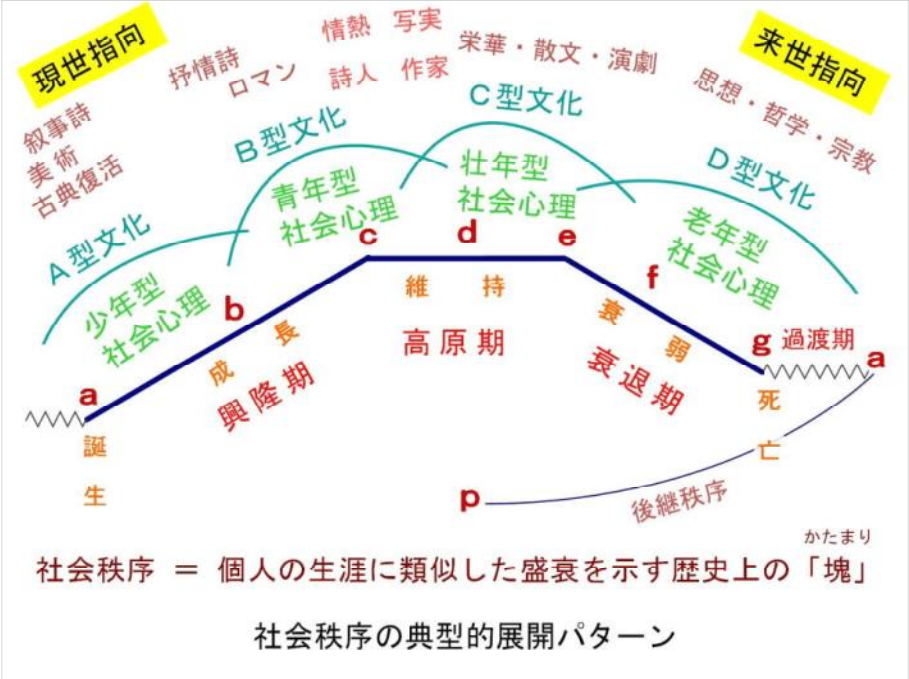
ここで再び、研究の歴史も踏まえてお話しします。文明法則史学を少しご存じの方が持たれているイメージは、先ほどの「二重らせん構造」だと思います。



しかし厳密には、「二重らせん」の下部構造として「小さな盛衰」があり、これを「社会秩序」（S.S.　Social System）と呼んでいます。

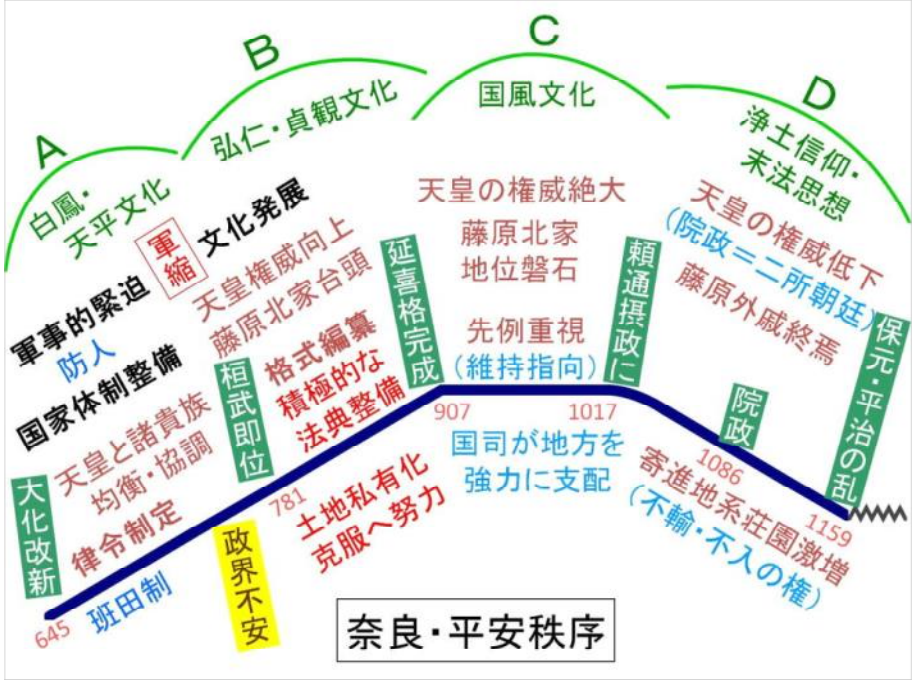
「歴史は繰り返す。」「洋の東西を問わず、歴史は同じようなパターンを数百年単位で繰り返す。」というイメージを、歴史の教科書を読まれた方は持たれていることと思います。実は、歴史の教科書に記述されるような歴史というのは、共通の盛衰パターン、数百年の寿命を持っています。

ちょうど、人が生まれ、子どもから大人になり、やがて年老いて、そして死んでいく、このようなパターンが、社会全体として見られるのですが、このような展開パターンを描いて進んでいく歴史のことを「社会秩序」と呼んでいるのです。



これが「社会秩序」と呼ばれる、小さな盛衰の定型的パターンです。

この盛衰を、具体例を通してイメージしていただきましょう。いちばん分かりやすいのは、大化の改新にはじまり、源平の時代に終わる、いわゆる律令国家の時代、奈良・平安時代の秩序です。



ここで、この社会秩序という塊が、どのように「本当に実在するか？」を確かめるのか、簡単にご説明したいと思います。

まず、私たちは年表を作ってみます。そして、大きく歴史の塊を捉えてみます。つづいて「社会秩序が本当に実在するのかどうか？」を確かめる、厳密な手続に移ります。

まず、第一段階として「均質な時代というのはどこなのか？」、言い換えると「前後の断層はどこなのか？」を調べるところから始めます。

すると、奈良・平安の時代の前には、大和朝廷の時代があったこと。その後、大化の改

新から鎌倉幕府ができるまでの間は、天皇を頂点とする中央集権的な国家体制があったこと。鎌倉幕府ができてから後は武家の政権があったことが分かります。こうして「大化の改新から源平のあたりまで」を一つ塊として捉えられることが分かります。

日本史の時代区分

次に、第二段階として「盛衰がどのようになっているのだろうか」を調べます。「この一つのまとまった時代に、一度限りの盛衰があるのかどうか？」を探っていくのです。

奈良・平安朝の時代には、次の年表のような形で歴史が展開していくわけですが、9世紀、平安初期の位置づけは、皆さん理解しがたいものがあると思います。

律令時代の盛衰

奈良時代や平安遷都までは、大仏ができたりとか、有名な事件が起こります。平安朝の最盛期、この頃は源氏物語、枕草子ができ、わりとイメージがしやすいのですが、平安初期というのは、イメージがしにくいのが普通だと思います。そこでその意味合いを探ってみました。

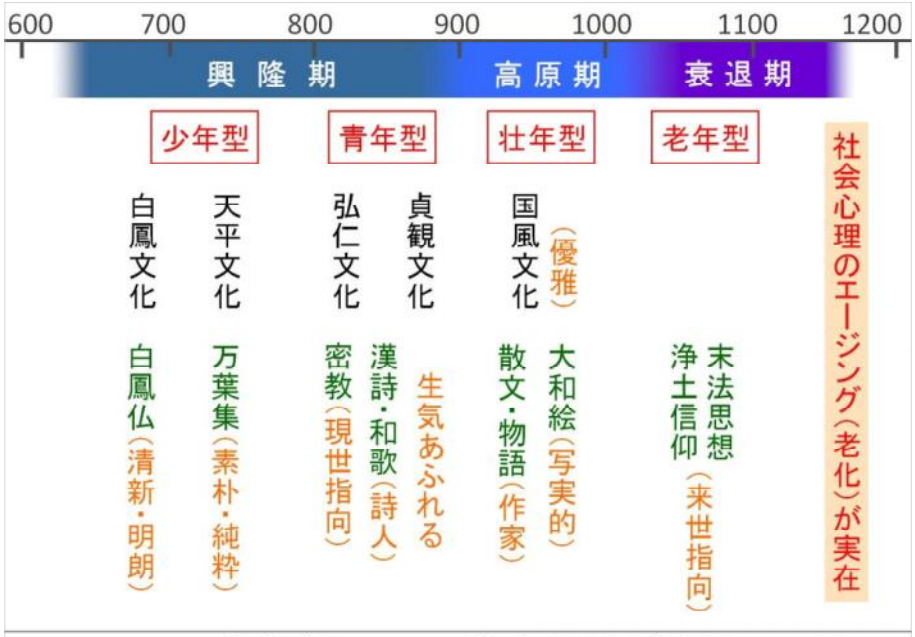
すると、この百年の間に、天皇の権威というものが格段に上がり、藤原の北家、道長や

頼道につながっていく、あの家系がすごく伸びています。
　それに対して班田制がこの間に「衰退」していきます。「律令制で班田制が衰退したら、それは社会の衰退ではないのか？」と考えられるかもしれませんが、当時の朝廷は、土地の私有化を克服する努力をし、10世紀の最盛期には、在地の豪族に支配を任せ、その支配を任せる代わりに国に税金を納めさせる、という仕組みを確立したのです。この頃には、「地方から国に富がいっぱい入ってくる」という、そういう時代になっていたのです。
　あと、9世紀という時代は、班田制の衰退等社会的矛盾が現れたり、おかしなことが起こってきますが、現実対応をどんどん積極的に行って、現実にも建前にも対応する法体系というのを作っていきました。これが9世紀の姿なのです。「積極的な現実対応をしていた」…つまり、とても伸び盛りの時期であったと言える訳です。

　他方、11世紀以降は院政の時代ですが、これは天皇の権威がないがしろにされます。そして藤原北家が権威を失い、その後、経済には荘園というものが出てきて、不輸・不入の権によって富が国に入らず、有力者に入っておしまい、という時代になり、国庫が枯渇して、社会としては衰退をしていってしまいます。

　このように、興隆、高原、衰退、このようなパターンがあるということが分かります。ですから９世紀の見方が鍵になるということです。

　一度限りの盛衰を実証できたら、第三段階として、「社会のエージング（老化）」が見られるかどうか、調べます。
　ここで大切なのは、「盛衰」というのは「上がり下がり」ではなく、「子どもから大人、そして老人へと、このようなエージング（老化）である」ということを確立しなければなりませんが、日本史のことですので、このように並べれば、大きくイメージしていただけるものと思います。



律令時代における社会心理の変遷

　少年型といえば、天平文化です。天平文化というのは、とても純粋で素朴ですね、これが少年型の文化になります。
　その後の青年型、これは弘仁文化、貞観文化なのですが、いわゆる密教の時代です。そして壮年型は国風文化です。
　青年期と壮年期の違いを大きく言いますと、青年期はロマンの時代で、とても情熱的です。それに対して、壮年型はリアリズムの時代であり、より現実的です。文学でいえば、

青年期は、和歌や漢詩など、詩人の時代。壮年期は、枕草子や源氏物語、つまり散文や物語など、作家の時代です。
　最後の老年型は末法思想ですが、これは申しあげるまでもなく、大流行しました。実は、若い時代と老いた時代の違いは、現世意識と来世意識で、明確に区別することができます。奈良時代、大仏を作ったのは国家を救うためだという思い、つまり現世意識というものがありましたが、平安末期は末法思想、来世のことしか考えないという時代になってしまいました。ということで、平安末期はもう完全に老年期ということになるのです。

　このように典型的なエージングが見られたのが奈良・平安朝の時代であり、この奈良・平安の社会秩序から、他の歴史をご覧いただけるといいと思います。

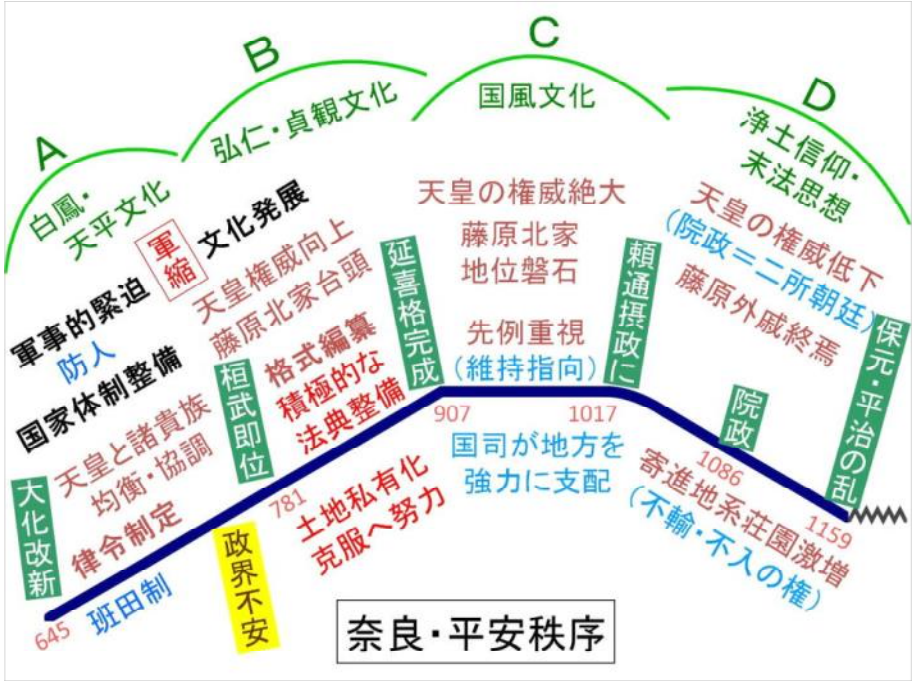
　復習します。まず「ひとかたまり」の均質な時代があるかどうかをチェックする、これが第一段階です。次に、一度限りの盛衰があるかどうかを確認する、これが第二段階。最後にエージングの存在を確認する、これが第三段階です。
　ここまできちんと検証して、はじめて「人間の一生と似た展開パターンがあったんだ」と、我々は認定しています。雰囲気でやっているわけではありません。

　社会秩序が実在することを確かめられたら、次は「指標点」の選定です。

　この「奈良・平安秩序」では、建設点（a点）は「大化の改新」です。ぐーんと伸びるようになった転換点は「桓武天皇の即位」。これが興隆加速点（b点）です。
　そして伸びていくところから現状維持に推移していくところを「c点」と呼び、これは延喜格という法体系が一通り確立された10世紀の始め頃であろうと考えています。
　「e点」という、これから衰退していくポイントは、道長から頼道の頃かと推察されますが、これはあまりハッキリとはしていません。次に、ガタガタガタと一気に崩れていく「衰退加速点」（f点）は「院政の開始」。そして、死亡点（g点）は「保元平治の乱」です。
　ＮＨＫの大河ドラマ『平清盛』第一回は、「武士は完全に貴族の子分であった」というところからスタートしました、この立場が完全に逆転してしまうのが保元平治の乱あたり。律令制の終焉を意味しています。

奈良・平安秩序の指標点選定

以上より、奈良・平安の社会秩序というのは、改めてお示ししますが、次のような形の盛衰を描いていると結論できます。

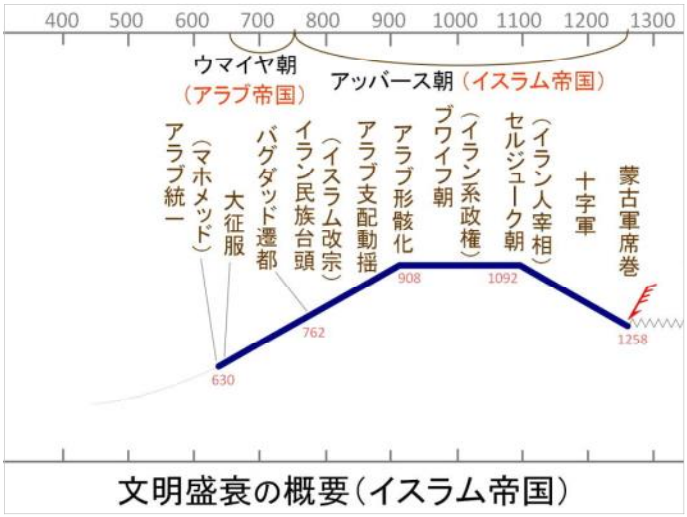


先ほど「平成8年頃から若手が集まって研究を始めた」と申しあげましたが、私たちは未研究の時代について、このような社会秩序と呼ばれる塊があるのかないのか、あるとしたらどういった形なのか、それらを探る仕事をしてきたのです。

実は、私が専門的に研究してきたのは、イスラム帝国、マホメットの後の西アジアの時代です。

けれど、この歴史を説明すると、眠くなって仕方がないと思います。私自身もこの研究を始めた時はまったく訳が分かりませんでした。高校の教科書を三行読んではウトウトウト、また三行読んではウトウトウト、こんなことを繰り返していました。

その研究の詳細につきましては、『文明法則史学概要』の7ページから12ページあたり

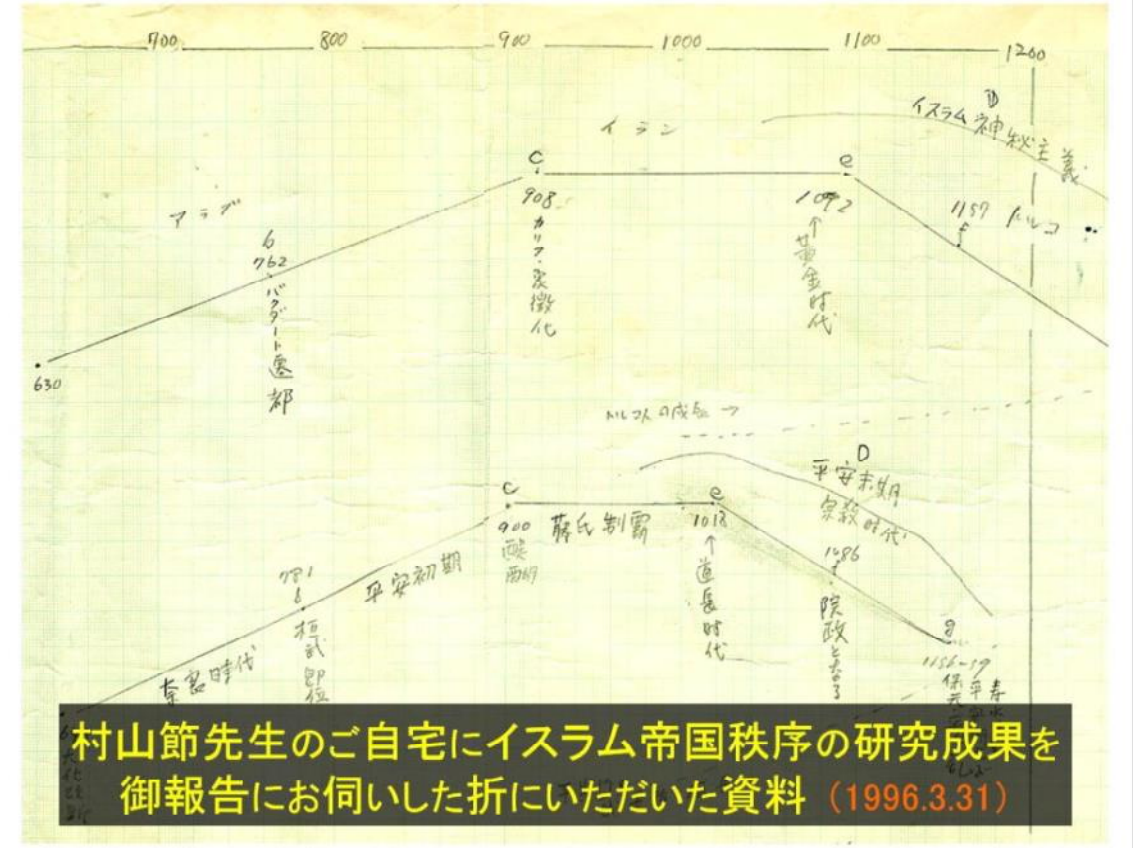


にかけて書いています。「イスラムについて中央政権は誰なのか？」「軍事はどうなのか？」「政治、商業、社会心理は？」…といったことを一枚の年表に作り、少しずつ研究を始めていったのです。

イスラムについては分かりにくいと思いますが、このような調査研究をして、盛衰を探ってきたということです。

繰り返しになりますが、私たちが文明法則史学を社会に広く普及していこうと思えば、本当に緻密な研究をしていかなければなりません。そこで「批判に耐えうるレベルとはどのようなものなのか？」をご理解いただきたいと思い、ここまで研究の方法について、お話をさせていただきました。

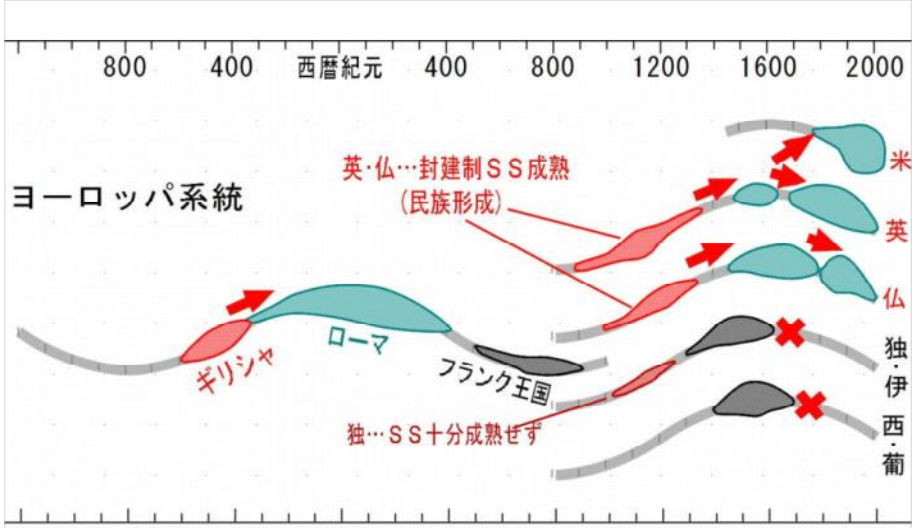
次に、こちらをご覧ください。私がイスラム文明を研究したのは平成7～8年頃ですが、村山節先生にご指導をいただこうと、横浜に、慶応大学近くのご自宅に伺いました。そしてこれが、その際にいただいた先生直筆の資料です。



先生はこの図を示しながら、「君が研究したイスラムの歴史は、奈良・平安朝の歴史と本当によく似ているね」と、ご指導を下さいました。

こうして普及する立場になり、私とともに研究をしてきた仲間がいます。今は横浜に押すまいの服部匡成さんという方です。私は長らく研究から離れてきましたので、今、文明法則史学の研究をリードしているのは、服部さんです。

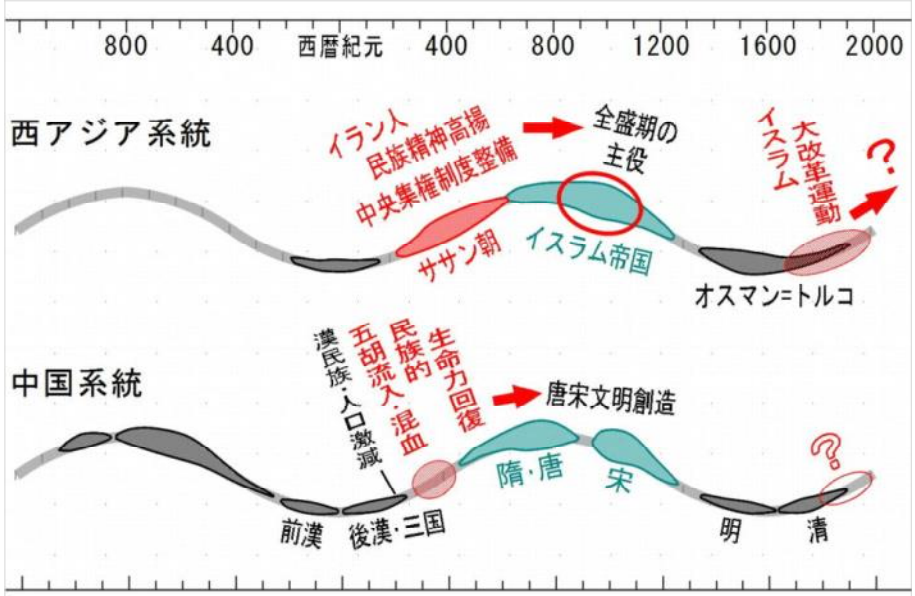
当時、あと何名かのメンバーと分担をしながら、私はイスラムや西アジアを調べ、服部さんはヨーロッパの中世期ついて調べてきたのですが、研究の結果、それまで漠然としていた文明準備現象の姿が、徐々に明らかになってきました。



「文明準備現象」に対するイメージ（1997頃）

例えば、イギリスとフランスという、ヨーロッパ文明の主役を担ってきた二国は、文明サイクルの高調期が訪れる前、まだ夜明けの段階で社会秩序が成熟しています。それに対し、一代限り、単発で終わってしまうような国は、社会秩序成熟せずに終わっています。

つまり、高調期が訪れる前に「社会秩序が成熟するかどうか」…言い方を変えれば「完

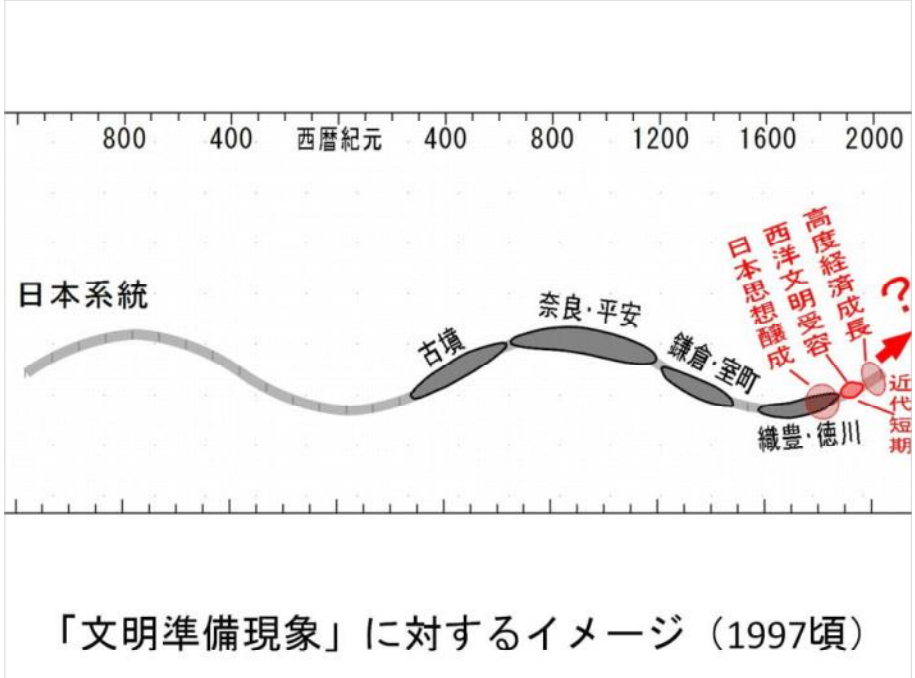


「文明準備現象」に対するイメージ（1997頃）

全燃焼型の社会が存在したかどうか」が大きな鍵であることが、少しずつ明らかになってきました。

アジアではこういうことです。ヨーロッパでは、イギリスやフランスで封建制秩序と呼ばれるものが成熟しました。同様にイスラム文明は、その前にササン朝ペルシャと呼ばれる帝国があり、ここでやはり完全燃焼型の社会がありました。

しかし徐々に分かってきたとはいえ、当時日本史に対して持っていたイメージは、次のようなものでした。



「文明準備現象」に対するイメージ（1997頃）

先ほど結論のところで申しあげましたように、古墳時代というのはとても大切な時期です。しかし、平成9年（1997年）の頃、まだ私たちは古墳時代が日本史にとっていかに重要な時代であったか、気がついていなかったのです。

このように研究を続けてきたのですが、当時は社会秩序というものを懸命に追い求め、世界文明総図の空白を埋めようとてきました。しかし、やがて研究に明るい見通しを持てなくなりました。そして「こんなことを続けていて、一体いつになったら終わりが来るのだろうか？」と、疑問を持ちはじめたのが、だいたい平成10～11年頃のことです。

これまで文明法則史学の概要をお伝えすると同時に、私たちが携わってきた研究についてお話をしてきましたが、ここで一区切りとし、休憩を取らせていただきます。

＜５世紀の特異性を、どのように発見したか＞

これから「５世紀の特異性はどのように発見したのか」というお話をいたします。

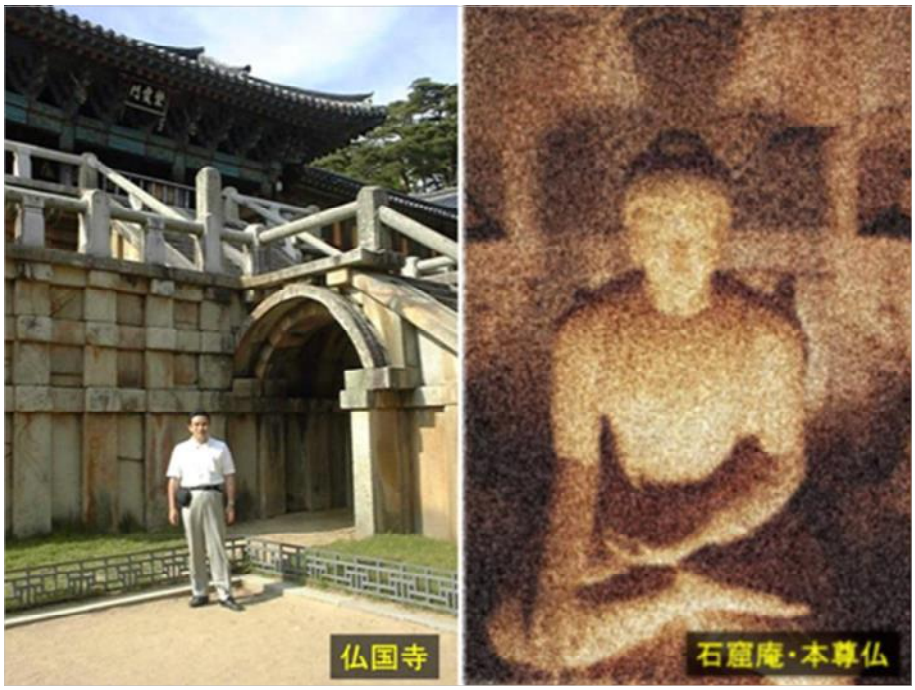
研究に対して行き詰まり感を抱いたのは、平成10年（1998年）頃です。当時は「いつになったら終わるのか？」「これまでの努力が報われる日は来るのか？」…そんなことを考えていました。

翌年、平成11年、転機が訪れました。

「教員訪韓研修団」という、35歳以下の教員を韓国と交換で派遣する国の事業があるのですが、ちょうどこの年が岐阜県の当たり年だったのです。5月12日、突然校長室に呼び出され、「ワシもよく分からんのや」という校長から、韓国に行けと指示されました。ネットで調べてみると、どうやら日韓文化交流基金という機関の事業のようでした。

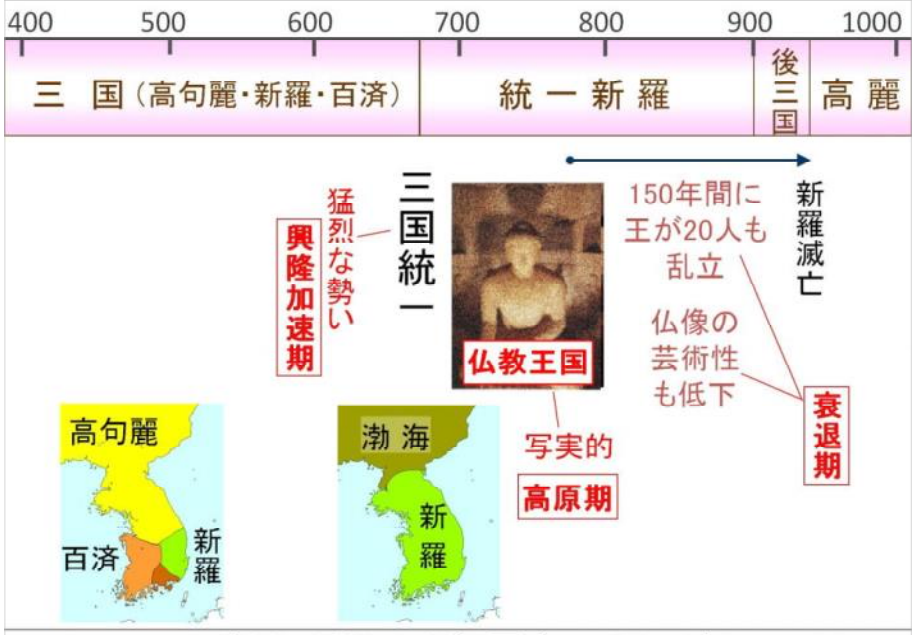
翌月、6月15日から24日、岐阜県の教員約20名の一員として韓国に行ってきました。小・中・高等学校、すべての校種、教科も様々な教員が入り交じった構成でした。韓国各地の学校や史跡を視察し、ホームステイもしてきました。

そしていよいよ、運命の日がやってきました。平成11年（1999年）6月22日です。この日は、新羅の都・慶州（キョンジュ）を旅しました。この写真は仏国寺と石窟庵（ソックラム）本尊仏ですが、その後いずれも世界文化遺産に指定されました。



ここを訪れていろいろと歴史を聞いた時、すぐにピンときました。「これはおそらくまだ誰も研究していないのだろうけれども、この朝鮮半島にも社会秩序と呼ばれるものがきっとあるぞ！」と、ピンときたんです。

朝鮮半島の歴史を簡単に書いてみますと、三国時代があり、高句麗、新羅、百済の中から新羅が伸びて、統一し、後三国時代まで続いています。



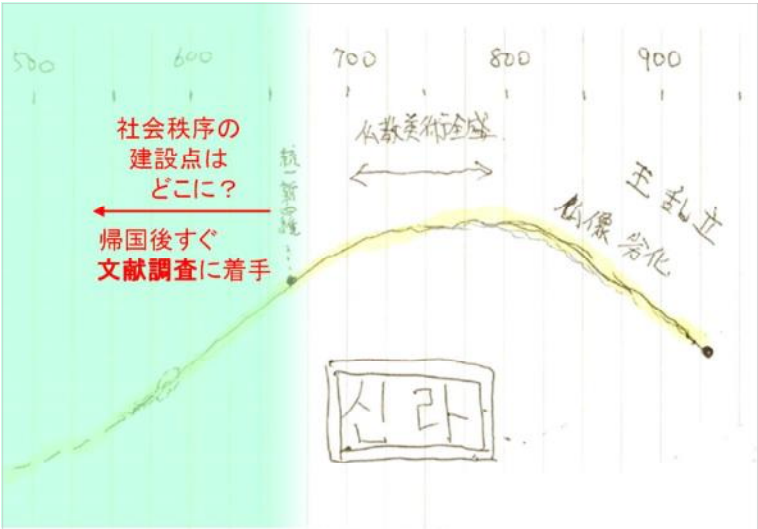
慶州で浮かんだ新羅史のイメージ

この石窟庵の仏様、このあたりの時代が全盛期だと思われます。三国統一、これはものすごいエネルギーですので、これはおそらく青年期だろうと考えられます。こういったことがすぐにピンと思い浮かびました。

そしてこの仏様の顔はとても写実的ですね。実は私は仏像の顔を見たらどの時代かすぐに分かります。作られた社会が子どもの時代なのか、青年期の時代なのか、壮年期の時代なのか、その表情を見ると分かるんです。社会が子どもの時代というのは、仏様も子どもの顔をしているんです。その後しだいに大人っぽくなり、壮年期になってくると、落ち着いた、写実的な顔つきになってきます。ちょうどその頃のものは、京都大原三千院の仏様、あるいは宇治の平等院のものと似ていると思われます。

その後、150年間に二十人もの王様が交代するという、どこかの国の内閣と同じようなことが行われ、そのような時代を経て衰退していきます。

韓国の社会秩序についてはこのようなイメージがあったのですが、どこがスタートなのかは分かりませんでした。それで韓国から帰った後、必死に図書館に通い文献調査をしま



韓国滞在中に作成したメモ

した。その結果浮かんだのが、このような盛衰です。

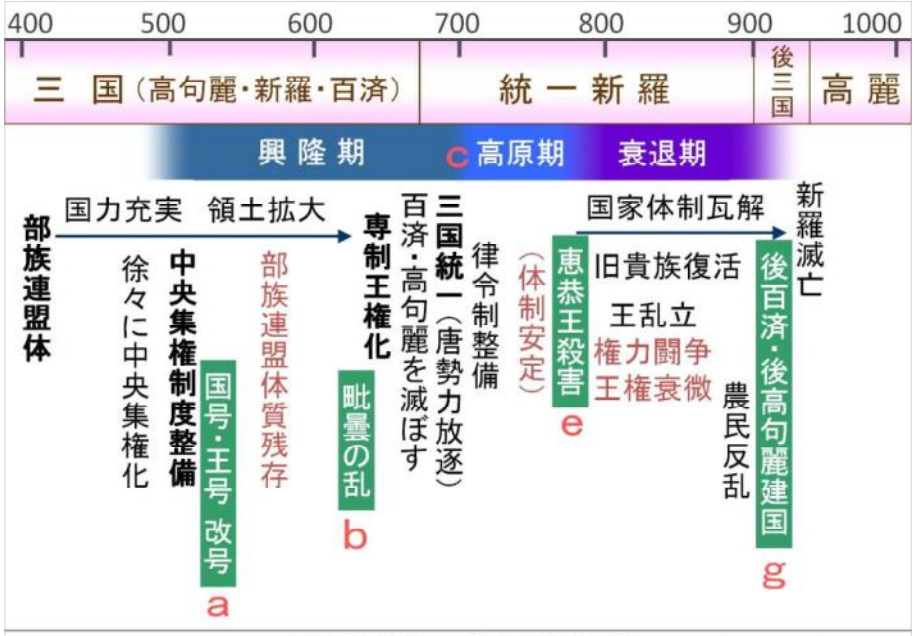
簡単に文字だけ追っていただくと、豪族の集団の国だったものが徐々に先制王権になっていき、そして三国統一をして落ち着いた時代があり、すぐさま崩壊していきました。以上が新羅の歴史です。なお、公地公民性は、日本でそうであったように、一時は機能したものの、すぐに機能しなくなりました。

社会心理については、先ほど申しあげましたように、写実的な仏像、これは壮年期であることは間違いがありません。また、老年期はよく見当たりません。
この盛衰を社会秩序として確立しようと考えたならば、興隆期に子どもっぽい文化、社会心理がないといけません。壮年期と老年期だけでは、社会秩序としては認定できないのです。そこで翌年、私は再び韓国へと向かいました。

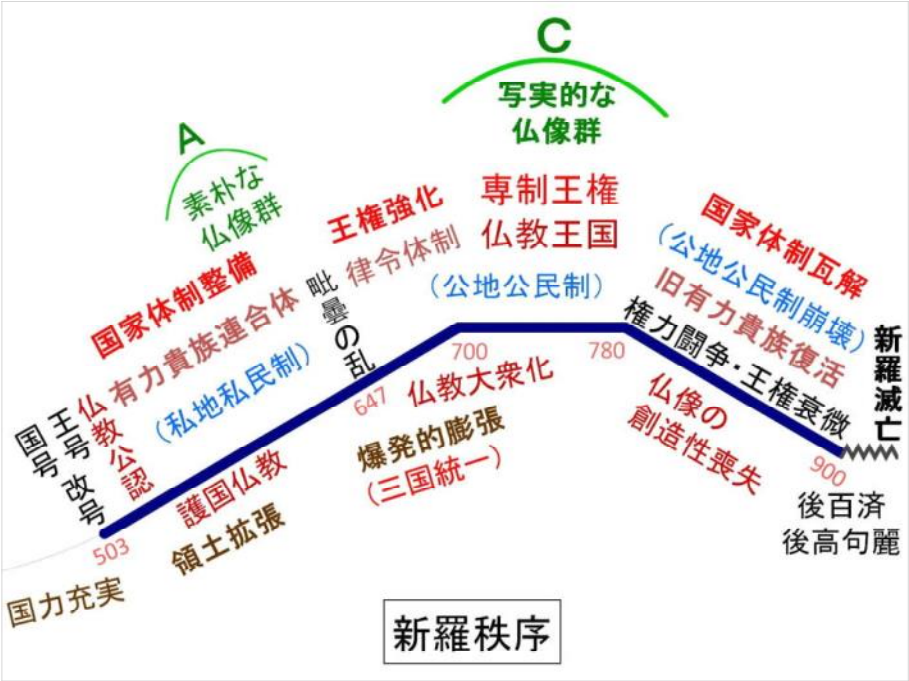
再び訪れた韓国・慶州。国立美術館でこの仏像と対面した時、「これは間違いなく子どもの時期のものだ！」「三国統一が青年期だから、それより前、三国時代のものに違いない！」と目星をつけてキャプションを見たら、予想は的中していました。そして何と、そこには“童子仏”と書かれていたのです。こうして、やはり、新羅にも子どもの社会心理を

持つ時代があったとことが分かりました。
　このように、仏像を見ると、当時の社会心理が分かるのです。これから是非、そうした目も持って、仏像を楽しんでください。

　以上、このようにエージングがあったことを確認することができ、新羅も社会秩序として認定できると確信しました。そして、次のように指標点も選びました。

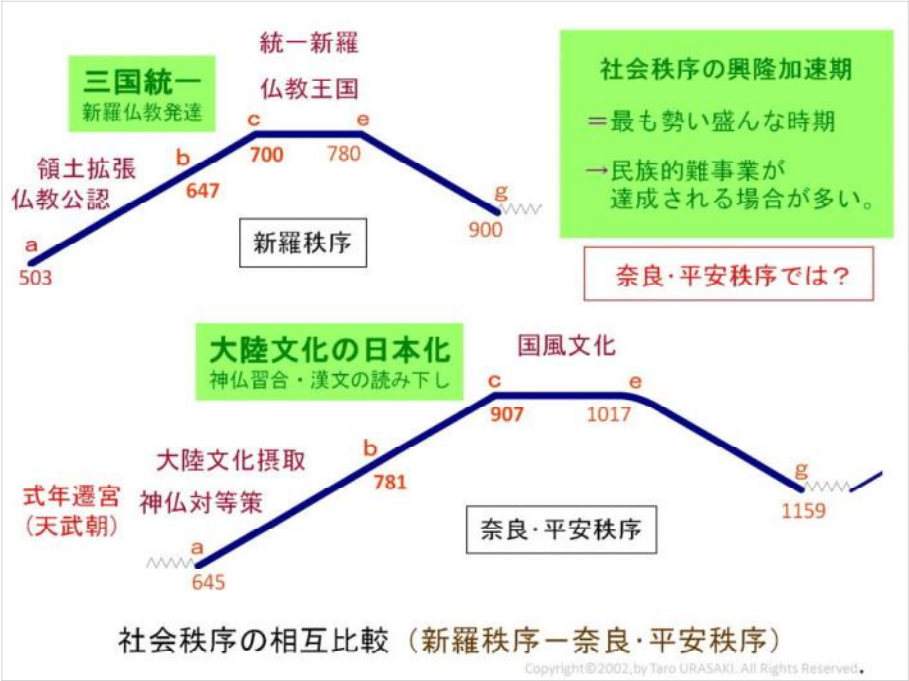


新羅秩序の指標点選定



　6世紀の初めに誕生してから、国家体制を整備し、仏教を布教。7世紀半ば以後、王権を強化し、三国を統一を果たし、爆発的に膨張。高原期には仏教王国として栄えたが、8世紀の終わりからはガタガタと崩れていき、後三国時代の到来で幕を閉じた。…このような歴史、このような社会秩序があったということなんですが、これはたまたま韓国に行く機会があって分かったことです。
　以上、韓国の歴史に注目してきたのですが、それまでは村山先生は韓国についてはまったく眼中になかったのです。それで「まだこのようなところがあるのか」ということが分

かり、自分にとってはとても新鮮な気持ちでした。
　それで「この機会に韓国の歴史について極めよう！」と思ったのですが、新羅の後に続く高麗という国の歴史が今ひとつ分かりにくく、「これはいったん後回しにしよう。」「新羅と日本の比較研究をやってみよう」。と方針転換しました。



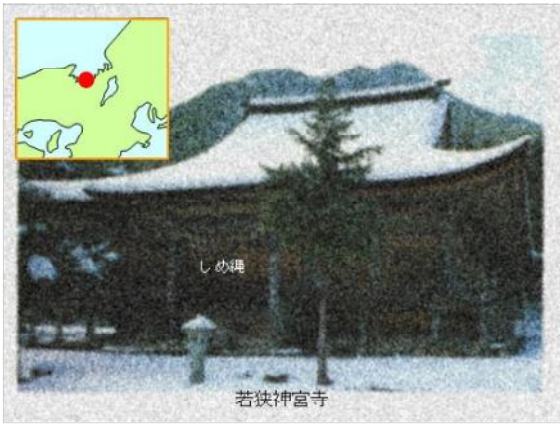
　新羅の時代は、大きくこのように展開しています。その後、少し遅れる形で、日本の奈良・平安時代が展開します。

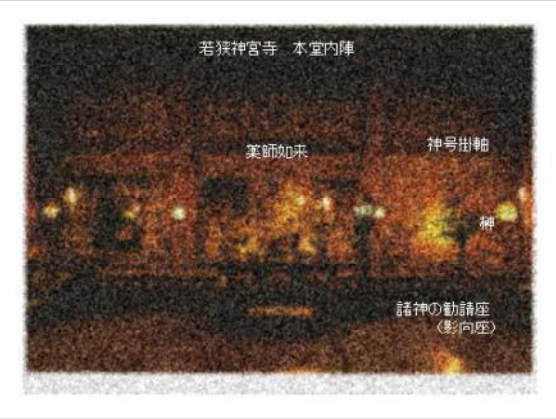
　新羅の特徴は「統一新羅」で、「三国統一」がきわめて大きな出来事となります。あるいは「仏教王国」として「仏教」も大きなキーワードになるのではないかと考えました。
　これは大切なことなのですが、社会秩序の興隆加速期というのは、非常に勢いが盛んな時期で、民族的な大事業が達成される場合が多々あります。日本史で興隆期の典型例といえば「坂の上の雲」。そして、典型的な青年期の出来事は「日露戦争」です。
　「それでは、三国統一にあたる大事業は、奈良・平安の歴史においては何なのか？」ということで、先ほどの9世紀、平安初期に注目をしてみました。

　新羅では「仏教」というキーワードが出てきましたので、日本ではどうなのかというと、この頃から「神仏対等策」「式年遷宮」が始まっています。その一方で、遣隋使、遣唐使という形で大陸文化を積極的に取り入れ、それが「国風文化」になっていったりしています。この間、平安初期に進展したのは「大陸文化の日本化」ということです。
　国風文化、源氏物語や枕草子は仮名文学ですよね。もうこの頃には仮名で文学が書かれているのですが、天平の時代はまだそうではありません。つまり、平仮名というものを発明し、仮名文学が栄える素地が作られたのが9世紀、平安初期であったということです。
　そのような目でこの時代を見ていくと、「神仏習合」…すなわち、固有の神道と外来の仏教が融合するという現象も、同じ9世紀に起こっています。
　こうして、「日本の奈良・平安時代における大事業というのは『固有の文化と外来文化の融合』だったのか！」ということが見えてきました。

　ふだん私たちは、日本という国をほとんど自覚することがないのですが、韓国の歴史と比べてみると、いかに日本は変わったことをやっているか、ハッキリ分かります。ここで、比較対照例を二つご覧いただきます。ポイントは「外来文化をどのように受け入れたのか」です。

一つ目は、若狭神宮寺です。

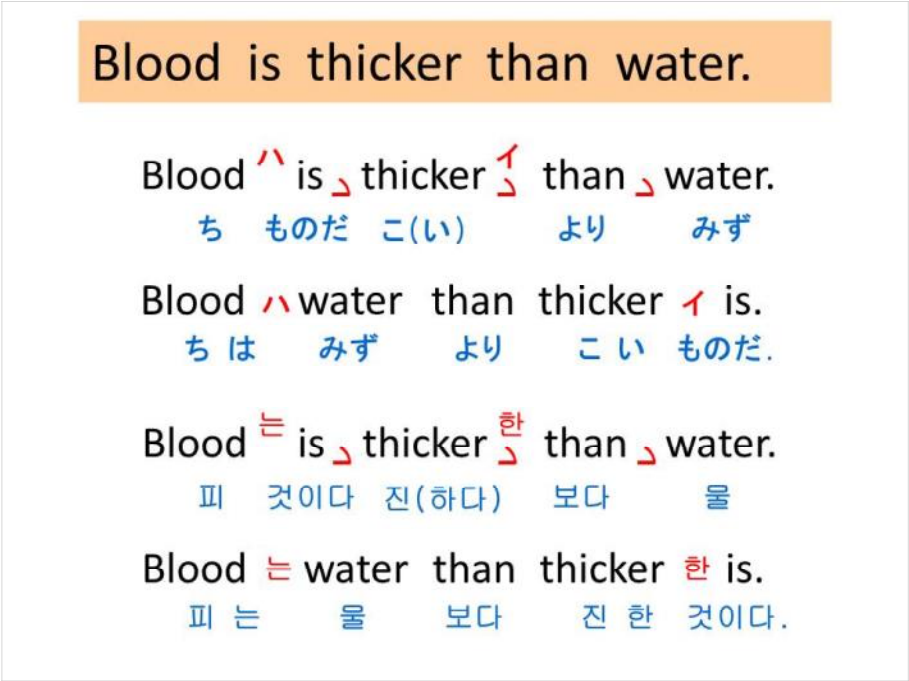




これはお宮さんか、お寺さんか、お分かりでしょうか。建物を見るとお寺ですね、ところがしめ縄があります。中に入るともっとすごい。ご本尊が薬師如来、そして右の方を見ると神号掛軸、榊があったり…、お寺かお宮か分からないような光景が広がっています。実は、明治時代に入る前は、日本はすべてこのようになっていました。神仏分離令の前は神仏が融合しているのが普通の姿で、唯一、昔の名残があるのが若狭神宮寺なのです。

二つ目は、言語です。

私たちは漢文を読む時に“読み下し”ます。漢文は言うまでもなく中国語。外国語ですね。自分たちが使っている母国語の順番で外国語を読んでいく、書いていくということを、日本では行ったんです。それを仮に英語で行うとどうなのか、ご覧いただきます。



英語は外国語です。Blood is thicker than water. は「血は水より濃い」という意味ですが、まず Blood という単語に対して、音読みが“ブラッド”、訓読みが“ち”なんです。分かりますか。英語に訓読みはないですね。その訓読みを日本人は作ってしまったんです。is は“ものだ”、thick は“こい”、than は“より”、water は“みず”。“ウオーター”というのが音読みで、“みず”というのが訓読みなんです。

分かりますか。だってそうでしょ、水という文字はもともと中国語なんですから。それと同じことを英語でやると、こうなるんです。

さらに語順が違うわけですから、返り点を打って並び替えるのです。何だこれは？と思

われるかも知れませんが、「ち は みず より こい ものだ」。これが英語を読み下したり、書き下したりした場合の見本なんです。つまり、英語も漢文と同じように、読み下すことや書き下すことができ、訓読みを導入して、外国語である英語と母国語である日本語を混ぜこぜにして表記できるのです。

ここで、韓国語は日本語と語順が基本的に一緒ですので、英語を日本語に書き下すことができるということは、韓国語にも書き下すことができるということです。それは、図の下半分に示した通りです。

ところが、日本は英語の読み下しや書き下しを、まだやっていません。同様に、韓国でもこのようなことはやっていません。

今の感覚でいうと、英語を読み下したりすると明らかに不便ですね。つまり、日本人も韓国人も、英語を外国語として受け入れている。これがスタンダードなんです。

この点をふまえて、日本人は過去に何をやってきたのか、これからご覧いただきます。

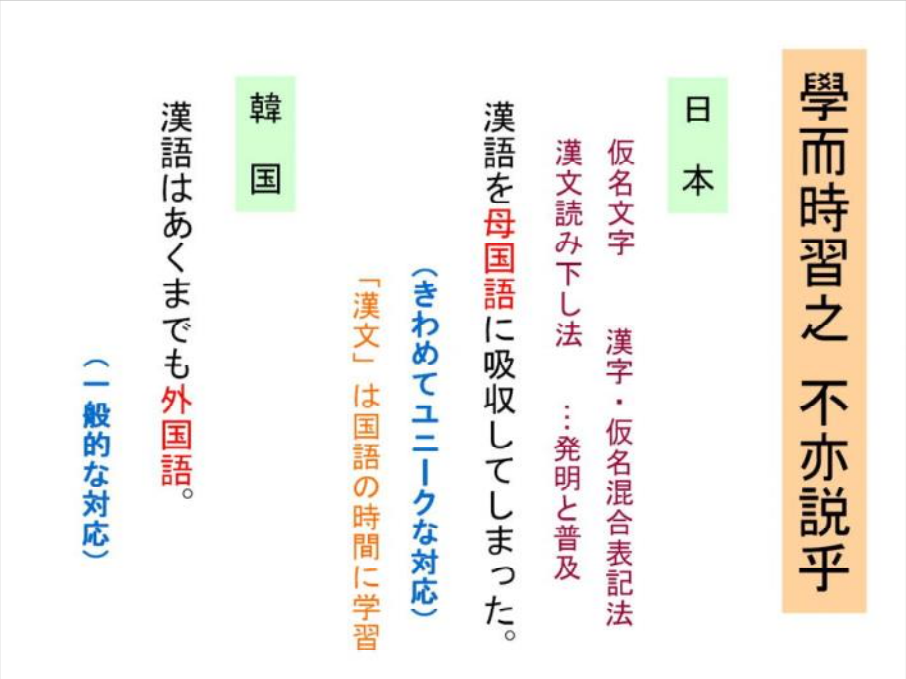
私は中国語ができないのですが、これは中国語読みするとどうなるでしょうか。中国式の発音があるはずです。（※ YouTubeで「學而第一」を検索するとヒットします。）

「學」に「まなぶ」という訓読みを作り、「而」に「～して」をあてます。「時」の訓読みが「とき」、「習」の訓読みが「ならう」、「之」が「これ」、「不」が「あらず」、「亦」は「また」、「説」が「よろこばしい」、そして「乎」が「や」、というように訓読みを作っていったわけです。

そして、返り点を打っていき、並び替えると左側の行のようになるのです。我々は国語の授業で漢文の読み方を習っていますので、右側の行を見た時点で読めてしまいます。

日本語でできるということは、韓国語でもできるということです。しかし、日本語で行った読み下し、書き下しを、韓国では行っていません。これは、韓国がおかしいのではなく、日本がおかしいのです。世界的にみて、こんなことは普通やりません。

こんなところに、外来文化の受け止め方の違いが現れているのです。言語に関しては、韓国人は漢語を外国語として受け止めています。これがスタンダードです。ところが日本人は、漢字から仮名文字を作ったり、漢字と仮名を混ぜこぜで表したり、読み下したり、書き下したり、こんなことを発明し、普及してしまったのが9世紀、平安初期の百年間だったのです。



これは改めて考えると、すごいことだと思われませんか。奈良時代にはまだ漢字しか使っていませんでした。漢字をそのまま万葉仮名として使っていたんです。それから百年ちょっとの間に、ここまでやってしまった。これが日本なんです。これがいかに難事業であったか、韓国の場合と比較すると、理解いただけると思います。

こうして漢語を母国語に吸収してしまいました。これはもはや、ユニークというよりも、クレージーという表現の方が適切なぐらい、それぐらいすごいことなんです。

大学入試でも、漢文は国語の中で出題されます。中国語の試験は別にあるのに、漢文の試験は国語の時間なんです。いかに不思議なことか、お分かりいただけますでしょうか。

私たちはこういうことをやってきたんです。けれどこれがいかに変わったことなのか、すごいことなのかという自覚は、なかなか持っていないのではないかと思います。ところが、他国と比較すると、日本人の持つ個性がとてもクリアーに分かります。

外来文化受容法の比較（新羅／日本）

文化の内容	新　羅	日　本
仏　教 （外来信仰）	仏教王国 ほぼ原形通りの形で急速に受容	神仏習合 固有の信仰（神道）と融合させながらじっくり受容
漢　語 （外来言語）	近現代における英語の受容と同様 漢語＝外国語	仮名文字，漢字の訓読み，漢字・仮名混じり表記法，漢文読み下し法などの発明と普及 漢語＝母国語

Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

この表のように比較してみますと、日本と韓国は外来文化の受け入れ方がまったく違うことが分かります。
仏教で見ますと、新羅は「仏教王国」です。外来文化を原形通り、非常にスピーディーに受け入れました。それに対して日本は「神仏習合」です。神道とじっくり時間をかけながら融合させていきました。漢語で見ますと、韓国の場合は普通の対応をしています。それに対して、日本は漢語を母国語にしてしまいました。
ほぼ同じ時代の新羅と日本は比べてみると、こんなにも違いがあるのです。

日本の古代の文化は、かなり朝鮮半島から伝わってきていますので、今でも韓国の人たちは文化的には自分たちの方が上だと思っています。「日本には自分たちの方から文化を流してやったんだ」という感覚をいまだに持っているのですが、このように見てみると、明らかに違いがあるのです。

これは韓国に行った時、ホテルから撮った写真です。

お分かりでしょうか。ポイントは教会です。今の韓国にはクリスチャンがとても多いんです。これも、韓国が外来文化を丸呑みし、自分たちのものにしてしまう特性を持っている、一つの例かな？と思っています。

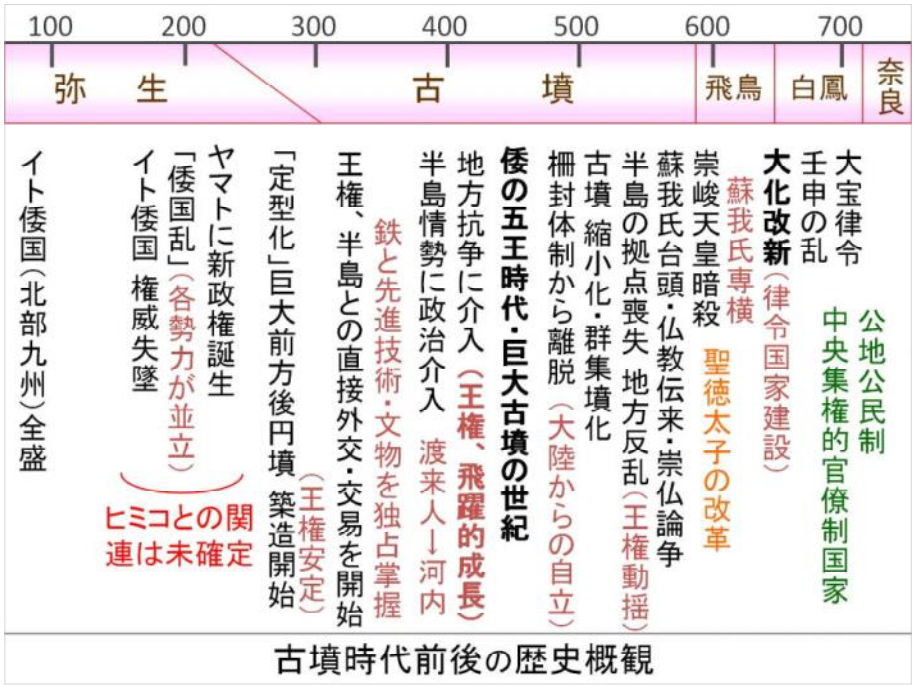
これで、外来文化の受け入れ方が全く違うことがお分かりいただけたかと思います。日本で文化融合が進んだ理由として、文化融合が行われる前に、固有文化が列島全体に深く浸透していた点を指摘できる訳です。
しかし、固有文化は日本列島に「どのように浸透していったのか？」「なぜ、かくも深く浸透したのか？」…この点を明らかにしないと、文化融合が日本でのみ起こった理由を説明することはできません。

そこで私は、奈良・平安時代の前にあたる、大和時代、古墳時代の研究を始めました。

古墳時代について理解するためには、特に「前方後円墳とは何か？」正しく理解しておくことが必要です。

前方後円墳の「後円部」は「円墳」で、お墓です。「前方部」はステージです。亡くなった前の王様や豪族から新たな継承者へと「首長霊」というものを引き継ぐ、儀式を行う場所が前方という部分です。

まず、古墳時代の前後を確認すると、前には弥生時代があり、後には奈良・平安朝がありました。この点を確認した上で、歴史を弥生時代からたどってみます。



弥生時代、各地に豪族がいましたが、特に九州北部には有力な豪族がいました。そんな中で、2世紀初頭、ヤマトに新政権が誕生したことはよく知られています。なお、ヒミコとの関連は未確定ですが、とりあえず、独立して議論が可能です。

3世紀後半になると、前方後円墳が大型化して、各地に作られていきます。これは今日の天皇家、すなわち大君家の力が徐々に強まっていったことを物語っています。

4世紀はじめになると、それまで九州北部の豪族が握っていた朝鮮半島との交易権を王権が独占し、近畿と朝鮮半島との間で直に交易が行われるようになりました。

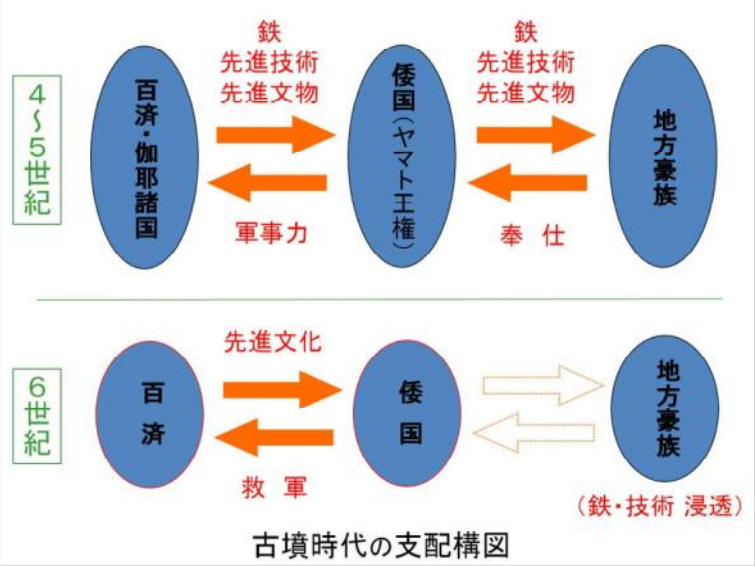
そして朝鮮半島から入ってくる鉄、先進技術、文物を王権が独占し、それを再分配し、どんどん支配力を強めていきました。また、そのような仕組みの中で、半島情勢にどんどん政治介入を行い、国内でもより一層、支配権を強めていきます。

5世紀という時代は、中国の方でも「倭の五王時代」と記されていて、巨大古墳の世紀として知られています。

やがて、日本は5世紀の終わり頃、柵封体制から離脱していきます。当時のアジアには、中国が世界の中心であって、中国から離れていけばいくほど格下になっていくという世界観がありました。日本も5世紀の前半ぐらいまでは、中国を中心とするアジア秩序の中にどっぷりと浸かり、中国を立てていくような姿勢を保っていたのですが、西暦478年に、「我々は中国とは関係ないぞ」とばかりに、冊封体制からの離脱、すなわち、中国との主従関係を断つことを宣言しました。日本はこうして、大陸から自立を図っていきます。

6世紀に入りますと、古墳はどんどん縮小し、朝鮮半島の拠点を失い、一方で蘇我氏が台頭し、秩序が崩れていきます。そして、崇峻天皇暗殺によって古墳時代は幕を閉じ、蘇我氏専横の世の中が続き、その後、聖徳太子が頑張り、大化の改新へと続いていきます。

つづいて、これは古墳時代の支配の構図です。



古墳時代の支配構図

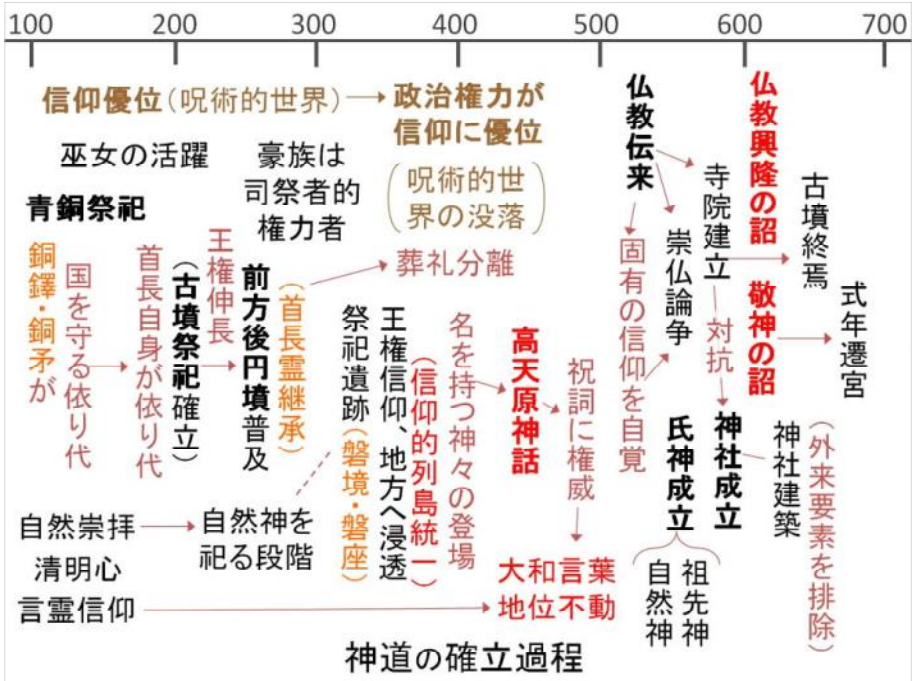
朝鮮半島からは、鉄・先進技術・文物をもらいます。他方、日本からは、当時の半島は三国時代で抗争の時代ですから、軍事派遣を行います。このような形で、ギブ・アンド・テイクがなされていました。

国内では、ヤマト王権が鉄・先進技術・文物を持っている。それを地方豪族に再分配し、代わりに奉仕をさせることで支配する。こうして、大君家を中心とした強力な支配体制が確立されました。

これが古墳時代ですが、6世紀になると、この支配構図は衰退します。それは、半島との間では取引が成り立っても、もはや日本国内には鉄も技術も行き渡ってしまい、豪族たちが王権に対して服従する必要がなくなったからです。こうして、ヤマト王権の求心力は急速に失われていきました。

つづいて、日本固有の信仰である神道がどのように確立してきたのか、流れをご覧いただきます。

古来、日本には、自然崇拝、清明心、そして言霊信仰、こういったものがあり、つづいて青銅祭祀が登場します。銅鐸・銅矛が「国を守る依り代」の時代です。それが古墳時代になると、首長そのものが依り代に代わっていく。信仰の対象が代わったのですが、これ



が時代の転換を意味する訳です。その後、王権が伸び、前方後円墳が普及し、首長霊信仰も広がっていきます。

なお、古今東西、歴史は青銅器の時代から鉄器の時代へと移っていきましたが、それは日本史の場合も同じです。日本史で、「青銅」といえば「弥生時代の銅鐸・銅矛」、「鉄」といえば「古墳時代の鉄」です。

関連して、概ね3世紀頃までは呪術的な世界があって、信仰が政治に対して優位に立っていました。シャーマニズム、すなわち巫女が活躍していた時代があり、豪族は政治的支配者であると同時に、宗教的な指導者でもありました。それが西暦300年前後までの時代です。

一方、信仰の場所はというと、当時はまだ、神社はありませんでした。今でも岩にしめ縄を張り、それを信仰する姿が残っていますが、それが当時の一般的な信仰のあり方でした。つまり、まだまだ自然の神様を祀る段階にありました。

しかし、ヤマト王権の伸張によって政治権力が信仰に対して優位に立ち、呪術的な世界は没落していきます。代わって、王権を中心とする信仰の体制ができていきます。

日本列島の神々は、このように大君家を中心とする信仰、高天原信仰、高天原神話という形で、すなわち、祝詞（のりと）として表現されています。そして、神話に権威があったということは、祝詞にも権威があったことを意味します。祝詞は当然、古来より伝わってきた大和言葉で作られたものですから、大和言葉は祝詞と同様に重要な地位を与えられ、安易に葬ったり置き換えてはいけないものになりました。

氏神が成立したのは、少し後でした。つまり、自然の神様とともに祖先を祀る、という信仰はこのあたりから始まりました。

このような状況の中、６世紀に仏教が伝来します。これはどのようなインパクトがあったのかといいますと、日本人が日本固有の信仰をする、その意味を自覚するキッカケとなりました。

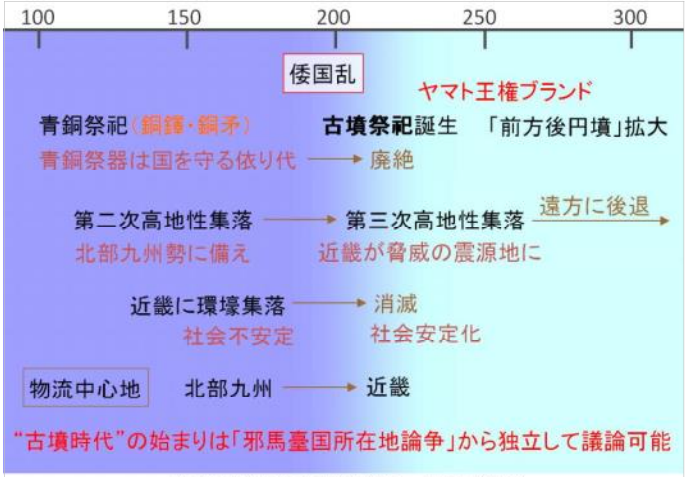
その後、仏教が伝来して、お寺が建つようになります。今の日本には神社がありますが、神社が建つようになったのは、お寺が建つようになった後のことです。神社はどういったものかといいますと、神社とは「お寺は外国のもの。それに対して我々日本人が信仰するのはこういったものだ。」ということを表したものなのです。

神社はお寺とどこが違うか分かりますか。神社は祠（ほこら）と言いますね、祠とは穂の蔵（ホクラ）です。ですから、昔からの神社は瓦を葺（ふ）いていません。白壁がありません。何より「穂の蔵」ですから、乾燥させなければならないので、床が高いのです。寺はそういうことはありません。

これが我々が古から持っている信仰の姿であり、祠に象徴される神社建築です。その様式が成立した背景には、外来の信仰である仏教と対抗があった訳です。

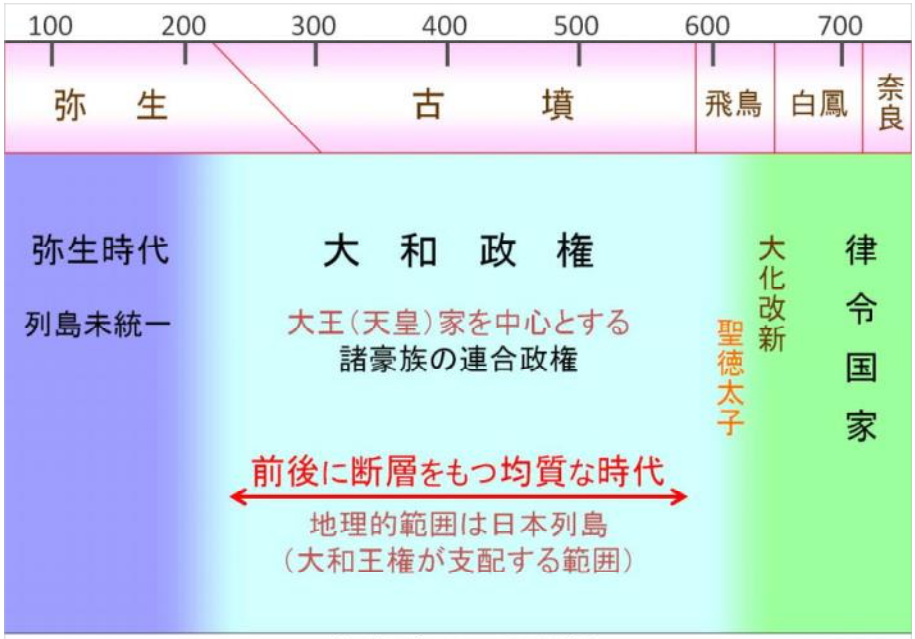
それ以降、信仰的には、仏教は仏教で大切にし、固有の信仰は「敬神の詔（みことのり）」で大切にし、どちらも大切にしてきた、というのが日本の歴史なのです。これがだいたい7世紀初頭ぐらいです。式年遷宮も7世紀に始まっています。

以上の説明をふまえて、「古墳時代は社会秩序として盛衰した」ことを確かめていきたいと思います。第一段階は、「古墳時代は前後に断層をもつ均質な時代」だったかどうか、検証することです。



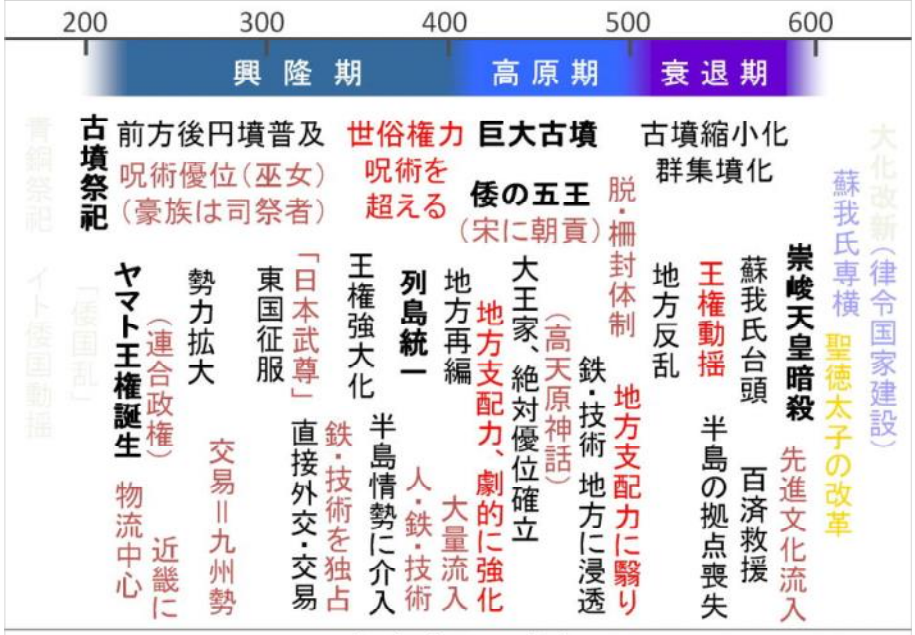
弥生時代と古墳時代の非連続性

これは、説明は省略しますが、「弥生時代と古墳時代の間には断層がありましたよ」ということを示した図です。同様に、こちらも説明は省略しますが、古墳時代と律令体制の時代の間にも断層があることは明らかですので、「古墳時代は前後に断層を持つ均質な時代である」ことは、容易に結論できます。



古墳時代の均質性

第二段階は「一度限りの盛衰」と確認することですが、盛衰はこのようになっていますので、「一度限り」として問題ありません。



古墳時代の盛衰

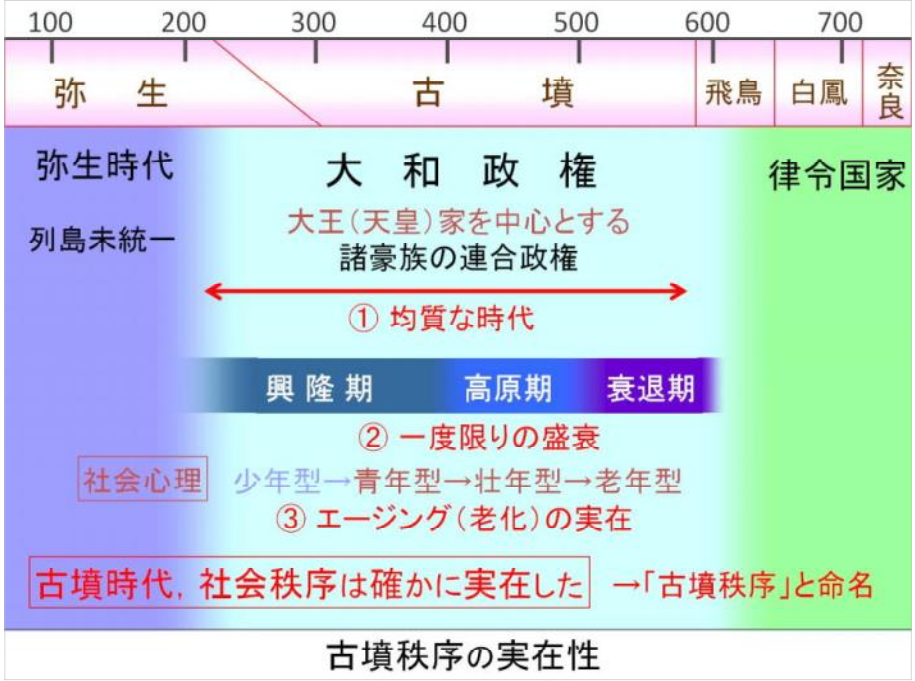
第三段階は、「盛衰がエージングによるもの」であるかどうか、すなわち「社会心理がエージングを示している」かどうか、検証することです。

典型的に発現しているのは壮年型の社会心理で、これは「高天原神話」として発現しています。奈良・平安秩序の「源氏物語」に対応する現れ方です。同様に、老年型社会心理は一種の宗教心理が「崇仏論争」という形で現れています。

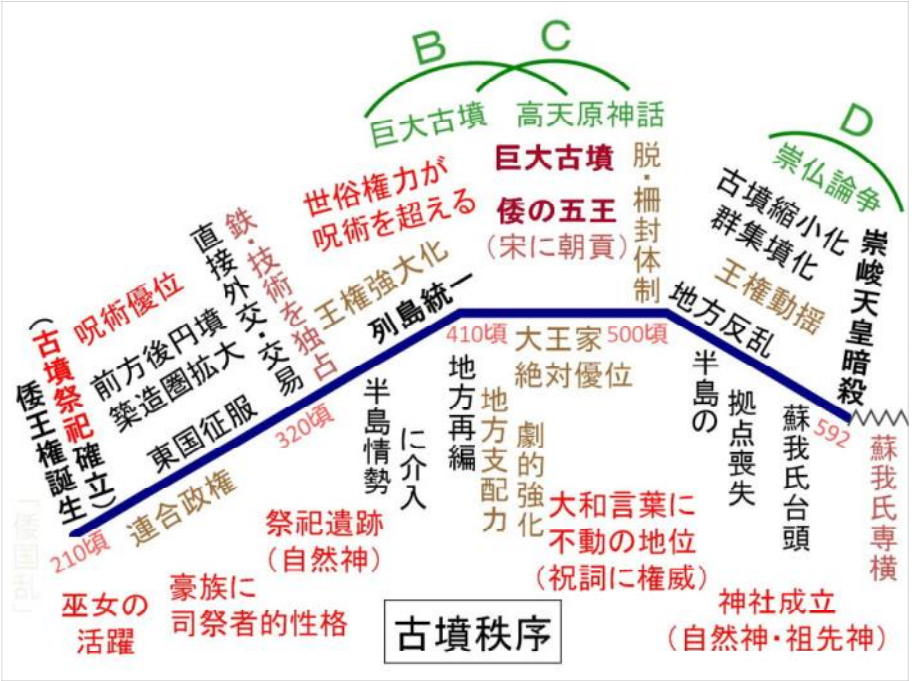
問題は少年型と青年型ですが、残念ながら、少年型の社会心理が発現した文化を見いだすことはできません。それに対して、青年型の社会心理は、一応「巨大古墳」として現れたと解釈することが可能です。巨大な古墳には、権力を誇示する装置という意味合いもあり、一種のモニュメント的なものと捉えられるからです。

以上、仮に「青年型」を除いたとしても、エージングを認めることができます。

前方後円墳の変化（4世紀末）



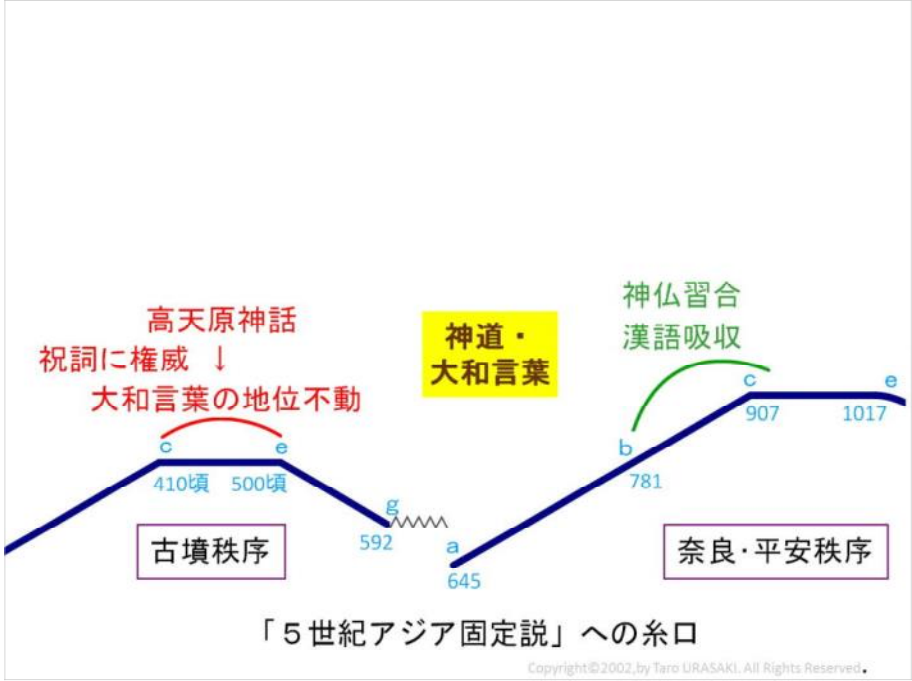
第一段階から第三段階までの手続を経て、古墳時代に社会秩序が確かに実在したことを確認できた訳ですが、それを図式化すると、このようになります。



ここまで、日本固有の信仰である「神道」や、同じく日本固有の言語である「大和言葉」が、どのようにして形づくられたり、広まったり、権威づけられたり、定着してきたりしたか、お伝えしてきました。

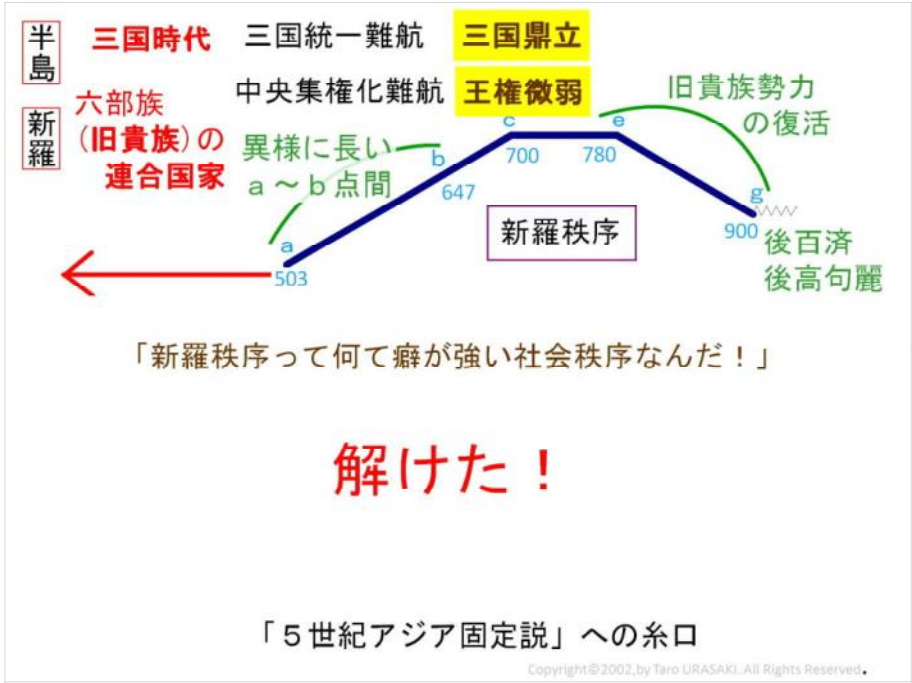
たしかに「いかに浸透してきたか」は、お分かりいただけたと思います。しかし「なぜここまで深く浸透したのか？」という問いには、未だ答えることができていません。私自身がこの限界に直面して困り果てていたのは、平成12年の暮れ頃でした。

突破口が開けたのは、その翌年、平成13年（2001年）の年明け頃でした。



日本では、神仏習合や漢語吸収の前提条件が、高天原神話、祝詞の権威、大和言葉の地位不動であって、古墳時代に一つのベースがあることが分かりました。

一方で新羅の方はどうかといいますと、私がこれまでいくつもの社会秩序を研究してきた経験から、「これは何か、少し変わったものだな」と感じていました。



それは、社会秩序が生まれてから興隆加速期を迎えるまでの期間が異様に長く、スッキリしないのです。さらに奇妙に感じたのは衰退期です。王権が衰えていく時、「昔、力を持っていた貴族が再び復活する」という形で、社会が崩れていったのです。

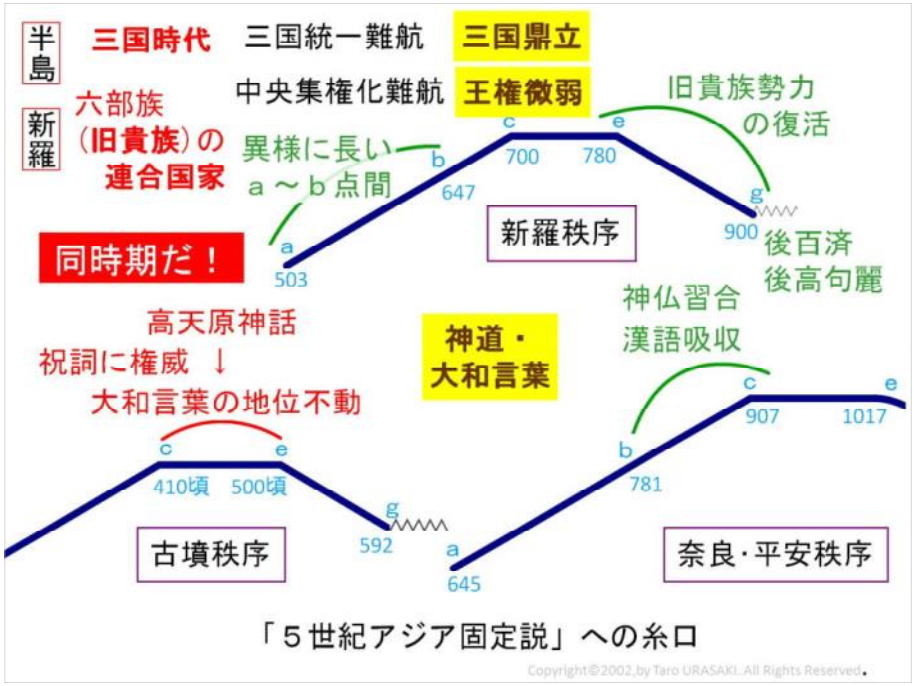
昔の貴族が復活して主導権を取り戻すということは、日本の歴史に置き換えると、どういうことなのでしょうか。

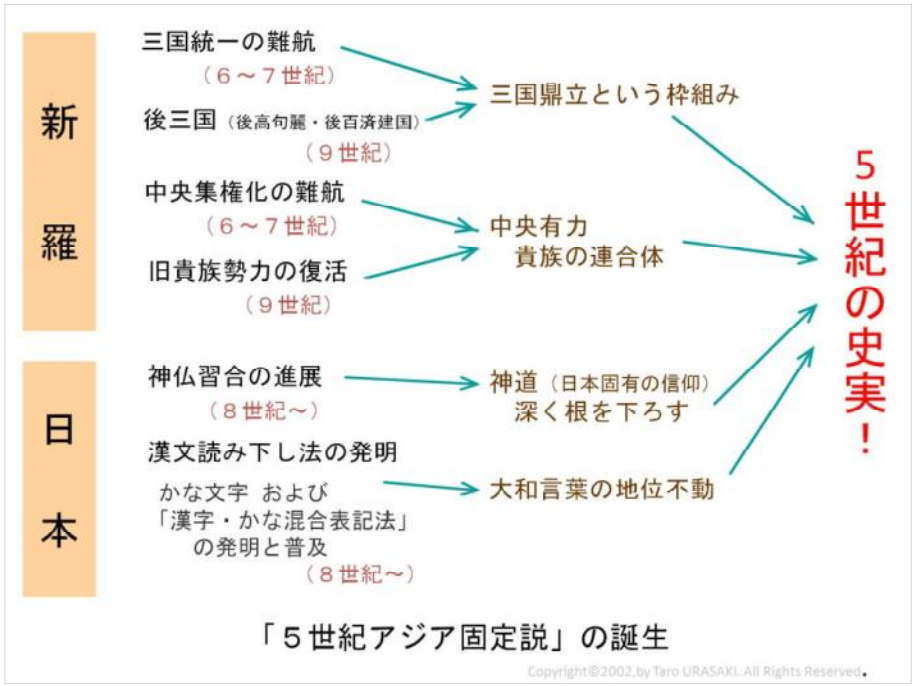
源平の時代、鎌倉幕府成立により貴族は完全に力を失い、武士の世の中が始まりました。鎌倉幕府が成立して百数十年後に建武の新政があり、一時期、後醍醐天皇が登場しましたが、日本ではそのまま武家の政治が続きました。

しかし韓国では、例えるなら、後醍醐天皇が出てきたら、そのまま天皇中心の世の中が

再開し、今日に至る、というようなことが起こったのです。「何だそれは？」という感じですよね。こんなに不思議な歴史は、私はそれまで見たことがありませんでした。
　さらにもっとおかしなことは、百済とか高句麗とか、もう何百年も前に滅びているにも関わらず、昔の百済の地にあった勢力は後百済と名乗り、昔高句麗だったところに作られた国は、後高句麗と名乗っています。これって、実に不思議ではありませんか。

　異様にa～b間の成長期が長いのは、三国統一が難航したとか、中央集権化が難航したことが関係しています。つまり三国鼎立や王権微弱という構図があったから、こういう変な形になっている訳です。それは、旧貴族が復活してきて王権が衰え、三国鼎立が後高句麗や後百済という歴史にもつながっています。
　「三国鼎立や王権微弱が鍵か。それらが形づくられたのは、いつ？ …古墳秩序の高原期と同じ頃じゃない？ … アッ、そういうことか！！」





「日本でも朝鮮半島でも、この5世紀に起こった出来事が、その後の歴史展開に大きく影響している。」…そんな構図。「世の中の枠組みや民族的な意識が5世紀に固まった。」…そんな働きが見えてきたのです。すべてのルーツが5世紀に集中していたのです。

こうして「文明準備現象」の正体が、少しずつ明らかになっていきました。

＜質問コーナー　1＞

韓国と日本が昔どういう関係だったのか、もう少し詳しく教えてください。

半島の社会が固まる前の三国時代には、文物とか鉄を輸入し、軍事力を派遣したりして交流が盛んでした。
今の私たちが日本と半島はまったく別のものだと考えてしまっているのは、日本列島は日本列島で社会が固まり、朝鮮半島は朝鮮半島で社会が固まってしまったから、対馬海峡のところで勝手に線を引いているのであって、その頃の時代はまだ固まる前であるとするならば、たまたま海の向こうかこっちかという程度のことであり、今ほどお互い別の国という意識はなかったのではないかと考えています。

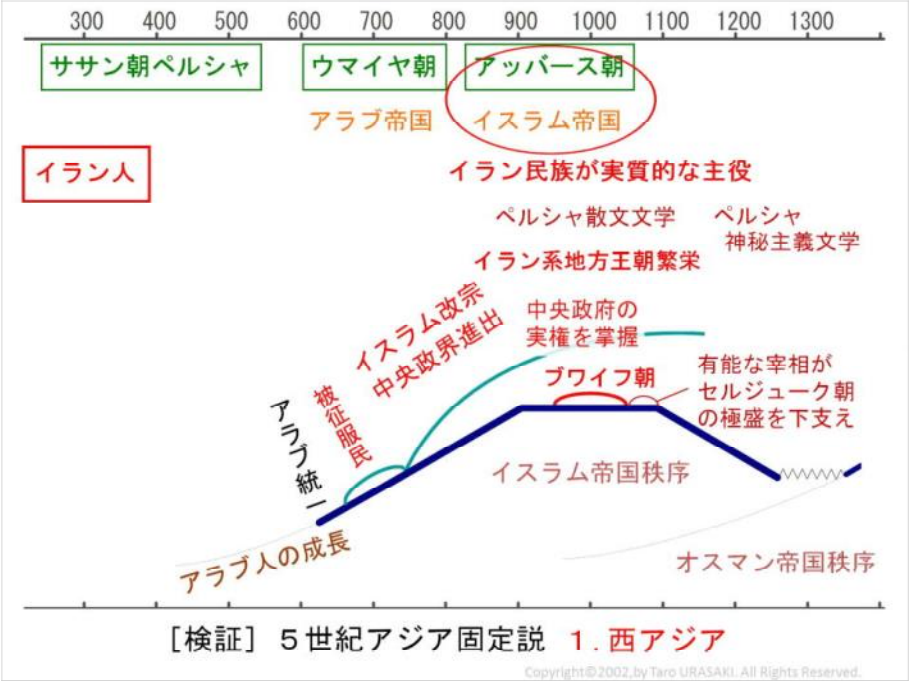
これからは日本文化とともに言葉を大切にしていかなければならない時代だと思います。

本当に言葉はとても大切だと思います。
私たち日本人の持つ情緒や感性は、私たちが使っている大和言葉から生まれています。演歌や、私は谷村新司の歌が好きなんですが、「いい日旅立ち」などは、みな大和言葉で書かれています。こうした歌が心にしみてくるのは大和言葉のお陰かなと考えています。
立場を変えて、韓国では「冬のソナタ」等で使われている言葉は、韓国固有のものであり、外来語は入っていません。
このように、言語というのは、その国の情緒を共有したり伝えたりしていく上で、とても大切であると思っています。特に日本においては、日本固有の大和言葉を再認識し、しっかりと伝えていくことは、とても大切だと考えています。

＜「５世紀アジア固定説」は、本当に正しいのか＞

「5世紀は特別な時代であった。」という私の発見は、「たまたま日本や韓国で成り立っているように見える」だけなのか、それとも「文明サイクルの一部として普遍的に作用している」のか、アジア各地の歴史で検証をしてみました。

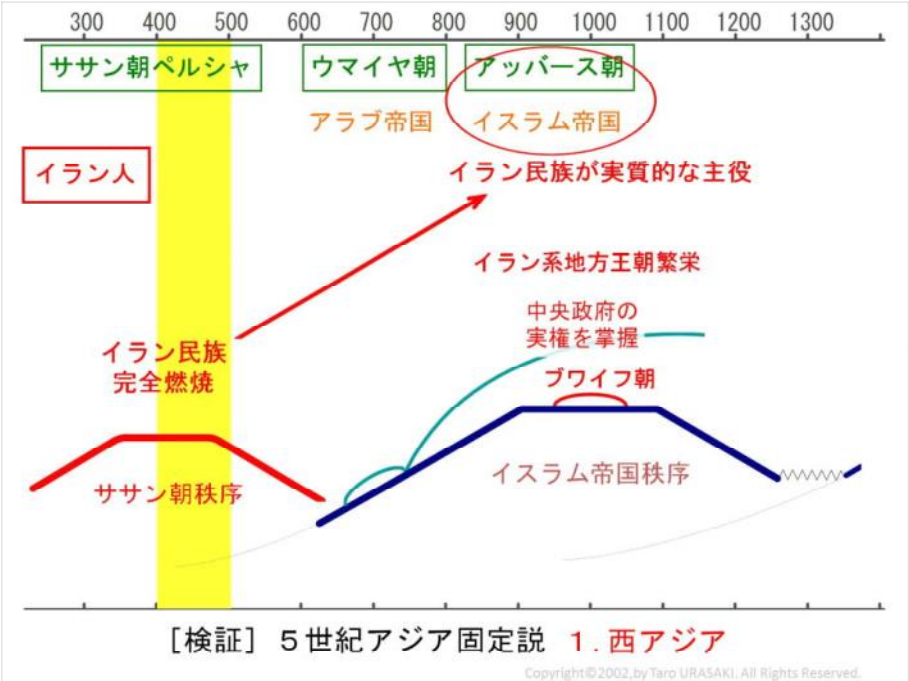
トップバッターは西アジアです。



アラブ人の中にマホメットが登場し、アラブ帝国につづいてイスラム帝国が築かれていきますが、この歴史は、イラン人（ペルシャ人）の動向に注目していく必要があります。

イラン人は一時期アラブ人に支配されますが、その後、イスラム教に改宗することを通して少しずつイスラムの中央政界に進出し、ついに実権を握ってしまいます。

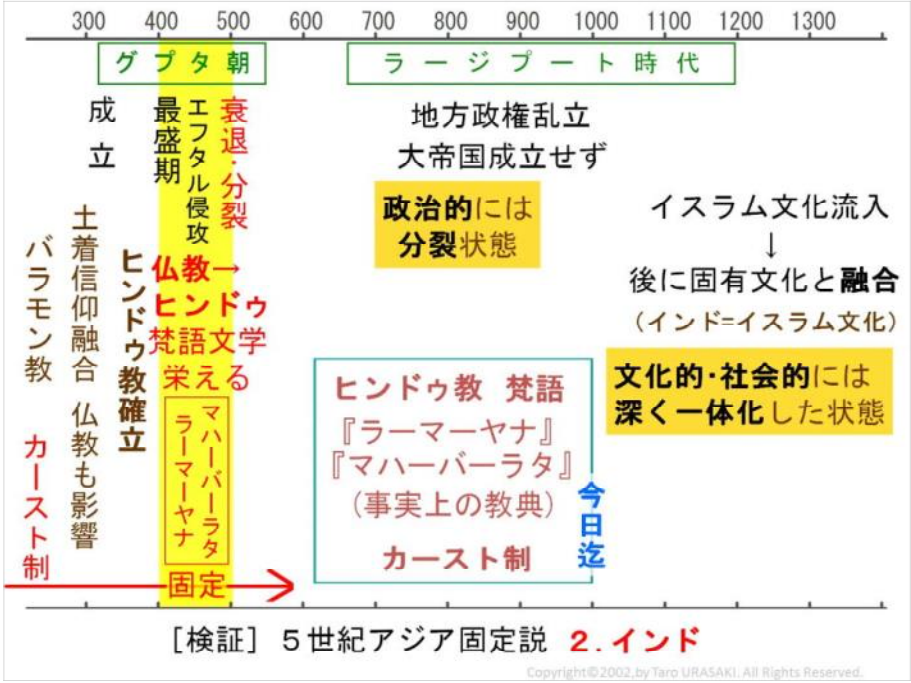
ブワイフ朝の頃はイラン系の地方王朝が繁栄したり、イラン人がとても元気な時代でし



た。後にトルコ人がこの世界にやって来ますが、実質的に支えていたのはイラン人だというのは明らかです。いろいろな文学作品を残したのも、イラン人が中心でした。
　このように、イスラム文明を見ていく時には、イラン人（ペルシャ人）という視点を必ず持たなければいけません。

　そのイラン人は5世紀にどうだったのかというと、ササン朝ペルシャという完全燃焼型の社会を作っていました。つまり、５世紀にイラン人が完全燃焼だったので、西アジア、イスラム帝国は、イラン人が実質的に取り仕切っていたということが理解できます。

　次はインドです。

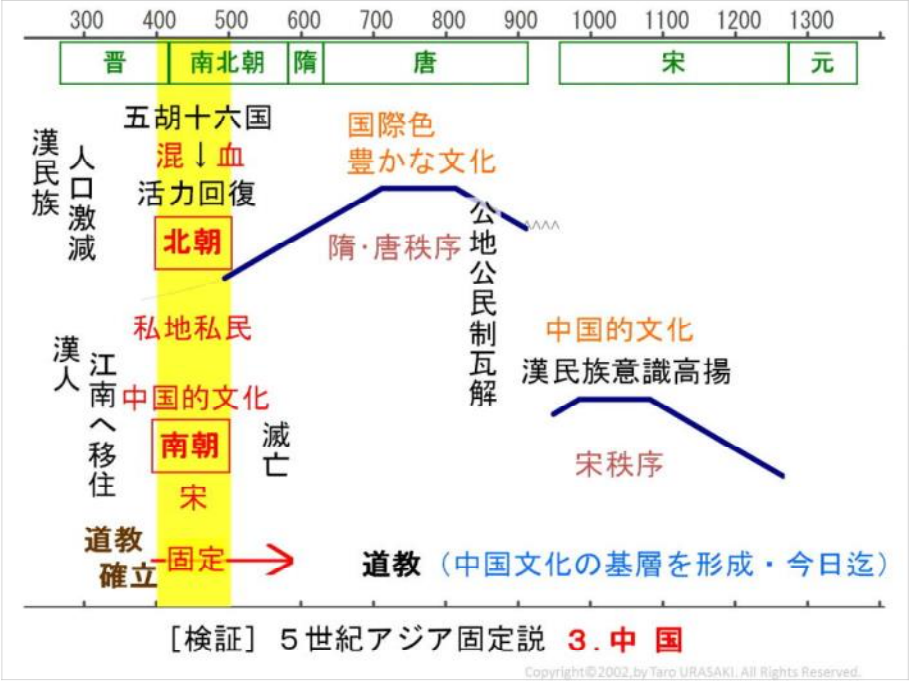


　インドは政治的には分裂状態で、大帝国は現れませんでした。半面、後にインド＝イスラム文化が栄えるように、文化的・社会的にはヒンドゥが深く共有されてきた、そういう社会です。

　ここもやはり、5世紀に注目すると、そのように展開した理由が分かります。
　グプタ朝という王朝は、5世紀の終わり頃には完全に衰退・分裂し、バラバラの状態でした。一方、ヒンドゥは、日本の神道と同じような形態で形作られていきました。
　インドでキーワードとなるのは「グプタ朝」と「ヒンドゥ」ですが、ヒンドゥは4世紀頃に確立し、グプタ朝がヒンドゥを保護して、グプタ朝の下で定着していきました。このように「政治的にはバラバラだが、文化的・信仰的には一体である」というインドの特徴は、やはり5世紀に運命づけられていることが分かります。
　また、カースト制は、5世紀以前からあったものがそのまま5世紀を通過したので、今日まで残ってしまったのだと理解できます。

　次は中国です。

　中国の5世紀は南北朝の時代です。隋や唐につながる北朝では、国際色豊かな文化が栄え、南朝の宋では伝統的な文化が栄えました。
　5世紀とそれ以後の歴史の流れは、次のように理解できます。北朝では、漢民族が衰えたところに混血が起こり、民族的な活力が回復し、国際色が豊かになりました。またこの時期の機構は私地私民的であったため、後の公地公民制は瓦解してしまいました。

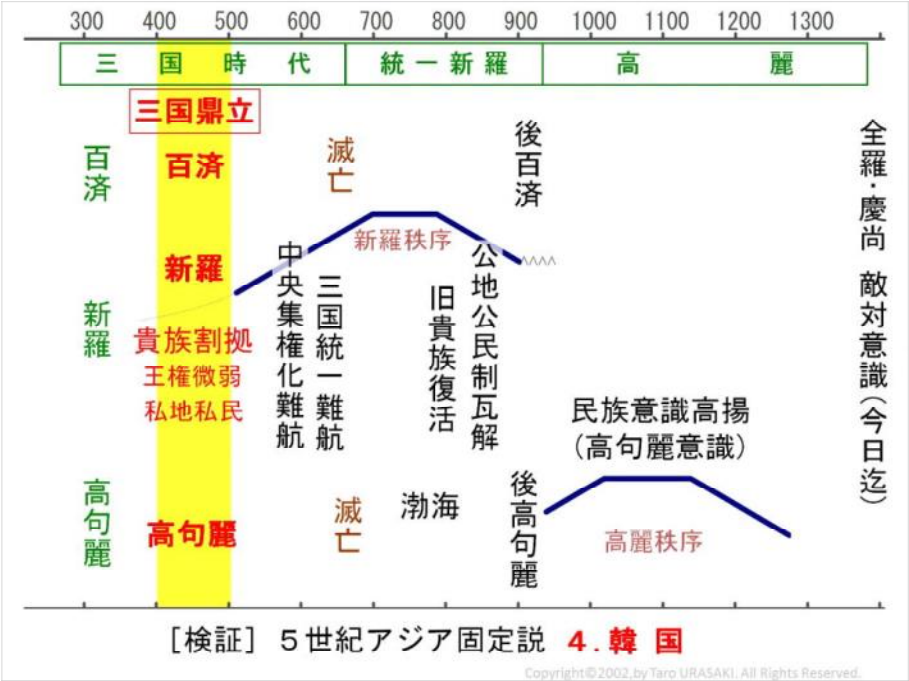


南朝のひとつに「宋」という国があり、いったんは滅亡するものの、後に再び現れました。中国的文化は南朝の「宋」で栄えましたが、11世紀の「宋」で再び栄えました。

タオイズム（道教）は、これは4世紀ぐらいに確立したものが5世紀を通過したので、現在まで残っている、と解釈できます。

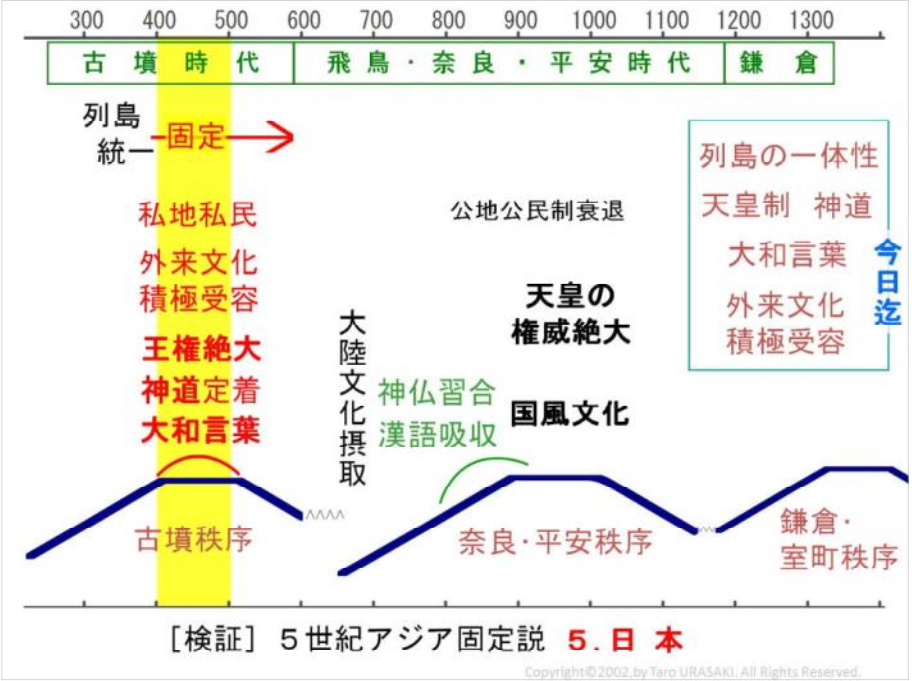
以上。中国でも、5世紀はとても重要な時期だった訳です。

韓国は先ほどご説明した通りです。



最後に、日本はとても大切ですので、ここであらためてご説明させていただきます。

奈良・平安時代があり、大陸文化を取り入れ、神仏習合、漢語吸収、文化融合が起き、国風文化が現れ、天皇が平安王朝で絶大な権威を持っていました。



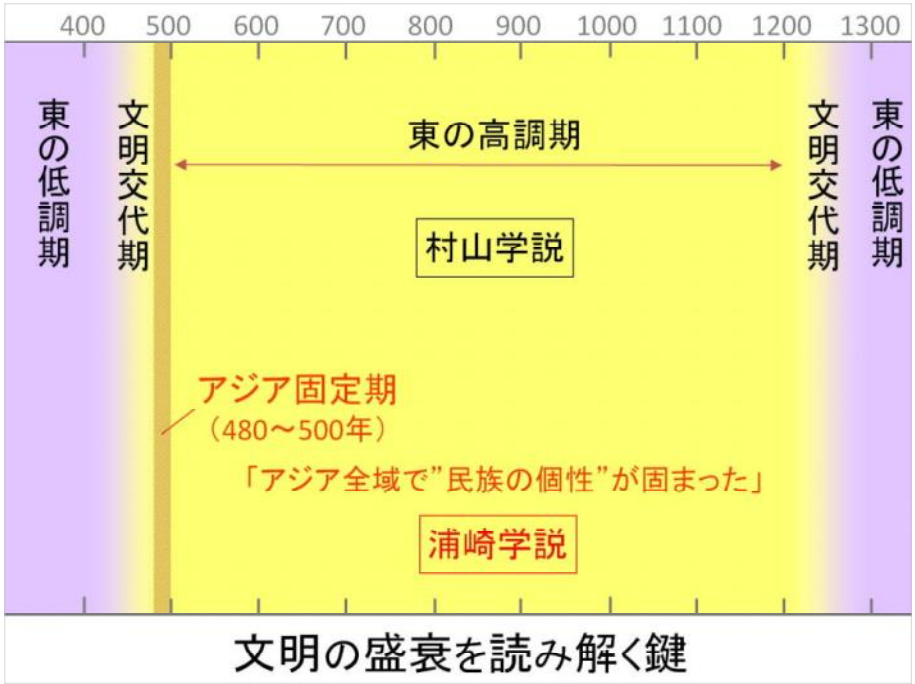
今日まで残る日本の特徴は、天皇制、神道、大和言葉、日本列島の一体性、外来文化を積極的に受け入れる民族性といったものですが、実は、これらはすべて黄色い帯で示された5世紀に定着したものです。

神道や大和言葉が形づくられたのは、5世紀です。国風文化というのは、外来文化が入ってくる前の姿ですので、古墳時代です。天皇の権威が絶大というのは、やはり5世紀の姿です。外来文化を積極的に取り入れるのも、やはりこの古墳時代です。

公地公民制が衰退したのは、この私地私民制によるもので、豪族が割拠していた古墳時代の名残と考えられます。列島の一体性は、大和朝廷が列島を統一し、その状態で固定したからと考えることができます。

以上、日本の民族性が固まったのは、いろいろな意味で、5世紀…大和朝廷時代の役割が大きいことが分かります。

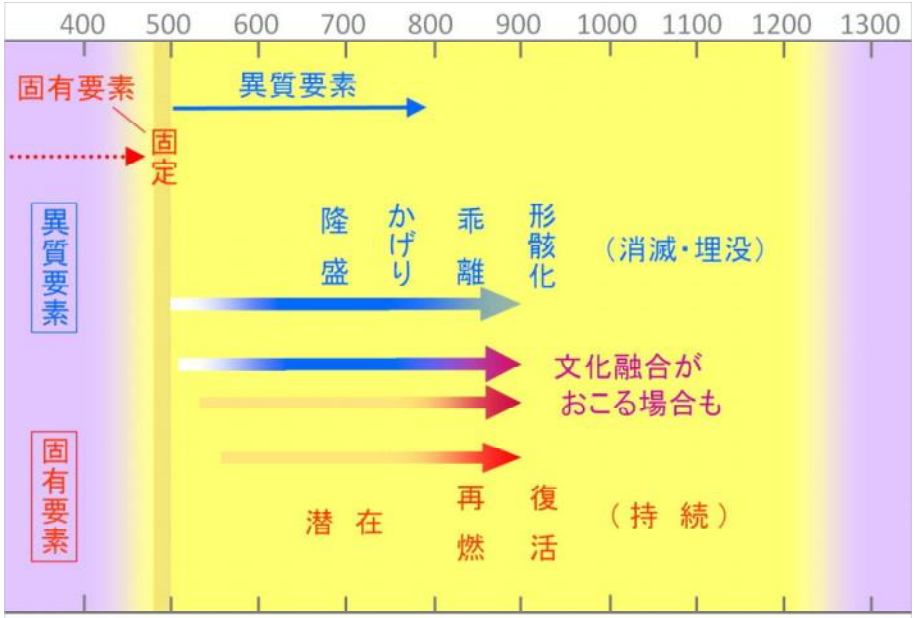
さらにこれは私（浦崎）の仮説なのですが、480～500年の20年間に民族の個性が固ま



ったということが、後の研究から見えてきました。

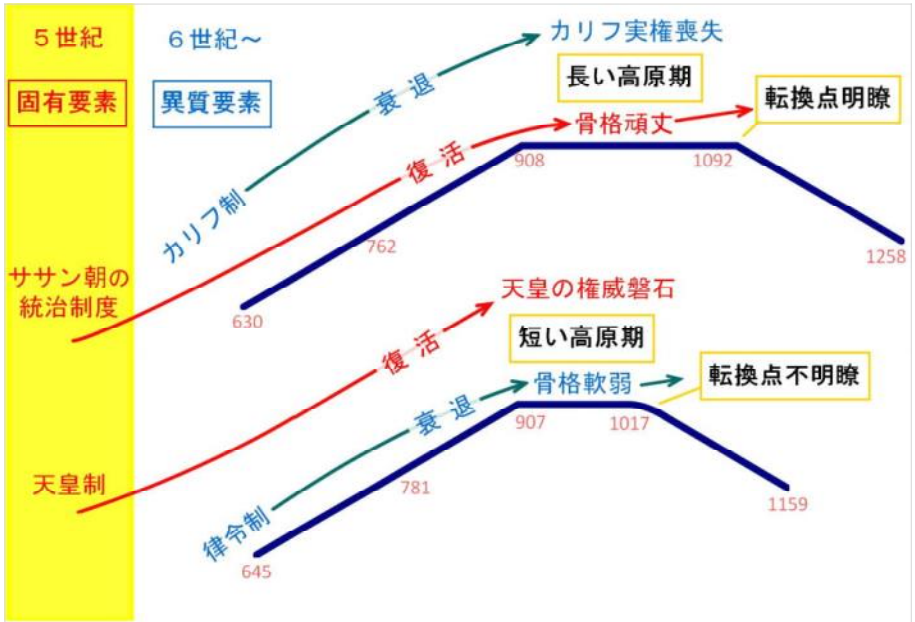
5世紀の終わりまでに登場したものを固有要素、その固定期が終わってから出てきたものを異質要素とすると、異質要素はとりあえず7～8世紀あたりには栄えますが、その後衰退していき、やがて埋没してしまいます。それに対して5世紀末に固まったものは、いったん表から消えても、やがて再び姿を現してくる。このような構図が見えてきました。

また、先ほどの神仏習合など、固有なものと異質なものが文化融合を起こす場合もあることが分かりました。



文明の盛衰を読み解く鍵

先ほど、村山節先生にご指導いただいたことをご紹介しましたが、日本の奈良・平安朝とイスラム帝国は、出発点から上り坂（成長期）のところをご覧いただいて明らかなように、ほとんど同じようなペースで展開しています。ところが、日本は907年、イスラムは908年に始まる高原期の長さがまったく違うのです。イスラムの方は1092年まで二百年近く高原期が続くのに対して、日本は百年ちょっとしかありません。



奈良・平安秩序とイスラム帝国秩序の類似点と相違点

Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

この違いについて、村山先生は「日本は田舎だから全盛期が短かかったんだ」というご説明をされていました。

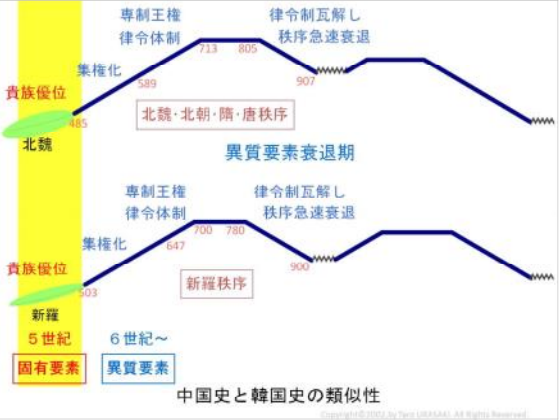
もう一つは、イスラムの方は高原期が終わる転換期が明瞭で、ポキッと折れている感じになっています。それに対して日本は、道長から頼道の時代にかけてダラダラらと下り坂へ入っているのですが、この違いはどこから来ているのでしょうか。

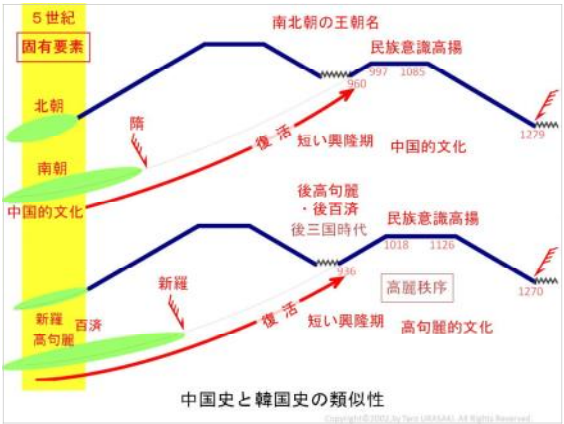
イスラムで高原期が長かったのは、社会の骨格にササン朝の制度を使ったから。ポキッと折れたのは頑丈だったから。一方で日本の高原期が短かったのは、骨格に律令制を使ったから。ダラダラと衰退期へ移行したのは、骨格が軟弱だったから。このように考えることができます。

他方、アラブ人の宗教的な権威者であるカリフは、高原期にむけて実権を喪失していきました。それとは対照的に、高原期にむけて天皇制は盤石になっていきました。これは、カリフが異質要素、天皇制が固有要素であったから、と考えることができます。

以上のように、5世紀に現れた固有要素か、それとも6世紀以降に現れた異質要素かによって、社会に定着するかどうかが決定的に違うという構図が見えてきた訳です。

類例は、中国と韓国の歴史にも見いだすことができます。青字で書かれたものが異質要素、赤字で書かれたものが固有要素です。





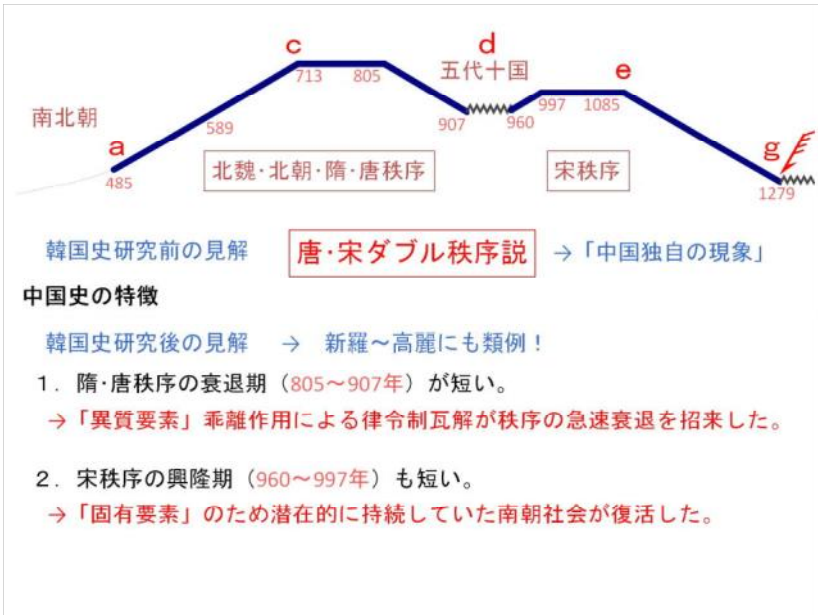
中国でも韓国でも、6世紀に集権化、7世紀に先制王権や律令体制が強化されますが、9世紀に入ると急速に瓦解し、社会秩序は一気に衰退。10世紀に入る頃に終焉を迎えています。これらはいずれも「6世紀以後に登場した異質要素は、9世紀に衰退し、10世紀に消滅する運命にあった」と考えると、うまく説明できます。

また、中国では隋や唐につづく宋の時代に中国的文化が栄え、韓国では高麗の時代に高句麗的文化が栄える、という現象が共通して起こっているのですが、同様に「5世紀に登場した固有要素は、9世紀に再燃し、10世紀に最高潮に達する運命にあった」と考えると、うまく説明できます。

このあたりも村山節先生や林英臣先生は、「中国は二つが一体となった社会秩序のできるお国柄だ」とか「隋唐と宋は二つの社会秩序がセットになって一つの社会秩序をつくる『ダブル社会秩序』だ」という説明をされていたのですが、それは学者の世界では通る話ではありません。より合理的な説明を行う必要があります。

私の見解は次の図に示すとおりです。

なぜ、中国では805年から907年に衰退期が訪れ、急速にガタガタときたのか。それは異質要素が乖離していったから。他方、なぜ、960年から997年という、ごく短期間のうちに社会が建設されていったのか。それは固有要素が再燃してきたから。このような見解を持っています。

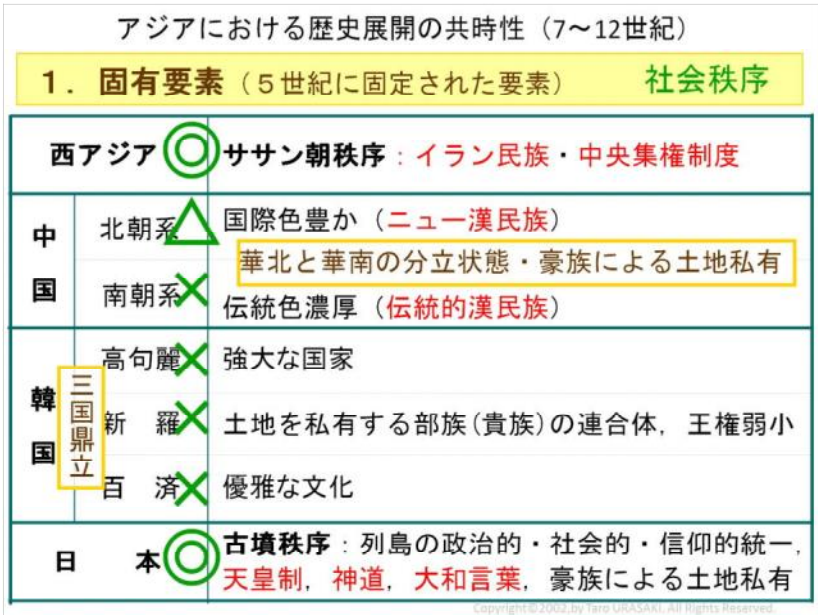


通常、歴史は縦の視点…時間軸に沿って展開を追っていきますが、横の視点…すなわち「同じ時代に、どの地域で何が起こったのか」という空間軸をもって同じ時代を輪切りにしてみると、同じ意味の出来事が各地で同時多発的に起こっているとことが分かります。

はじめに5世紀。アジア一帯で固有要素が登場していることが分かります（1）。7世紀～8世紀半ばにかけては異質要素が隆盛をみせます（2）。が、7世紀半ばになると「異質要素の陰り」が起こります（3）。そして9世紀、「固有要素の復活化」が進行し（4）、10世紀の初め、「異質要素は完全に乖離し、固有要素が完全復活する」という、同じ意味をもつ出来事が、これだけ短期間に、見事に集中して起こっています（5）。

さらに10～12世紀には「固有要素の隆盛と5世紀への回帰現象」が各地で起こっています（6）。日本の平安末期に荘園ができ、不輸の権・不入の権が成立しますが、これは大和朝廷の時代とまったく同じ構図となっており、一種の「5世紀への回帰現象」であったと解釈できます。

以上、「固有要素」「異質要素」という視点をもつと、アジア一帯の歴史は統一的に理解することができます。



アジアにおける歴史展開の共時性（7～12世紀）

2．異質要素とその隆盛　（概ね7～8世紀中葉）

西アジア		**アラブ帝国**（ウマイヤ朝＝661～750年）
中国	北朝系	**公地公民制**順調（隋:581年～盛唐:755年）
	南朝系	（滅亡）
韓国	高句麗	（滅亡）
	新　羅	**専制王権・公地公民制**順調（～8世紀中葉）
	百　済	（滅亡）
日　本		**大陸文化摂取・公地公民制**順調（～8世紀中葉） 大仏開眼（752年）

Copyright © 2002, by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

アジアにおける歴史展開の共時性（7～12世紀）

3．異質要素のかげり　（7世紀半ば）シャープ！

西アジア		**ウマイヤ朝**（アラブ帝国）**滅亡**（750年）
中国	北朝系	**安史の乱**（755～763年）
	南朝系	―
韓国	高句麗	―
	新　羅	**職田制**（公地公民制）**廃止**（757年）
	百　済	―
日　本		奈良の政界混乱（757～770年）

Copyright © 2002, by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

アジアにおける歴史展開の共時性（7～12世紀）

4．異質要素の乖離と固有要素の復活化　（9世紀）

西アジア		**アッバース朝 衰退** =アラブ民族の衰退（9世紀） **イスラム**は**興隆** =イラン民族と融合（9世紀）
中国	北朝系	**律令制瓦解**とそれに伴う**社会秩序衰退**（9世紀）
	南朝系	―
韓国	高句麗	―
	新　羅	**律令制瓦解**とそれに伴う**社会秩序衰退**（9世紀）
	百　済	―
日　本		**律令制**の**衰退・土地私有化**の**進行**（9世紀） **仏教**･**漢語**は普及 =日本固有の文化と融合（9世紀）

Copyright © 2002, by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

アジアにおける歴史展開の共時性（7～12世紀）

5．異質要素乖離と固有要素復活の完了（10世紀初頭頃）

西アジア		カリフ形骸化・象徴化（908年） イラン人官僚 アッバース朝の実権掌握
中国	北朝系	隋・唐秩序滅亡（907年）
	南朝系	「宋」建国
韓国	高句麗	「後高句麗」建国（901年）→高麗秩序誕生
	新　羅	新羅秩序滅亡（900年）→後三国時代（～935年）
	百　済	「後百済」建国（900年）
日　本		延喜格完成（907年） =旧地方豪族の土地支配を実質的に容認

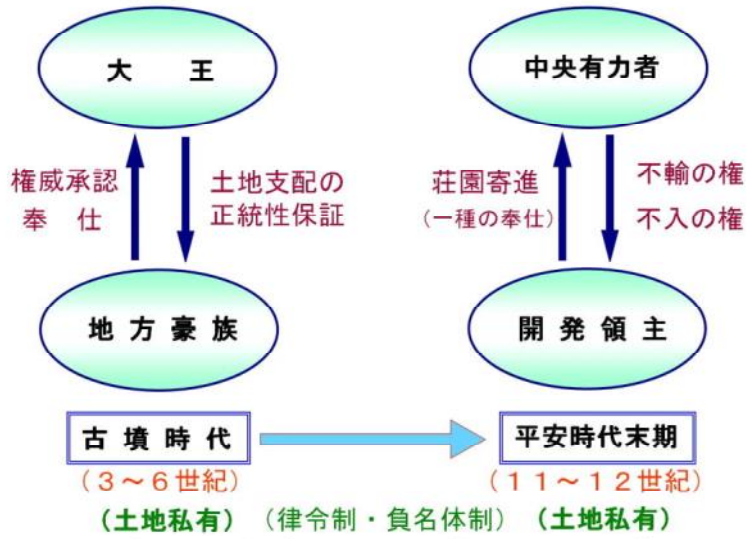
Copyright © 2002 by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

アジアにおける歴史展開の共時性（7～12世紀）

6．固有要素の隆盛と5世紀への回帰現象（10～12世紀）

西アジア		イラン民族 活躍（10～11世紀） （中央：ブワイフ朝，地方：イラン系諸王朝）
中国	北朝系	後継秩序なし（北方民族に埋没？）
	南朝系	中国的文化（11世紀），齋と領域酷似（12世紀）
韓国	高句麗	民族（＝高麗的）文化（11世紀）
	新　羅	後継秩序なし（高麗に埋没？）
	百　済	〃
日　本		国風文化 開花（10～11世紀） 荘園寄進 激増（12世紀）

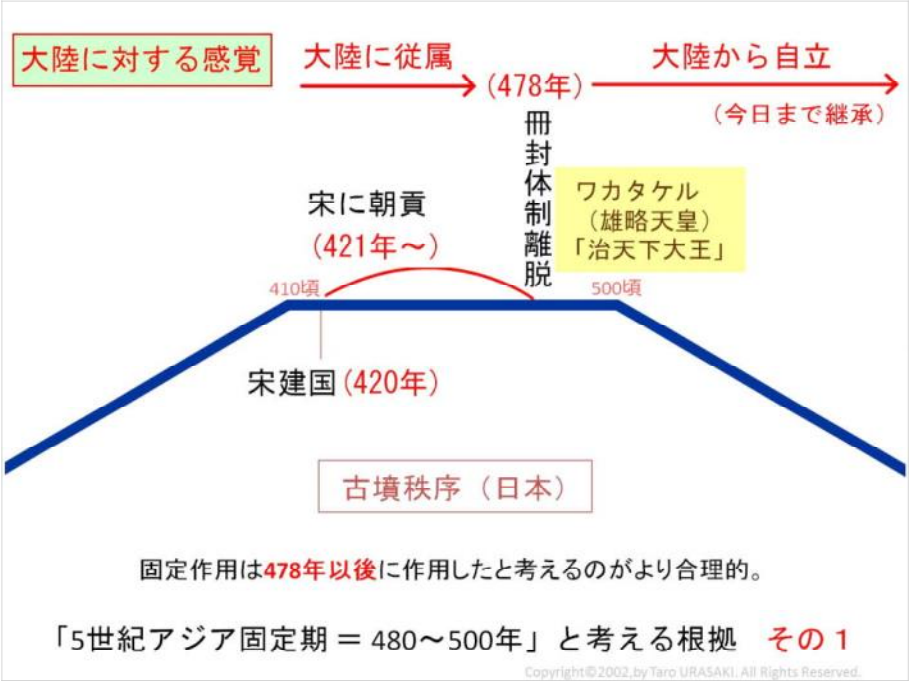
Copyright © 2002 by Taro URASAKI. All Rights Reserved.



日本の土地制度にみる５世紀への回帰現象

Copyright © 2002 by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

つづいて、先ほど少しだけふれた、「固定作用ともいうべき作用が働いたのは、5世紀末の20年間に限定できる」ことの根拠を列挙していきます。



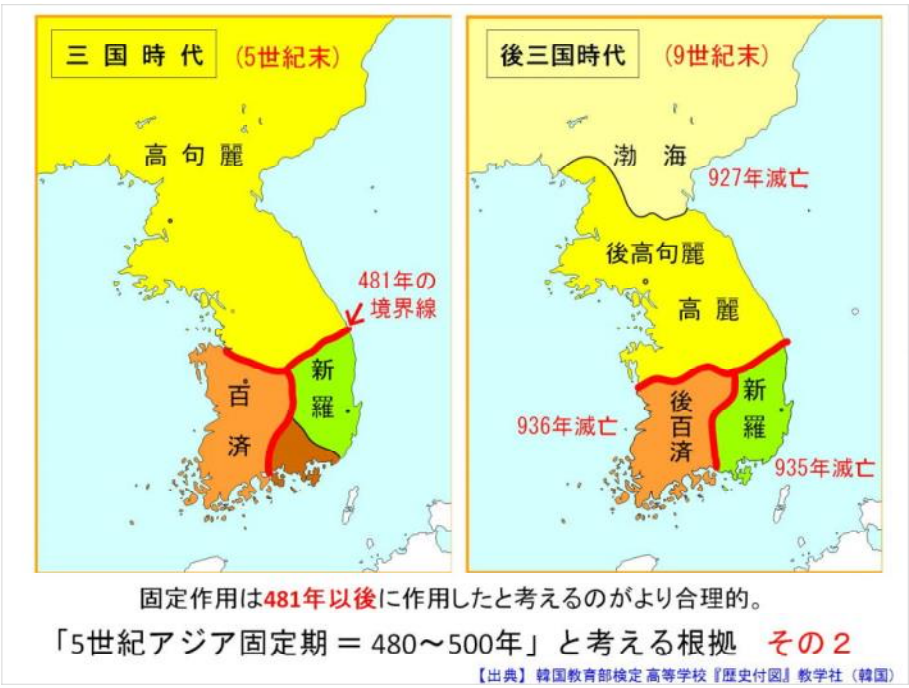
第一は「大陸に対する日本の自立意識」です。日本は大陸に対して自立意識を持っている証として、冊封体制からの自立を宣言したのは478年です。

現在、日本と韓国の間では摩擦が起こっていますが、それがなぜ起きるのか。実は、理由はとても簡単なことなんです。私たち日本人は「日本は中国に対して対等だ」という感覚を持っています。そして「韓国は中国に対して格下である」という感覚を持っています。

それに対して、韓国人は「韓国は中国の弟分であるけれど、日本はその韓国の弟分のようなもの」という感覚を持っています。この点について韓国人の友人に尋ねてみると、「その通りだ」と答えていました。

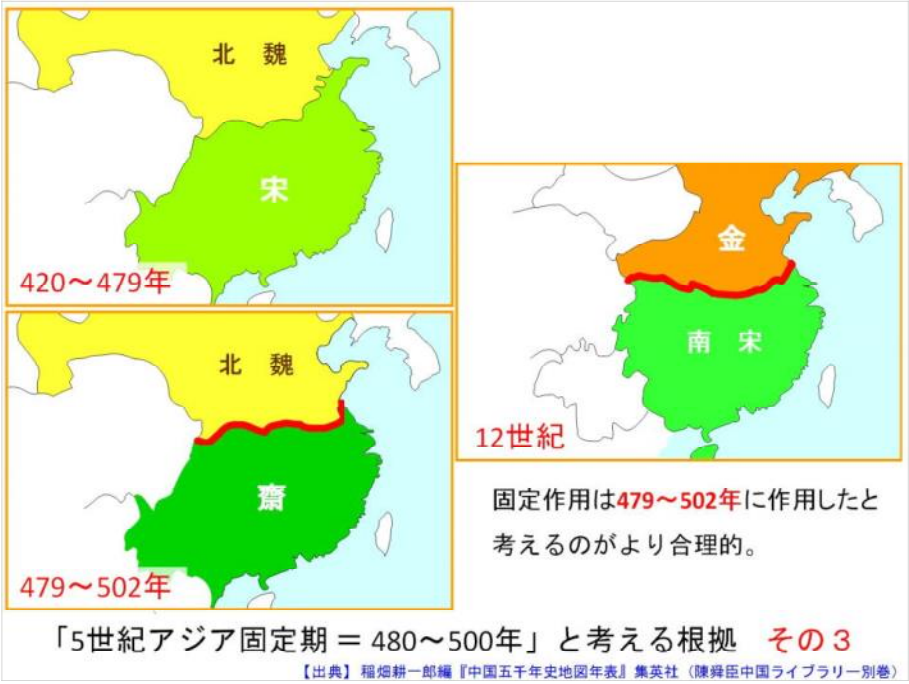
日本が大陸からの自立を宣言したという意味において、この時期はとても重要です。

第二は「朝鮮半島における三国時代と後三国時代の境界線」です。



481年当時の境界線を示したものが左側、後三国時代の勢力図を示したのが右側です。両者から、「固定作用は481年以降に作用した」と考えるのが合理的です。

第三は「中国大陸における南北朝時代と12世紀の境界線」です。



南宋（12世紀）の勢力範囲を、宋（420～479年）や齋（せい：479～502年）の勢力範囲と比較すると、齋の時代と一致しています。このことから、「固定作用は479年以降に作用した」と考えるのが合理的です。

第四は、インドです。インドで政治的分裂が顕在化したのは5世紀末でした。

以上のように、「アジアでは480～500年の20年間に固定作用が働いたと考えるのが合理的である」という根拠を、各地の歴史に見いだすことができます。

まとめ

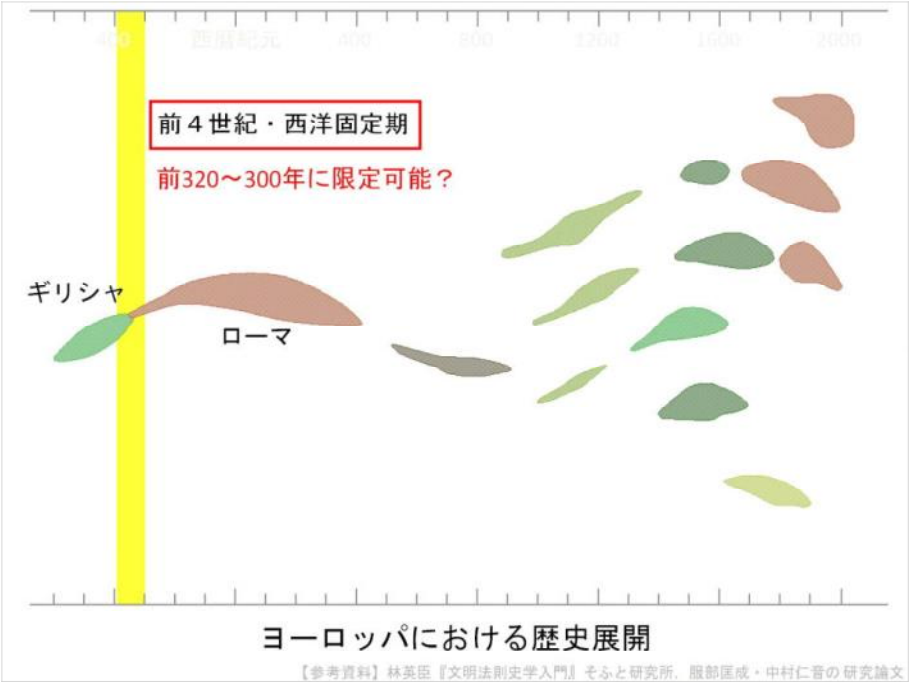
1. **日本**が冊封体制から自立したのは雄略朝（478年）以後だった。
2. 481年の**高句麗**南限と**後高句麗**（9世紀末）の南限が酷似している。
3. **南宋**の領域は**宋**（420～479年）より**齋**（479～502年）の方が近い。
4. **インド**において政治的分裂が顕在化したのは5世紀末葉だった。

「固定期は480～500年の約20年間に存在した」と考えられる。

＜２１世紀、アジアはどうなるのか＞

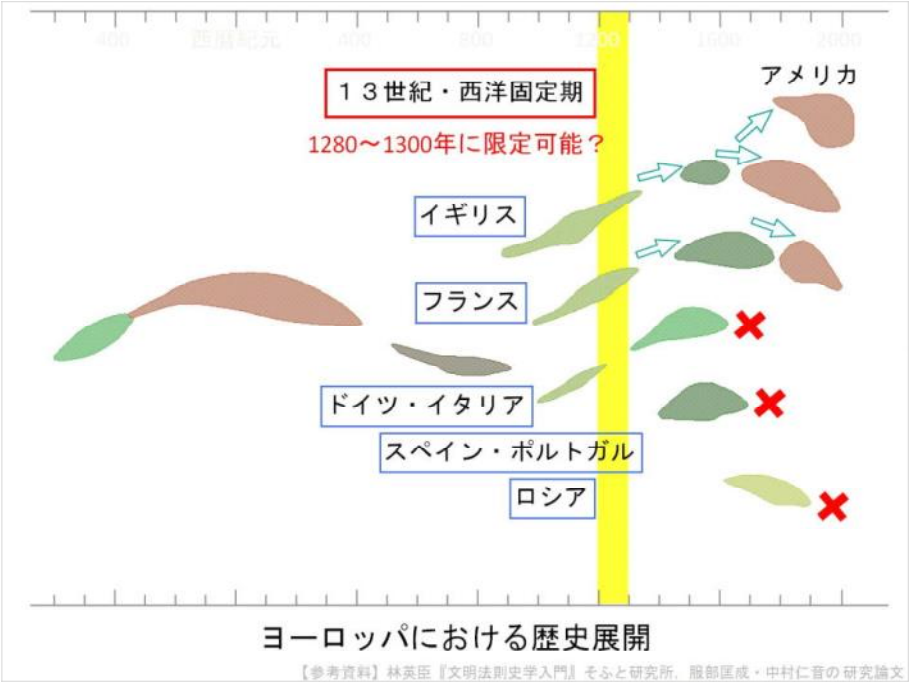
いよいよここから、「今の私たち」の話になっていきます。

まず、大きな論点は「そもそも、5世紀に現れた固定作用は、1600年周期の文明サイクルと連動しているのかどうか？」です。もし文明サイクルと連動していたならば、ヨーロッパにも同じような展開がみられるはずです。



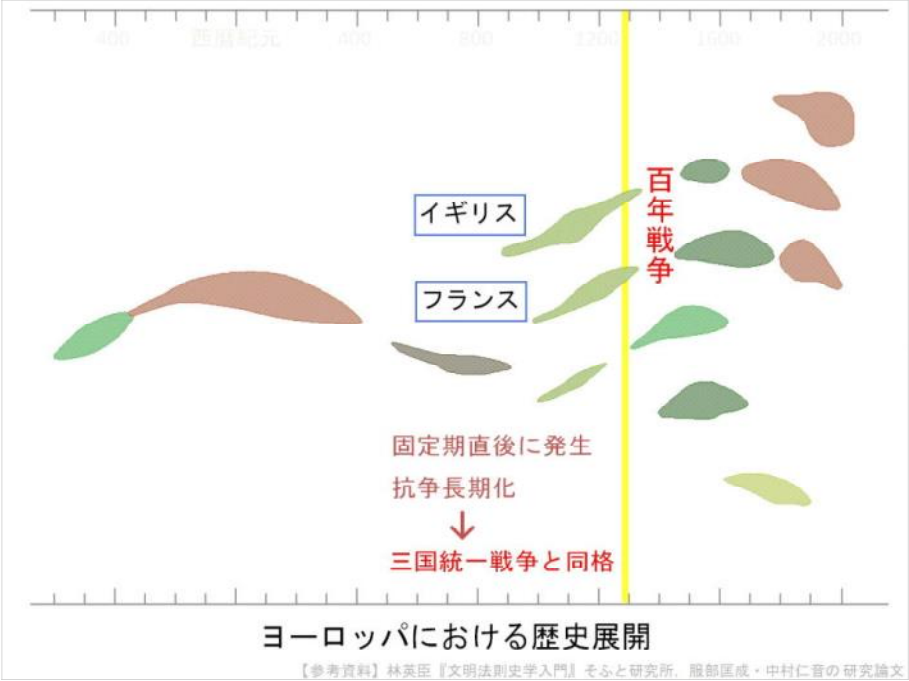
まず、ギリシャからローマにかけて、固定期は黄色の帯で示した時代にあるはずです。ローマ秩序の建設点は紀元前367年（リキニウス・セクスティウス法）ですので、「国の枠組みができた状態で、紀元前320～300年の固定期を迎えたために、後に大帝国に発展することができた」という見立てが成り立ちます。

この関係が一層ハッキリとしているのは、ヨーロッパ文明、最近800年の展開です。



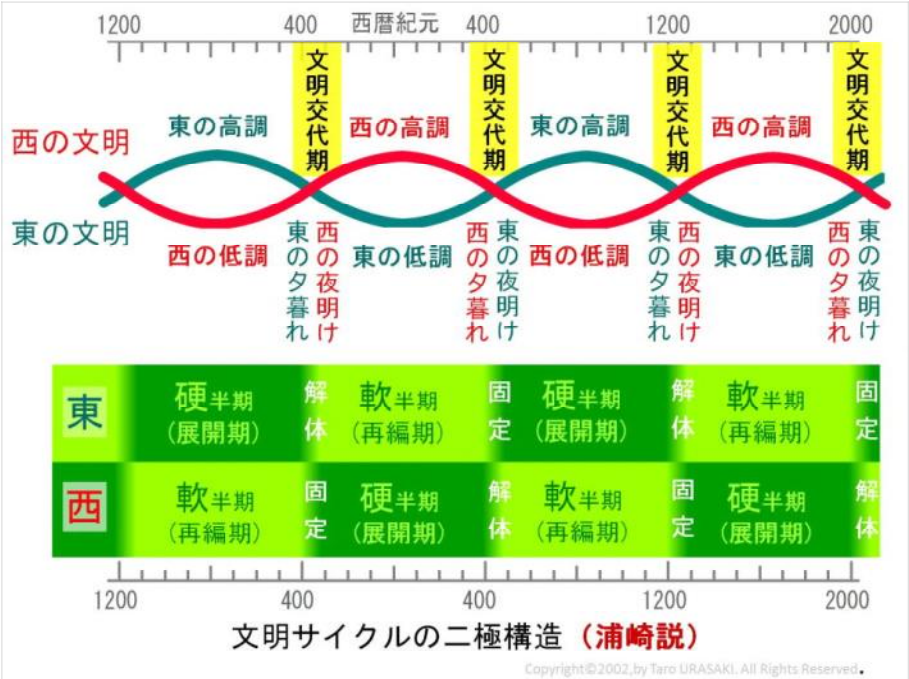
この文明において、長期にわたって主導権を握ってきたのはイギリスとフランスでした。それとは対照的に、ドイツ、イタリア、神聖ローマ帝国は、一時期に栄えただけで終わりました。イタリアルネッサンスは一代限りで終わり、スペイン、ポルトガルも一代限りで終わりました。ロシアもロマノフ王朝が少し栄えただけで終わりました。

その理由は、13世紀、特に最後の20年間に注目すると分かります。「1280～1300年、イギリスやフランスでは、既に完全燃焼型の社会秩序が存在していたのに対して、ドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガル、ロシア等の国には存在せず、不完全燃焼型の社会であった。だから、イギリスとフランスは主役としての寿命が長く、他は短命に終わってしまった。」という解釈が成り立つのです。



イギリス、フランスは百年戦争が起こっていますが、これは韓国の三国統一戦争と同じです。枠組みが固まった後であるがゆえに、抗争が非常に長引いのだと考えられるのです。

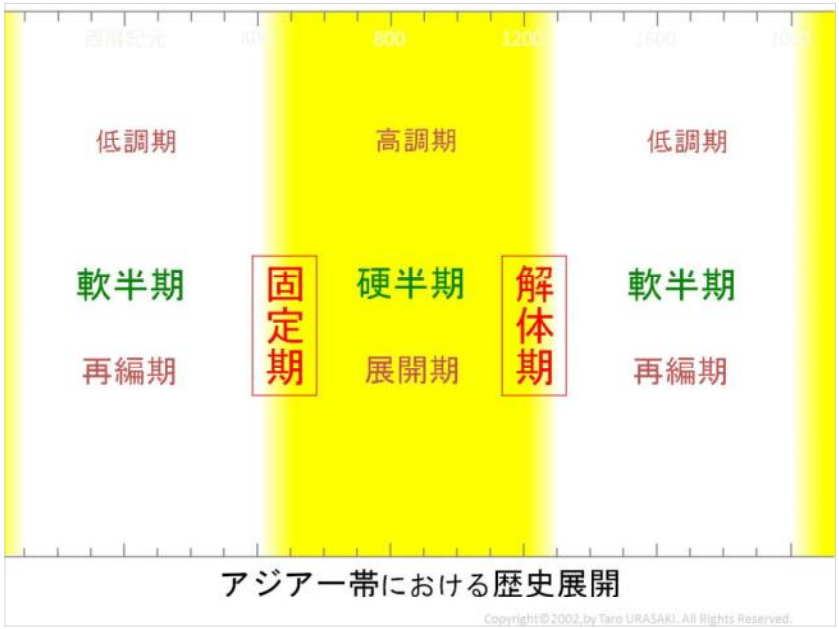
いかがでしょうか。ヨーロッパにおいても、13世紀末の20年間に社会の枠組みが固まり、それが後の歴史に大きく影響したと考えることができます。



以上のように、5世紀末（480～500年）に東洋で発現した固定作用は、その800年前と800年後に西洋で発現しており、「固定作用は文明サイクルに連動した現象である」と考えることができます。

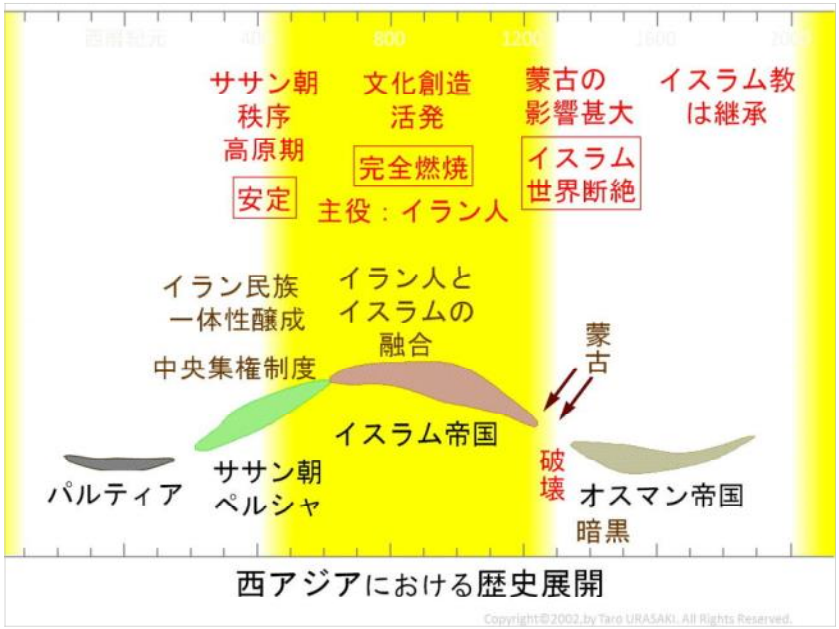
この点をふまえて、改めて、1600年周期の文明サイクルをご覧いただきましょう。上側の二重らせん構造は、オリジナルである村山先生のご見解で、下側の図が、私が文明サイクルに対して加えた新たな解釈です。

私の説は、低調期は「軟らかい時期」「再編期」、高調期は「硬い時期」「展開期」に対応し、低調期から高調期へ移行する時に固定作用が働き、高調期から低調期へ移行する時に解体作用が働く、というものです。つまり、「文明交代期とは、固定作用や解体作用が働く時期」だという訳です。



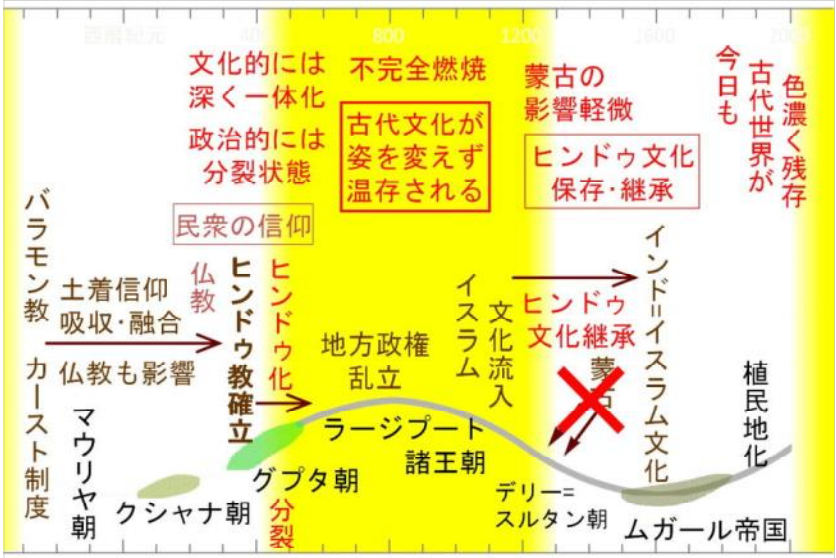
そして、過去の周期性が再現されれば、21世紀は、西洋が夕暮れ、東洋が夜明けを迎える文明交代期になると予見されますが、これは私の説によれば、西洋が解体期、東洋が固定期を迎える時期であるということになります。

そこで、文明サイクルのタイムスケールから「13世紀以後のアジア」を俯瞰してみることにします。



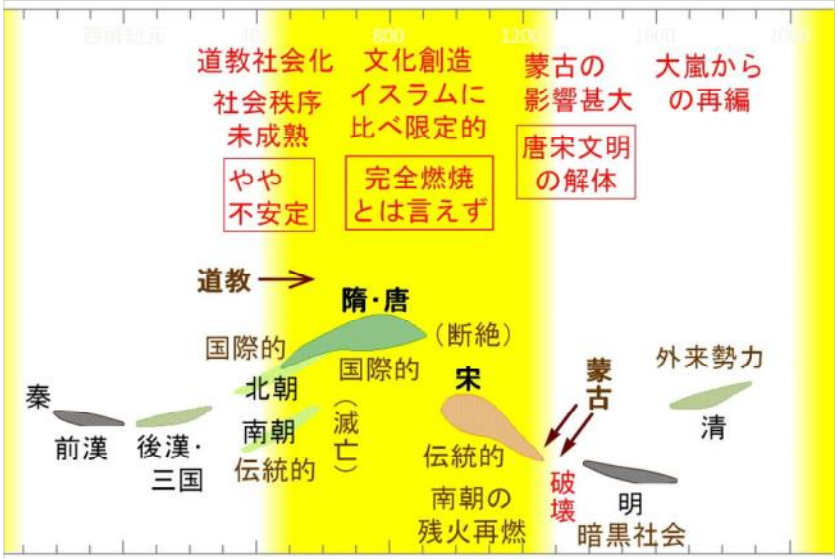
西アジアでは、イスラム文明が長期にわたって繁栄を続けましたが、13世紀の解体期、蒙古による破壊は甚大で、イスラム世界は断絶。以後、オスマン帝国が登場したものの、文化創造力は遠く及びませんでした。

インドでは、「文化的には深く一体化し、政治的には分裂状態」で5世紀の固定期を通過したため、以後、不完全燃焼の時代が長く続きました。また、13世紀の解体期に蒙古の影響を受けていないのもインドの特徴です。以上より、二千年近く前の文化を今日まで連綿と伝えているのがインドである、ということができます。



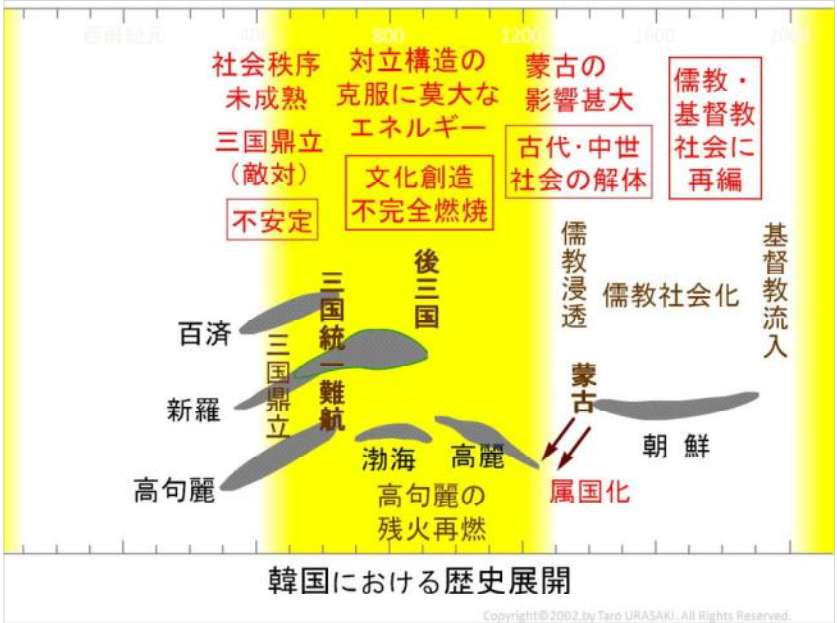
インドにおける歴史展開

中国は、先ほど申し上げましたように、5世紀の固定期を南北が分立した、やや不安定な状態で状態で通過しましたので、イスラムのような完全燃焼社会は登場せず、文化が栄えたのは、隋や唐、宋の一時期だけで終わってしまいました。しかも13世紀の解体期に蒙古の影響を甚大に受けたので、その後は暗い時代が長く続いてしまいました。



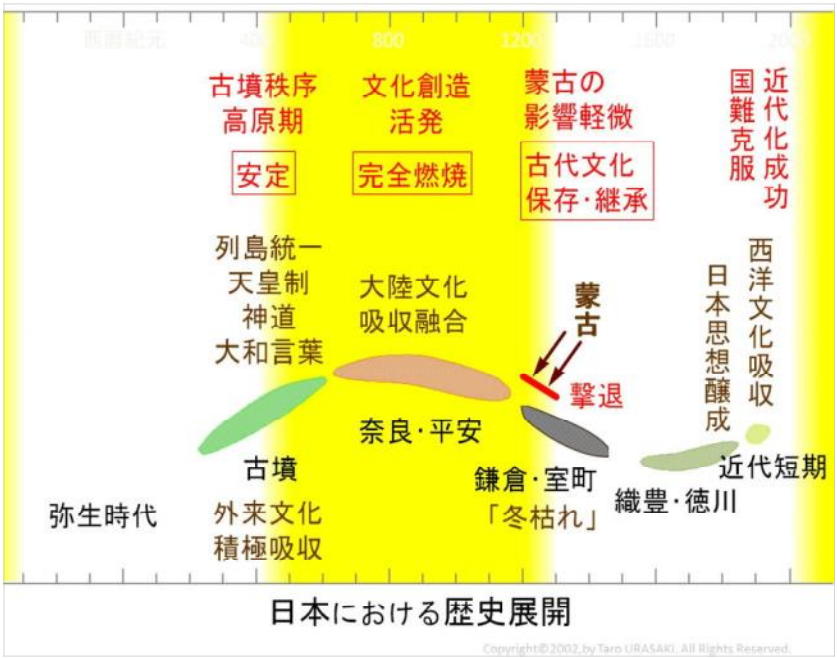
中国における歴史展開

韓国は、先程から何度も申し上げている通りです。しかも、蒙古の影響は非常に甚大。古代～中世社会は解体され、以後、儒教社会化への再編がすすみました。



韓国における歴史展開

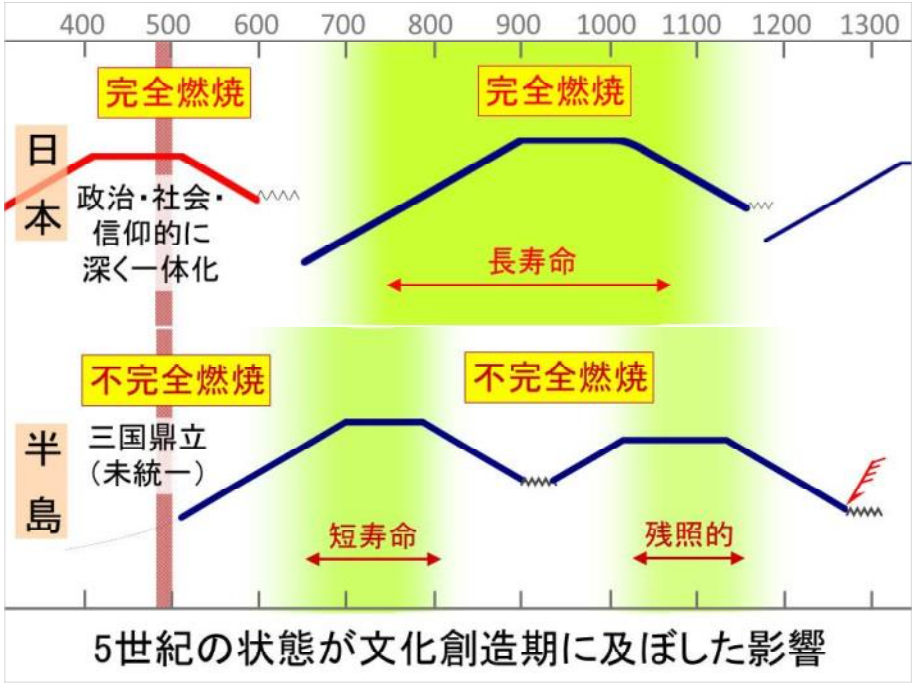
日本は、5世紀の固定期を完全燃焼状態で通過したため、奈良～平安時代の社会的な安定度は高く、に文化創造が活発に行われました。13世紀の解体期は、蒙古の影響もあったとはいえ、これを撃退。その結果、インドと同様、古代文化の保存や継承が実現しました。また、そうした文化的な土壌を礎として、幕末には国難を克服。以後、西洋文明も積極的に吸収し、今日に至っています。

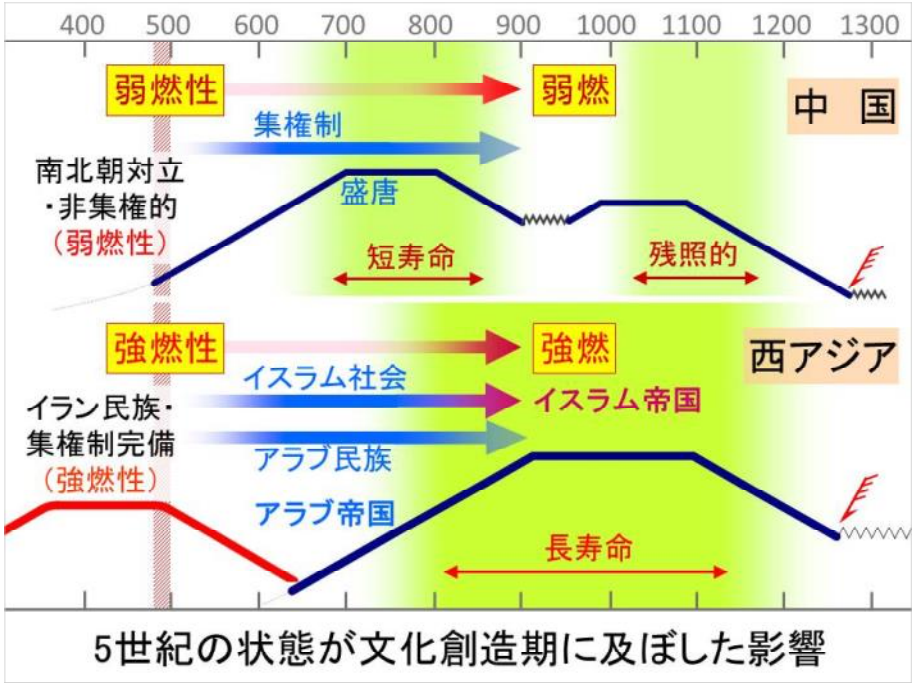


日本における歴史展開

以上、5つの地域の歴史展開をご覧いただきましたが、西洋文明をしっかりと吸収した国や地域は、まだありません。せいぜいここ数十年であって、明治以来百数十年という長い時間をかけて、西洋文明の長所も短所もすべて知り尽くしているのは、まだ日本しかない訳です。ここにアジアにおける日本の特性をみることができます。

ここで重要な点を改めて確認しますと、アジア各地では、5世紀末が完全燃焼か不完全燃焼かによって、その後の運命が決まりました。それは、日本と半島、西アジアと中国を対比すると、ハッキリと分かります。



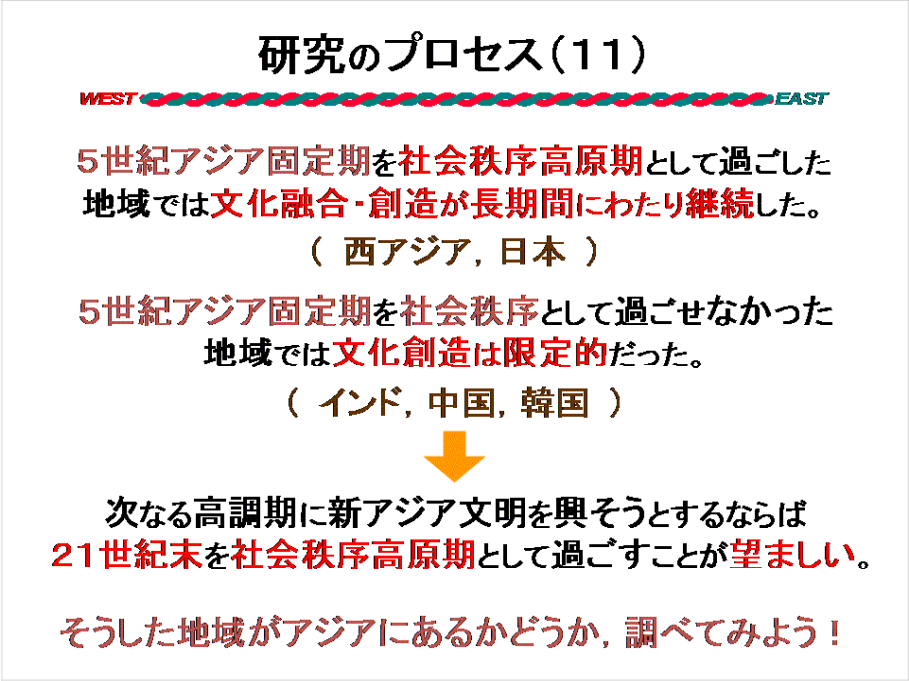


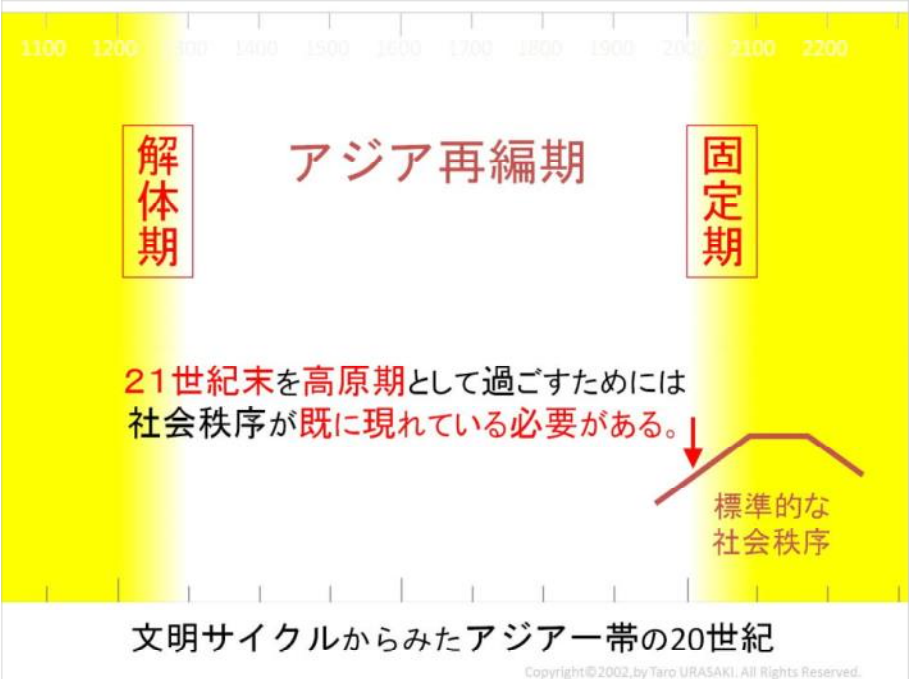
「アジアでは、5世紀末が完全燃焼か不完全燃焼かによって、その後の運命が決まった。」そして「歴史は1600年の周期性をもって繰り返す。」…とすれば、21世紀の課題は必然的に見えてきます。

それは、21世紀の終わり、2080年から2100年までの間に訪れるであろう次の固定期を、完全燃焼型の社会…言葉を変えると「社会秩序の高原期」…で迎えるのがベストである、ということです。

前回、1600年前の日本は、5世紀末の固定期を古墳秩序の全盛期で通過しましたが、まさにそのような形で21世紀末を迎えるのがベストである、ということです。

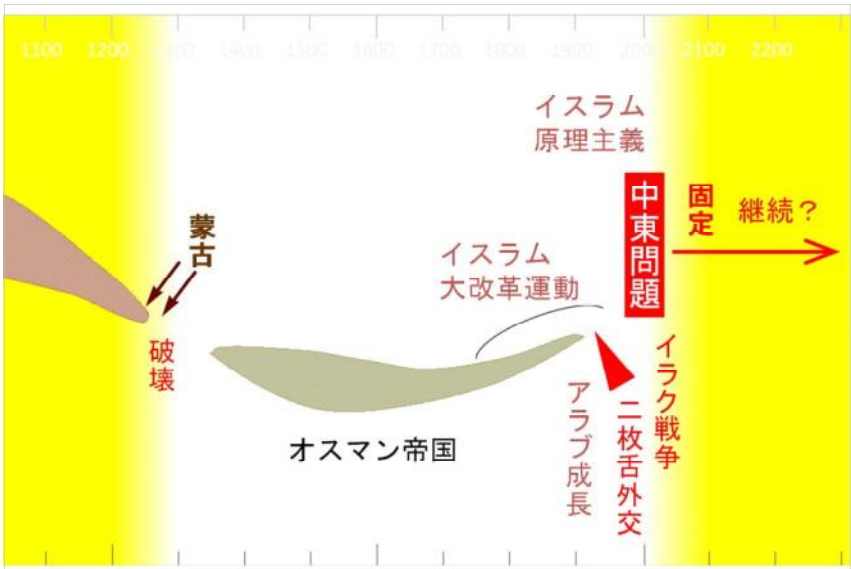
社会秩序の寿命を考慮すると、そのためには21世紀初頭の時点で新たな社会秩序が誕生している必要があるのですが、現状はどうなのか。そんな視点で21世紀初頭のアジアを概観してみることにしましょう。





西アジアは、中東問題、アラブ諸国の不安定化、イスラム原理主義勢力の台頭等、ガタガタに荒れています。南アジアには、インドとパキスタンの対立等、不安定要因があります。中国が国内的にも国外的にも多くの不安定要因を抱えていることは、日々のニュースから明らかでしょう。朝鮮半島も、韓国と北朝鮮の対立等、きわめて不安定な状態です。

日本も近代化までは順調でした。また、戦後は経済的には栄えたかもしれませんが、その一方で民族的なプライドや古き良き伝統文化は無造作に葬り去られていきました。



文明サイクルからみた西アジアの20世紀

Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

文明サイクルからみたインドの20世紀

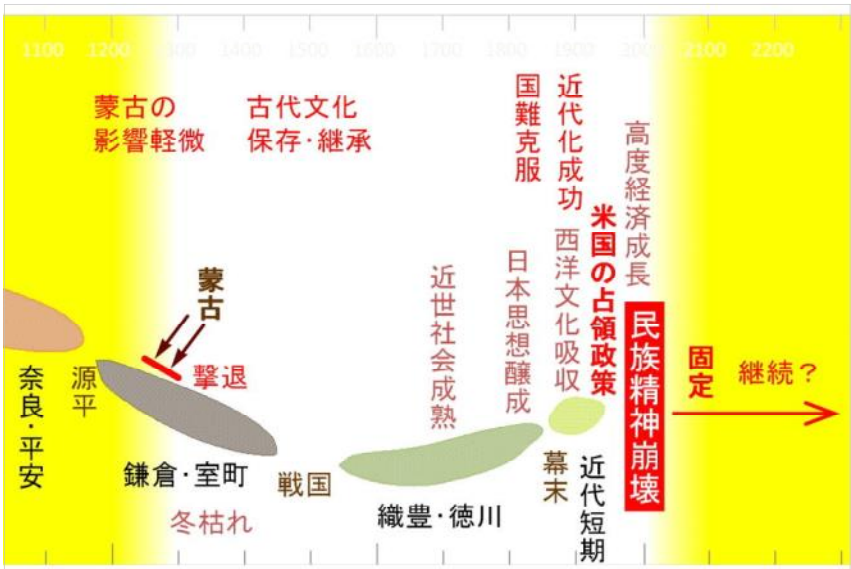
Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

文明サイクルからみた中国の20世紀

Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

文明サイクルからみた韓国の20世紀

Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.



文明サイクルからみた日本の20世紀

Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

以上、「どこかに新たな社会秩序が誕生しているどころか、全域的に不安定な状況に覆われているのが21世紀初頭のアジアである。」ということができます。もしこのままの状態で21世紀末に新たな枠組みが固定されてしまったならば、次の800年間、アジア全体が、かつての朝鮮半島のような状態となり、文化創造力が低迷することは必定です。

文明法則史学を表面だけ学ばれた方には、「21世紀はアジアの時代である」「ヨーロッパ文明に代わって新アジア文明が興る」という楽観論をお持ちの方が多いですが、それはあくまでも「完全燃焼状態で21世紀末を迎える地域があれば」という前提条件が成立した上での話です。

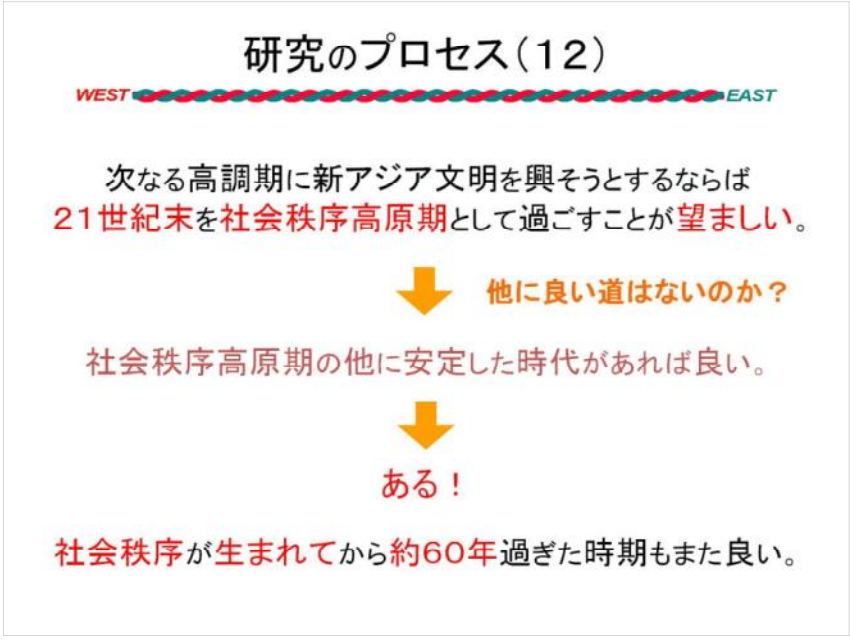
「このままで、新アジア文明が興ることはない。」… そう警鐘を鳴らしておきたいと思います。

＜私たちの使命は何なのか＞

このような好ましくない状況に対して、私たちは何をしていかなければならないのか。

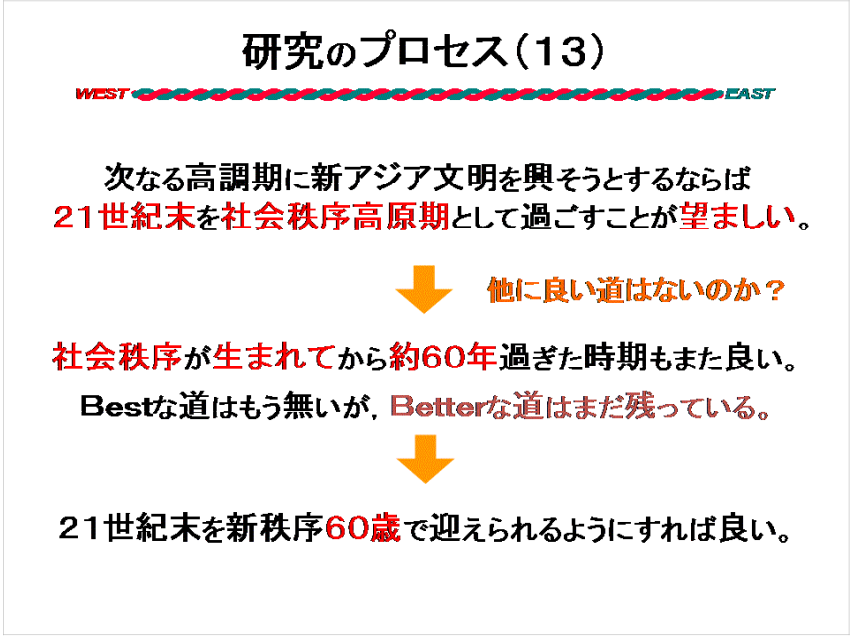
理想的には、先ほど申し上げましたように、21世紀末を完全燃焼型の社会、全盛期で迎えるのがベストなのですが、私たちにはもうその選択肢は残されていません。

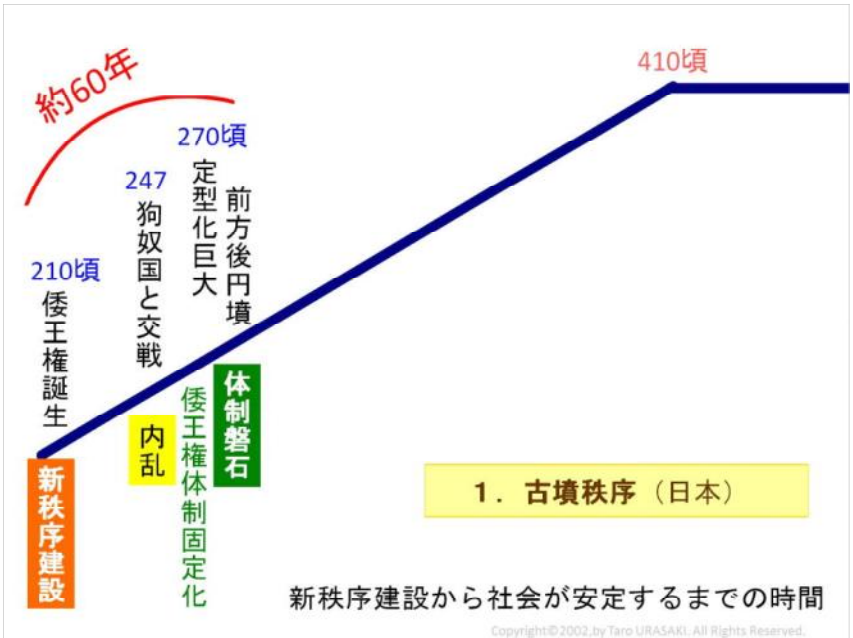
代わりはないのかと考えると、ただ一つだけ方法があります。「社会秩序が誕生してから60年後を活かす」方法です。

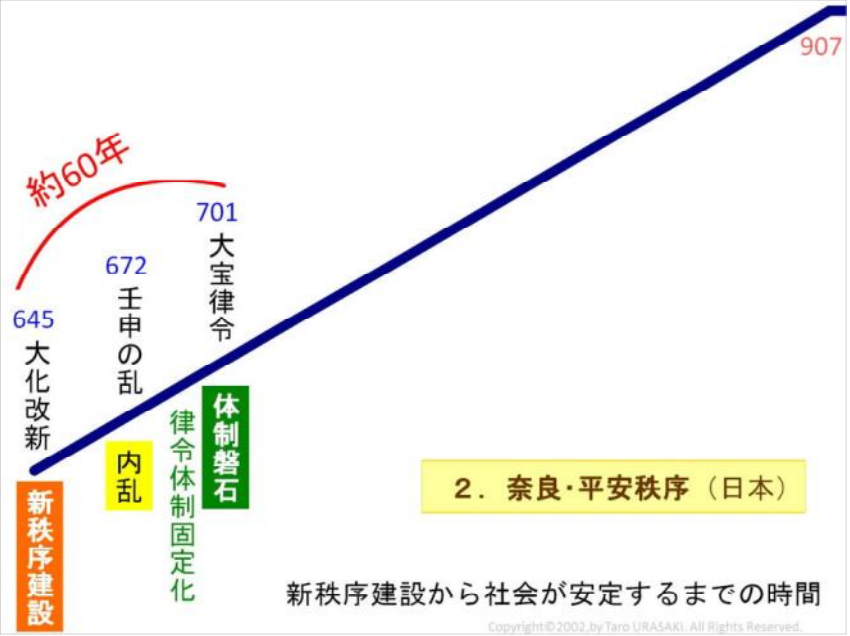


実は、新しい秩序が誕生してから30年ほど経っと、内乱的な事件が発生するなど、社会は一時的に不安定になるのですが、その後は急速に収束し、新秩序が誕生して60年後には非常に安定した時期を迎えます。この時期を活用するのです。

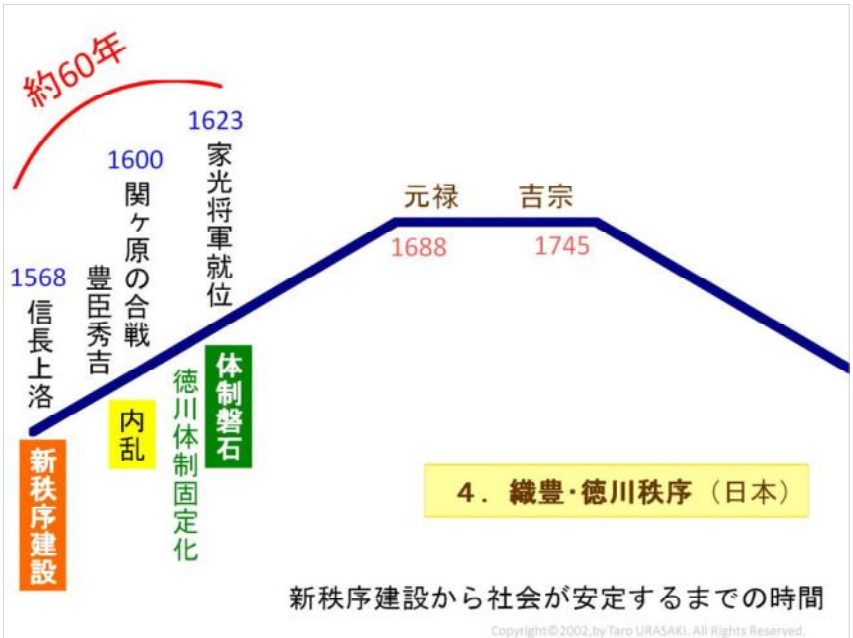
ここで、過去いくつかの社会秩序について、成長期の展開をみてみることにしましょう。



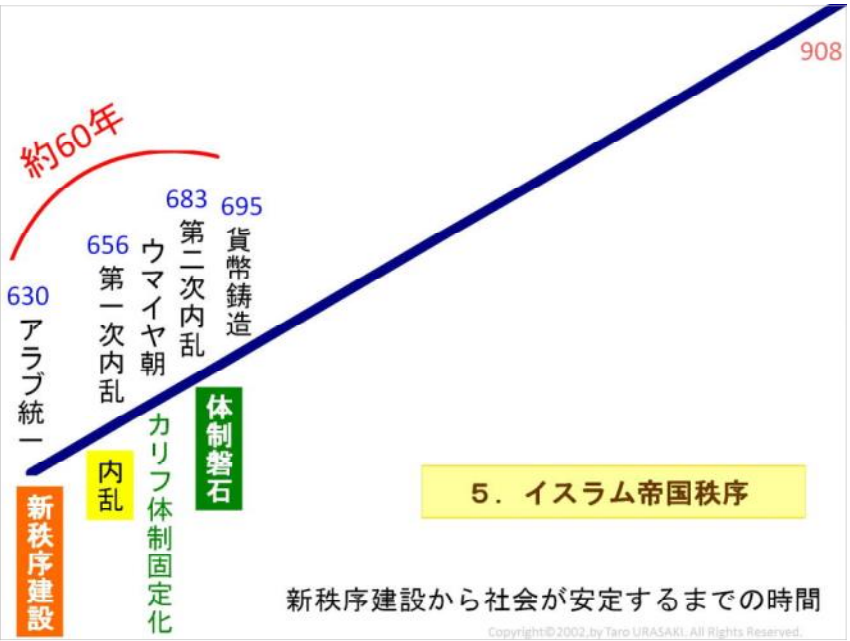

約60年
410頃
270頃
247
210頃
定型化巨大
前方後円墳
狗奴国と交戦
倭王権誕生
体制磐石
倭王権体制固定化
内乱
新秩序建設
1．古墳秩序（日本）
新秩序建設から社会が安定するまでの時間
Copyright© 2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.


907
約60年
701
672
645
大宝律令
壬申の乱
大化改新
体制磐石
律令体制固定化
内乱
新秩序建設
2．奈良･平安秩序（日本）
新秩序建設から社会が安定するまでの時間
Copyright© 2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

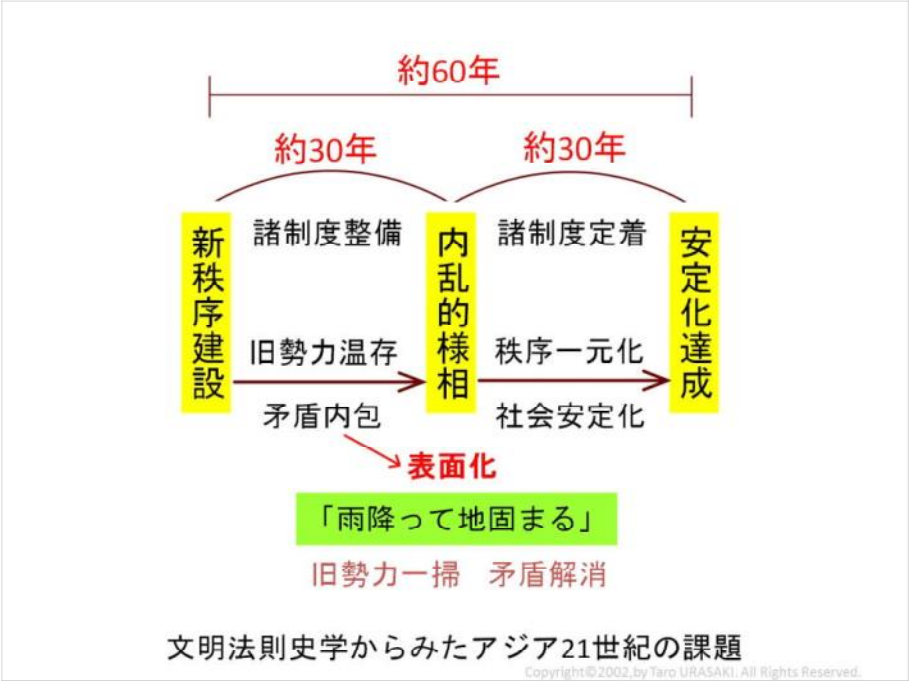
約60年
1247
義満
1333
1407
1221
1192
三浦一族滅亡
承久の乱
鎌倉開府
（北条執権体制確立）
体制磐石
武家社会固定化
内乱
公武二重体制
新秩序建設
3．鎌倉･室町秩序（日本）
新秩序建設から社会が安定するまでの時間
Copyright© 2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.


約60年
1568
信長上洛
1600
豊臣秀吉
関ヶ原の合戦
1623
家光将軍就位
新秩序建設
内乱
徳川体制固定化
体制磐石
元禄
1688
吉宗
1745
4．織豊・徳川秩序（日本）
新秩序建設から社会が安定するまでの時間
Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

約60年
前202
劉邦 前漢建国
前154
呉楚七国の乱
文帝時代
前141
武帝即位
新秩序建設
内乱
体制磐石
前141
前49
6
4．前漢秩序（中国）
新秩序建設から社会が安定するまでの時間
Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.


908
約60年
630
アラブ統一
656
第一次内乱
683
ウマイヤ朝
第二次内乱
695
貨幣鋳造
新秩序建設
内乱
カリフ体制固定化
体制磐石
5．イスラム帝国秩序
新秩序建設から社会が安定するまでの時間
Copyright©2002,by Taro URASAKI. All Rights Reserved.

説明は省略しますが、どの社会秩序でも、生まれてから30年後に不安定な時期を迎え、さらに30年経つと、盤石な体制が確立する様子がお分かりいただけると思います。

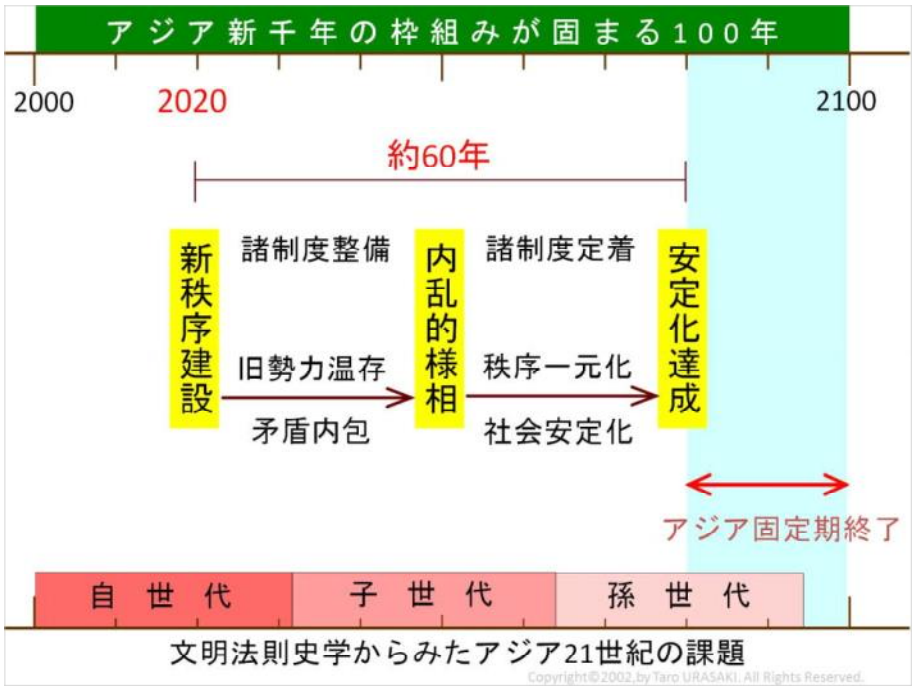


この構図を再現してみましょう。新しい秩序が誕生すると、少しずつ制度が整う一方で、当初はまだ、昔からの古い勢力が残ったままになっています。つまり矛盾を抱えたままということです。

そして、種々の矛盾が表面化してくるのが、新秩序誕生からおよそ30年経った頃だと考えられます。ここで上手くいけば、「雨降って地固まる」ということになります。それによって旧勢力は一掃され、矛盾が解消されます。

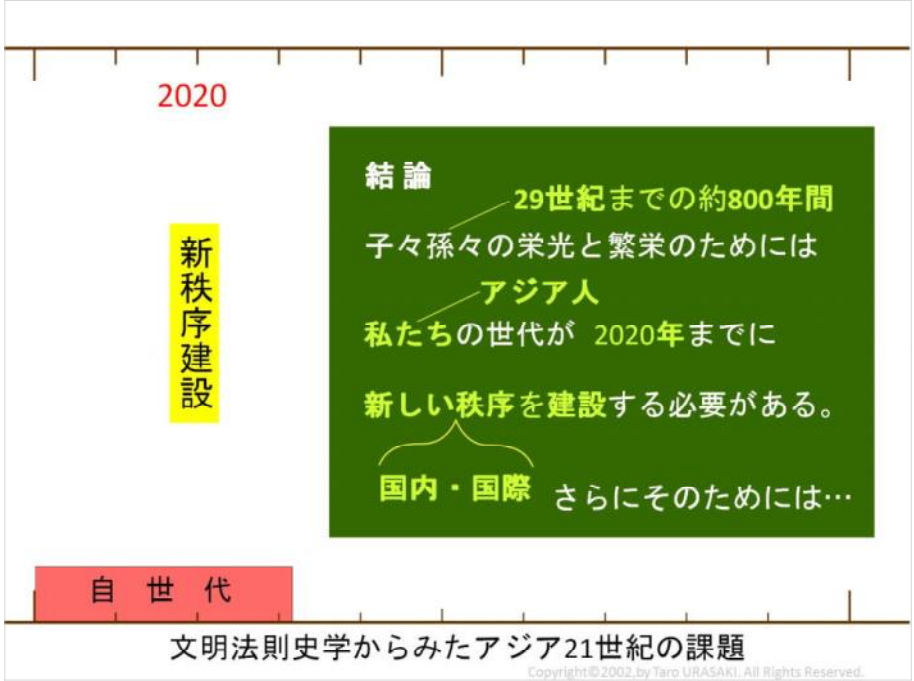
その後、秩序が一元化し、制度がしっかり定着し、社会が安定していきますが、30年も経つと、安定化は見事に達成されます。つまり、新しい秩序が誕生してから約60年後には、とても良い時期を迎えるということです。

ただ、中には80～90年かかった例もあるので、その点は記憶の片隅に置いておいていただきたいと思います。



私たちに残された選択肢は、一つです。それは「21世紀末、具体的には2080年という時期を、新秩序60歳で迎えられるようにする」こと。幸い、この選択肢は、私たちにはまだ残されています。
そこで、21世紀の百年間はどういう時期なのか、それを表現したのが先の図です。

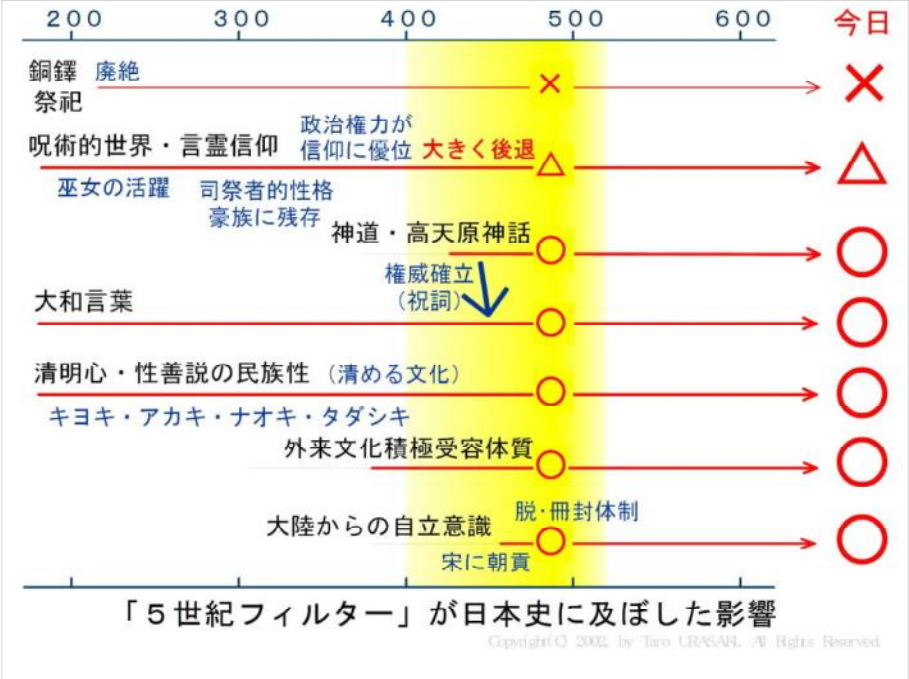
アジアの新しい枠組みが固まる百年は、私たちの生きる時代、子どもの生きる時代、孫世代の生きる時代で構成されます。
実際、固定作用が働くのは最後の20年、2080～2100年のどこかと考えられますので、固定期を完全燃焼状態で迎えるためには、社会の安定化を2080年までに達成する必要があります。つまり、2080年に新しい社会秩序が60歳を迎えていないといけませんので、そこから60年を逆算をすると、新しい社会秩序を誕生させるべき時期は、2020年になります。



したがって、結論として、私たちがしなければならないことは、29世紀までの800年間、世代でいうと20～30代先ということになりますが、そこまで、子々孫々のことを思ったならば、私たちの世代が、この2020年までに新しい秩序を打ち立てていくことだということができます。
これはアジア全体に関わることであり、各地域における国内秩序もそうですし、多国間の国際秩序も同様です。

繰り返しますが、もし今の状態が固定されてしまったならば、これからのアジア800年間が、先ほどご紹介した韓国の三国鼎立状態のようになり、文化的に低迷した状態が続いてしまいます。対立構造の克服にのみエネルギーが費やされ、文化を発展させるエネルギーがなくなってしまうのです。
それとは対極的な理想像は「日本の5世紀」に見いだすことができますので、この時代が後世にどれほど影響を及ぼしたか、さらに詳しく見ていくことにしましょう。

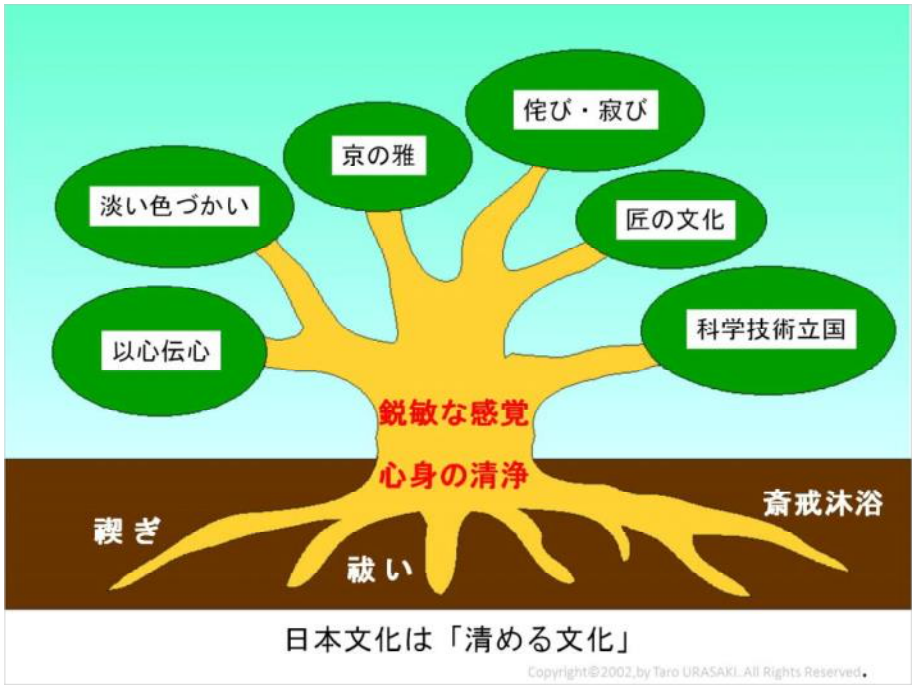
銅鐸祭祀は3世紀に廃絶された結果、今日には伝わっていません。
弥生時代には、巫女が活躍する呪術的な世界が支配していましたが、政治権力の介入等によって大きく後退はしたものの、消失はしませんでした。その結果、呪術的な世界は今もかすかに残っています。



神道や高天原神話は5世紀を通して確立しましたが、これは5世紀末に固定されたので、今日まで伝わっています。

大和言葉は昔からありましたが、高天原神話の祝詞によって権威が確立され、5世紀末に固定された結果、今日まで伝わっています。

そして、キヨキ・アカキ・ナオキ・タダシキ民族性、これは清める文化です。清めることによって感覚が鋭敏になっていくというのは、日本人の特徴だと考えられます。この特性も5世紀を無事に通過したので、今日まで伝わっています。典型例は「掃除に学ぶ会」ですね。

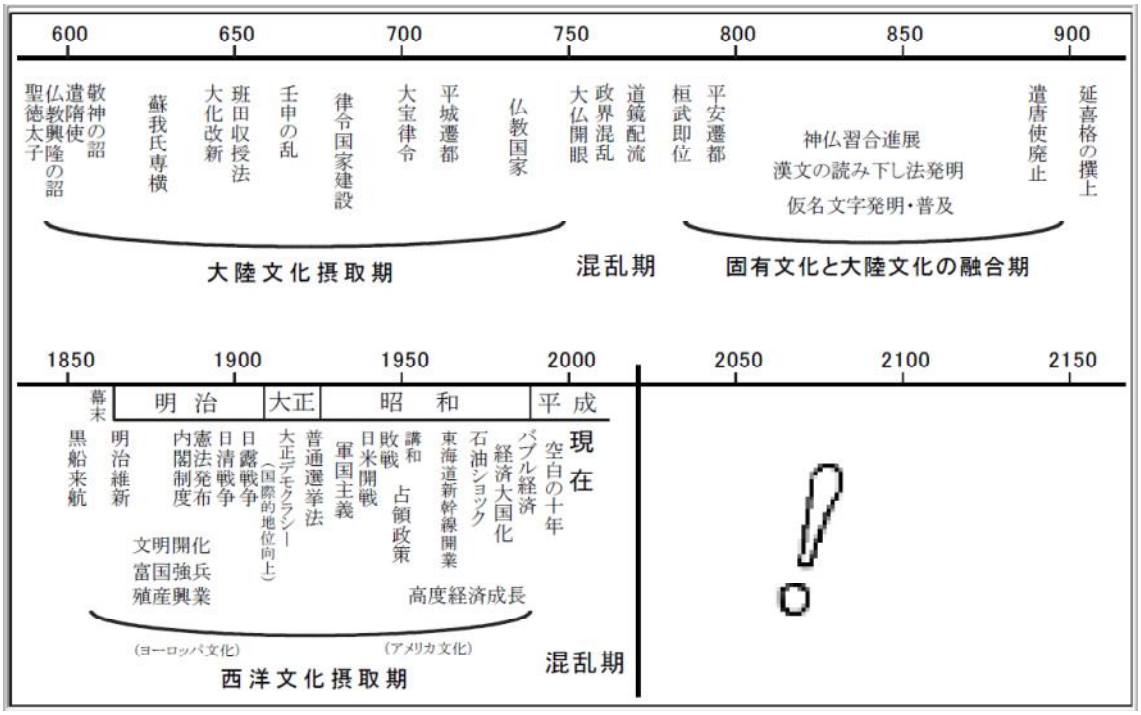


外来文化を積極的に取り入れる姿勢は、古墳秩序の成長期に現れたもので、5世紀末に固定され、民族的な特性として伝えられました。そしてそれは、明治時代、西洋文化の吸収において最高度に発揮されました。

大陸からの自立意識も、5世紀末、実にギリギリのタイミングで現れたものですが、固定期に間に合ったため、今日まで残ることとなりました。

以上のように、日本の様々な民族的特性は、5世紀末を通過できたか否かにより、今日まで残ったか否かが決まったことが分かります。

こうした経緯を参考にすると、私たちが今なすべき事は、必然性をもって浮かび上がります。それはすなわち、いま私たちが持っている様々な文化の中で、何を残し、何を捨てるのか、その取捨選択をハッキリとさせることです。
ここで、何を捨てて残すかを考えるためには、民族意識、民族的なアイデンティティをしっかりと持つことが必要です。それが今現在、私たち日本人にとって極めて重要な課題であると考えています。

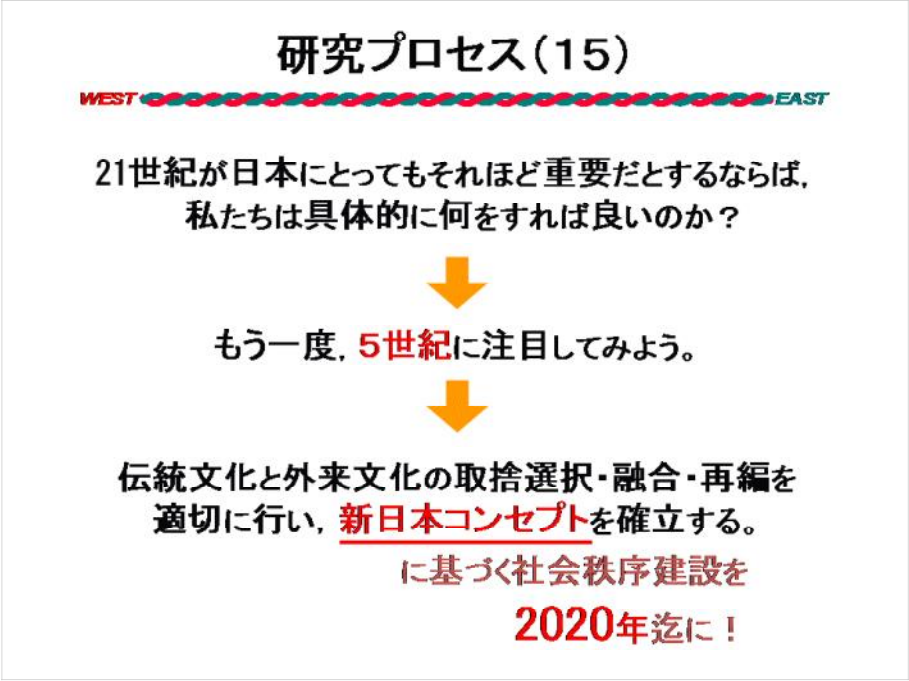


「何を捨てて、何を取り入れるべきか」…実は本当の意味で、固有の文化と外来の文化を融合していくのは、これからの課題だと思います。

大化の改新から奈良時代までが、およそ百数十年。そして明治維新から現在までが、およそ140～150年。だいたい同じ時間です。
日本がそれまでに吸収した大陸文化を固有文化とじっくり融合しはじめたのは、大化改新から140～150年過ぎてから後のことです。そのようなタイムスケールで考えたならば、私たちが本当の意味で、伝統的な日本文化とヨーロッパの文化を融合させていくのは、これからの時期であろうと考えています。

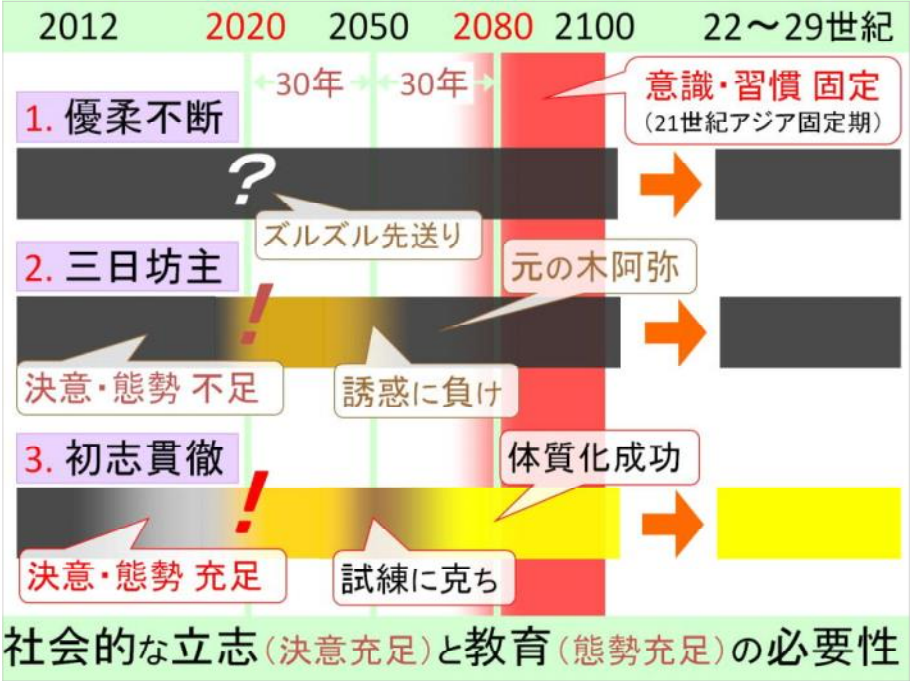
それで再び「清める文化」ですが、これは今後も日本の優れた民族性として、ぜひとも残していきたいと考えています。日本人の持つ鋭敏かつ繊細な感覚の根本には、この「清める文化」…禊(みそ)ぎ、祓(はら)い、斎戒沐浴(さいかいもくよく)…があり、これは日本の強みにあたる部分ではないかと考えます。

以上、改めて5世紀に注目してきましたが、取捨選択を適切に行って新しい日本のコンセプトを作り、そのコンセプトに基づいて、新しい日本の社会秩序を2020年までに打ち立てることが非常に重要である、ということを確認させていただきたいと思います。



では最後に、「今日お話ししたことは本気でやっていかなければならないですよ」ということをお話ししたいと思います。

人間で「優柔不断」な子は、何事もズルズルと先送りし、ひとつのことを成す事はできません。これは歴史における社会でも同様です。



何か新しいことを始める時、「三日坊主」という言葉がありますが、社会において「三日」とは30年にあたります。はじめの30年間はなんとか続くけれど、その後は誘惑に負け、元の木阿弥になってしまうのが「三日坊主」です。一例として、ソ連の歴史はこの類だったと思います。

そして「初志貫徹」。三日目ぐらい、つまり30年後あたりに危機的状況があったとしても、それを克服するだけのパワーを持ってれば、その後、体質化に成功できます。

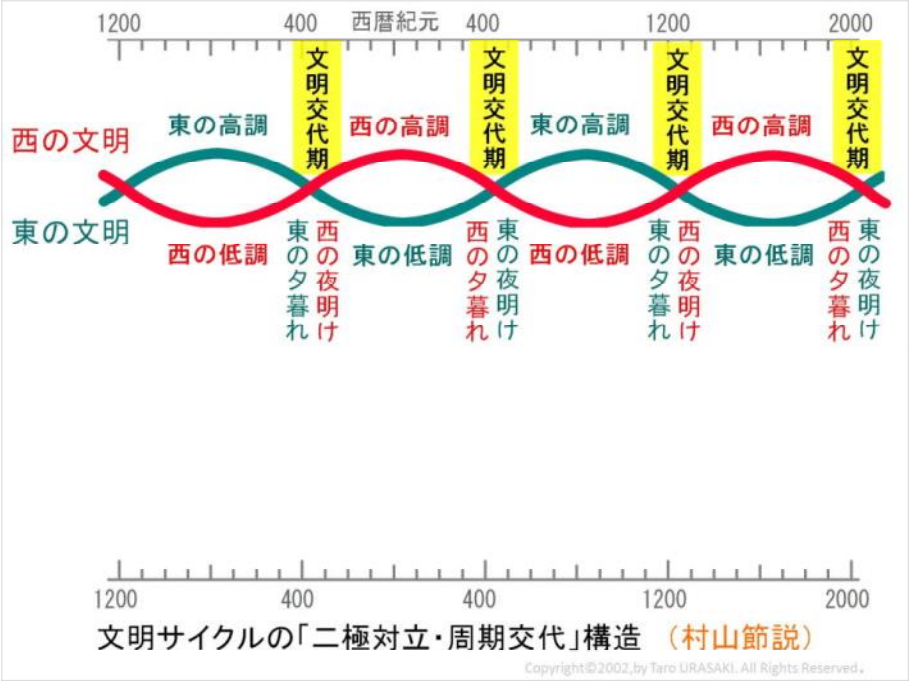
つまり、社会的な決意や態勢が不足している場合と充足している場合とで、生み出される結果が全く違うのです。
その差が2080年から2100年の間に効いてきて、「優柔不断」や「三日坊主」だとその後ズルズルと未熟なまま流れて行ってしまうのに対し、「初志貫徹」できた場合、すなわち、本気になって社会的な立志や教育に取り組んだ場合のみに、私たち日本にとっても、アジアにとっても、明るい文明高調期というものが約束されます。

私たちが目指していかなければならないのは、この初志貫徹のスタイルなのです。

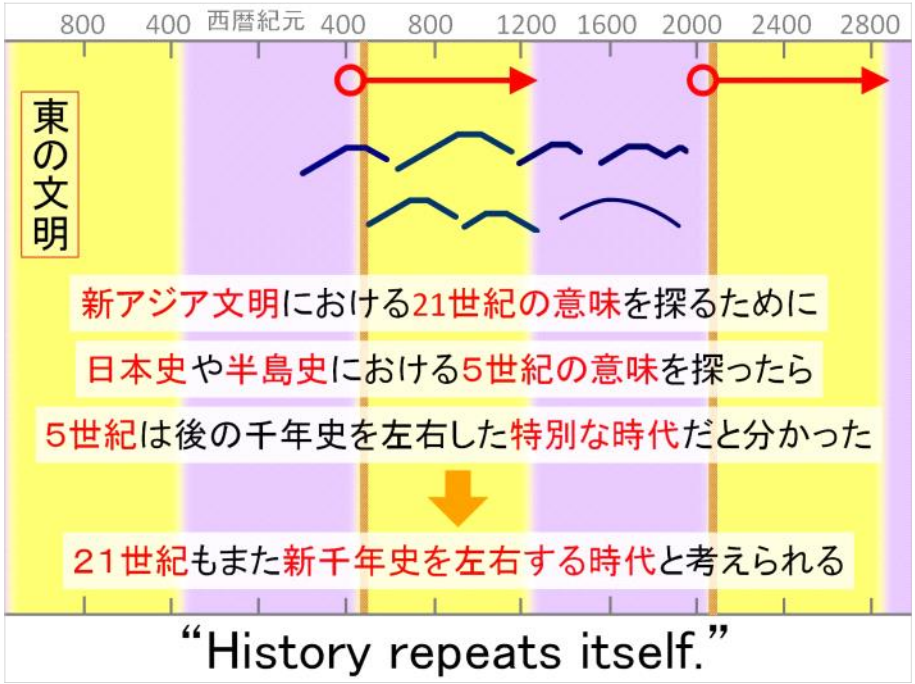
<まとめ>

では本日のまとめをさせていただきます。

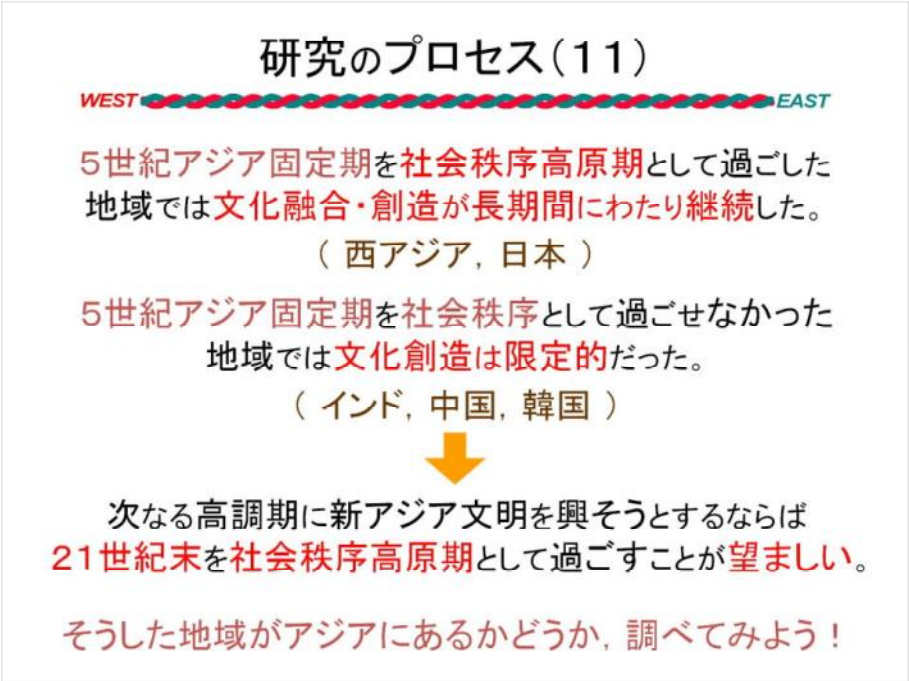
文明には1600年の周期があり、21世紀は、東洋文明が夜明けを迎える文明交代期です。



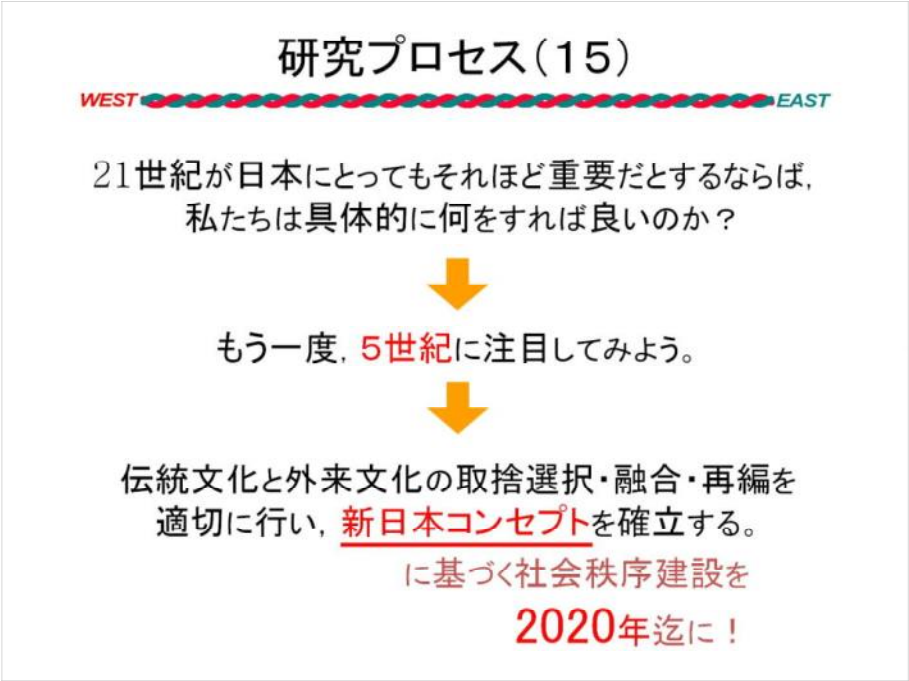
そこで5世紀に注目したところ、5世紀は、その後の文明の興隆を左右するきわめて大切な時期だったことが分かりました。



またそこから、21世紀の課題は「2080年を完全燃焼型の社会で迎えること」だと分かりました。



そしてそのためには、2020年までに新しい社会秩序の灯を点し、アジア新800年の礎を築くこと。それが私たちに与えられた極めて重要な務めである、ということです。



このことを最後に申しあげまして、今日の話を終わらせていただきます。

長い時間、ご清聴ありがとうございました。

2020年 アジア・ターニング・ポイント説 概要

古今東西の歴史には1600年の周期性（文明法則史学）

↓ 21世紀の位置は？

西洋から東洋に高調期（21～29世紀）が移る 文明交代期

↓ 5～13世紀の文化創造力に注目

日本は 長期・活発，半島は 短期・残照的

480年頃，日本は完全燃焼，半島は不完全燃焼社会だった

↓ 1600年後に還元

21世紀アジアの課題 2080年を完全燃焼状態で迎えること

↓ 社会の燃焼安定には60年必要

私たちの課題 2020年，アジアに新秩序の灯を点すこと

（アジア新800年の確固たる礎を築くこと）

＜質問コーナー　２＞

国の文化の興隆や衰退は、そこに暮らす人々の面相にも現れるものでしょうか？

今でも活気のある国とそうでない国とでは、その国の様子をビデオに収めたならば、画像からハッキリとその差は感じられると思います。
それと同じことが、同じ国の中でもあると思います。
「三丁目の夕日」という昭和３０年代の日本人の日常生活を描いた映画がありますが、あれを見ると当時の日本の活気がよく分かります。
ですから人の面相にも、その国の文化の状態が現れているのではないかと思います。

山口百恵の「いい日旅立ち」の中で大和言葉が使われ、それが心にしみるというお話でしたが、具体的に歌詞のどの部分が大和言葉なんでしょうか？

それは歌詞の中に訓読み言葉しかないということです。
例えば、冒頭の「雪解け（ゆきどけ）」。音読みだと、雪は「せつ」、解けは「かい」ですね。「ゆき」「どけ」、どちらも訓読みです。
このように歌詞の中に漢字が使われていても、すべて訓読みで使われています。つまり見かけは中国からの外来語かもしれないけれど、音(おん)としては完全に日本の伝統的な言葉なのです。

お話の中で、東洋、西洋という言葉がたびたび出てきましたが、これはどの範囲をさすのでしょうか、明確な基準がありますか？

これはだいたいトルコのイスタンブールのあたりでしょうか。イスタンブールより西だと西洋で、それより東だと東洋かなという感じに思っています。その裏側は、村山先生は、「南アメリカのインカ・アステカ、あのあたりは東の文明だ」とおっしゃっていますが、私はまだその正否を判定できるまで研究を深めていません。

オーストラリアはどうでしょうか？

オーストラリアは地理的には東の文明圏に属すると考えられますが、今後、東の一員として文明を栄えさせていくのかどうかは、今後を見ていかなければ分かりません。

<MEMO>